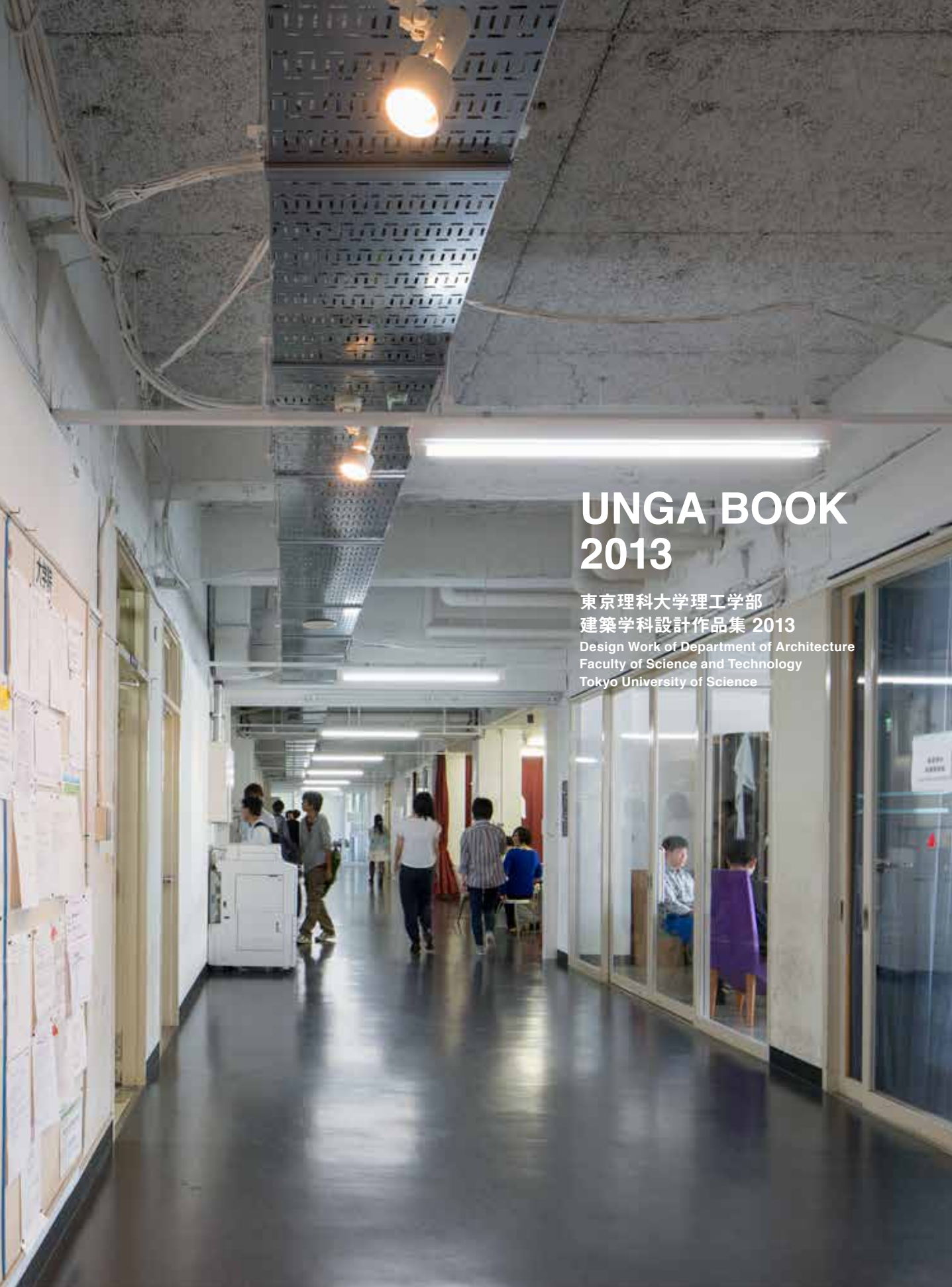


UNGA BOOK 2013

東京理科大学理工学部
建築学科設計作品集 2013

Design Work of Department of Architecture
Faculty of Science and Technology
Tokyo University of Science

インタビュー・鼎談
Interview, Dialogue

004 **建築的分析と統合を追求した20年**
インタビュー:上原孝雄
聞き手:高安重一 ＋ 大宮喜文
Interview: Takao Uehara
Interviewer: Shigekazu Takayasu + Yoshifumi Ohmiya

028 **建築構造の意味を体験から学ぼう!**
鼎談:北村春幸 × 衣笠秀行 × 永野正行
Dialogue:
Haruyuki Kitamura × Hideyuki Kinugasa × Masayuki Nagano

講評審査会
Design Thesis Review Committee

008 **2013年度修士設計講評審査会**
2013 MArch Design Thesis Review Committee

018 **2013年度卒業設計講評審査会**
2013 BArch Design Thesis Review Committee

教員紹介

032 **教授・准教授・助教**
1 ～ 3年生担当 非常勤講師
060 **4年生　ユニットマスター**
068 **修士1年生　ユニットマスター**

UNGA BOOK 2013
東京理科大学理工学部
建築学科設計作品集 2013
Design Work of Department of Architecture
Faculty of Science and Technology
Tokyo University of Science

目次／Contents

設計作品
Design Work by Students

034 **1年生 1st Year［空間デザインおよび演習 Ⅰ＆Ⅱ］**
光の箱
Light Box
ピクニック
Picnic
あなたの部屋を空間化せよ
Transform Your Room into Space!

038 **2年生 2nd Year［設計製図 Ⅰ＆Ⅱ］**
「別荘＝もうひとつのイエ」を設計する
Design A Villa = Second House
20年後の私の家
My House after 20 Years
家具のパビリオン
Furniture Pavilion
21世紀の都心居住譫賭コミュニティの再生
Urban Residences for the 21st Century – Revitalizing Communities

046 **3年生 3rd Year［設計製図 Ⅲ＆Ⅳ］**
一枚の紙から
From One Sheet of Paper
都市のツボ
―グローバルな観光拠点としての歌舞伎町再興計画―
A Vital Point in the City: Renewal Plan for Kabuki-cho as a Center of Urban Tourism
自分の通った小学校の現代化プロジェクト
Project to Modernize Your Own Grade School
Multienzyme Architecture Complex@Shibamata
―柴又に魅力的な「流れ」をつくり出す、多機能な建築を提案する―
Multienzyme Architecture Complex Shibamata
– Propose Multifunction Architecture to Create Attractive Flows in Shibamata

054 **3年生 3rd Year［設計演習］**
伊藤香織・中畑昌之 Kaori Ito & Masayuki Nakahata Unit
Hidden Landscape
井出 建 Takeshi Ide
都市という現場
柄沢祐輔 Yuusuke Karasawa Unit
ダイアグラム生成
川向正人 Masato Kawamukai Unit
流山市旧市街のまちづくり提案
安原 幹 Motoki Yasuhara Unit
コンペティションに挑戦しよう
横尾 真 Shin Yokoo Unit
Learn About the Structure Design

060 **4年生 4th Year［建築設計・都市設計 Ⅰ＆Ⅱ］**
安原幹ユニット Motoki Yasuhara Unit
オフィスビル
Office Building
垣内光司ユニット Koji Kakiuchi Unit
東京案内
Guide to Tokyo
長田直之ユニット Naoyuki Nagata Unit
A House is Not a Home
A House is Not a Home
佐藤光彦ユニット Mitsuhiko Sato Unit
駅と建築
Rail Stations and Architecture
伊藤香織ユニット Kaori Ito Unit
創造的に生きること
Living Creatively
今村創平ユニット Sohei Imamura Unit
New Pavilion/ Café in the Royal Botanic Gardens, Kew
New Pavilion/ Café in the Royal Botanic Gardens, Kew
西田司／オンデザインユニット Osamu Nishida/ Ondesign Unit
人の集まる環境を考える
Thinking About Environments for People to Gather

068 **修士1年生 Master's 1st Year［建築設計実習 A＆B］**
近藤哲雄ユニット Tetsuo Kondo Unit
市民ホール
Civic Hall
末光弘和ユニット Hirokazu Suemitsu Unit
BIOMIMETIC ARCHITECTURE
――自然に学ぶ新しい環境建築のデザイン
Biomimetic Architecture – Designing New Environmental Architecture by Learning from Nature
安原幹ユニット Motoki Yasuhara Unit
快適な建築
Comfortable Architecture
山代悟ユニット Satoru Yamashiro Unit
まちぐらし:まちを一つの宿のように楽しむための仕掛けをつくる
City Living – Creating Systems for Enjoying the City Like a Temporary Home

Topic ／活動紹介
Topic/ Activities

073 **新任教員紹介――山名研究室ができました!**
山名善之

01 **リヨン発――光を通じた文化の交流**
吉澤 望

03 **最先端デジタル技術でつくる〈Soft-kill Pavilion〉**
――デジタル・スタジオがTDWでセミグランプリを受賞!
廣瀬大祐＋上原雄貴

04 **東北の被災地でまち、ものづくりに参加する**
――安原研究室のポスト3.11
佐々木 嶺

研究室
Laboratories

080 初見学研究室［建築計画］
Hatsumi Lab., Architectural Planning
川向正人研究室［建築史・建築論］
Kawamukai Lab., History and Theory of Architecture
岩岡竜夫研究室［建築計画・意匠・設計］
Iwaoka Lab., Architectural Planning and Design
安原幹研究室［建築設計］
Yasuhara Lab., Architectural Design
伊藤香織研究室［都市デザイン］
Ito Lab., Urban Plannning
吉澤望研究室［建築光環境・照明環境］
Yoshizawa Lab., Building Enviromental Engineering
井上隆研究室［建築環境・設備］
Inoue Lab., Building Enviromental Engineering and Facilities
兼松学研究室［建築構造・材料］
Kanematsu Lab., Building Material Engineering
北村春幸研究室［建築構造・材料］
Kitamura Lab., Structural Design
衣笠秀行研究室［建築構造］
Kinugasa Lab., Structural Engineering
永野正行研究室［構造力学］
Nagano Lab., Structural Mechanics
大宮喜文研究室［建築防災・安全］
Ohmiya Lab., Building Safety Engineering

086 **学生デザインコンペティション入賞者一覧**
（2013.4-2014.3）

インタビュー

建築的分析と統合を追求した20年

上原孝雄（東京理科大学名誉教授）

聞き手：高安重一（1989 年卒）＋ 大宮喜文（1990 年卒）

近代から現代へ、発展する設計の教育

上原孝雄名誉教授

大宮｜ 私は学部４年生のとき建築計画の上原先生の研究室の一員として、人の流動調査をしたことを懐かしく思い出します。それが現在の私の防災の研究につながりました。先生は、京都大学で西山夘三さん [*1] に学ばれたそうですが、当時のこと、理科大での建築教育についてお聞かせください。

上原｜ 私の大学生時代は終戦の前後の時代でした。西山先生はまだ教壇に立たれる前で、大学の営繕課の仕事をしておられましたが、その傍ら盛んに研究活動をされていて、調査の人手が必要になると製図室に学生アルバイトを探しに来られていました。私も何度か動員された記憶があります。当時の設計製図室での先生との出逢いが、後年私の学位論文提出のきっかけとなりました。

われわれの学生の頃はろくな遊び場もなかったので、建築の製図室は格好のたまり場でした。先輩からいろいろ教えてもらえるし、あらゆる情報が入ってくるので講義の時間以外はほとんどそこで過ごしていました。でも、理科大に赴任した1975年は大学紛争の直後で、建築学科の製図室が紛争時のアジトのようになったとのことで[*2]、製図室は授業の時にしか入れず、終わると守衛さんが鍵を閉めてしまうのには驚きました。いろいろ事情はあったでしょうが残念に思いました。今は製図室もオープンになり、当然のことです。

高安｜ 先生の着任当時は、どのような教育方針だったのでしょうか。

上原｜ 私は理工学部の創設から8年目、卒業生でいうと5期目になる年に赴任して、1993年度に退任しました。それから約20年もたった今、『UNGA BOOK』の創刊号を拝見し、ずいぶんと設計教育の内容が充実し発展してきたのに感銘を受けています。

当時の建築学科のカリキュラムは、理科大に限らずどの大学でも意匠設計・構造・設備・材料・施工（理科大は独自に防災分野を独立させている）という枠組みでつくられていました。これは明治以来文部省令で決められたもので、1954年の大学改革で旧制度から新制度に移ってもその基本的な枠組みは変わりませんでした。しかし、その内容や教育方針は、時代の要請に対応していくべきものでしょう。

旧制時代には大学の建築学科は、東京大学、京都大学、東京工業大学、早稲田大学、日本大学の５大学にしかなかったのですが、新制度になり多くの大学に建築学科ができ、大量の卒業生が出るようになりました。それは、ちょうど日本が高度成長期で、その膨大な建設需要に応えうるたくさんの建築技術者の養成が求められていたからです。これが初見学先生が言っておられる中堅技術者[*3]ですね。たしかにそういう時代背景があり、建築の教育全般として、いわゆるエンジニア育成はやむを得ないことであり、また必要なことでもありました。

しかし、今ここでお尋ねの教育方針とは、とくに設計教育のことですね。これは大げさにいうと、日本の建築教育はどうあるべきかという、きわめて本質的な問題を含んでおり、理科大１校のみで解決できるものでもなく、全大学に関わる問題です。

建築学科が理工学系の他学科と異なる点は、設計教育に力点を置いていることだと思います。ところが設計という行為は、与えられた条件に基づいてあらゆる知識や技術を駆使し、合理的にしかもデザイン的にも優れたひとつの建築空間を創り上げてゆくきわめて創造的でかつ総合的な行為です。これは一般の自然科学系の学問のように分析を重ねてひとつの真理を追究するものとはかなり異なった肌合いのものと言えます。したがって、この教育指導は研究者肌の教授陣ではなく、設計を職能とする建築家でないと本当の教育はできない、と考えるのが当然です。ところが現実に建築家を専任の教授に迎えようとすると、まず教授会のドクター資格審査でなかなか納得が得られない。また専任となると、建築家の側にとっても大学の雑務や時間にしばられて設計活動が制約されるので敬遠される。結局、非常勤講師として指導して頂くのが精一杯、というのが当時の状況でした。

高安｜ 今はプロフェッサー・アーキテクトが増え、建築家が教鞭を執るのが一般的になりました。

上原｜ そうですね。ようやく各大学の永年の悲願と努力が実って、そういう時代になったか……と、感に堪えません。理科大でも、私の後任に建築家の小嶋一浩先生がいらしたのは、画期的なことでしたね。この人選にあたられた奥田宗幸先生、初見先生はじめ当時の教授陣のご理解とご努力に改めて敬意を表したいと思います。

プロフェッサー・アーキテクトが現実になって、設計教育は一歩前進しましたが、まだまだ十分とは言えません。1大学では如何ともしがたい問題ですが、「建築教育制度を改めるべきだ」という念願も広くあり、それはかねがね言われていることです。わが国の建築教育は明治11年（1878年）工部大学校（東大工学部の前身）発足以来、どこの大学でも一般に理工学系学部所属の工学系学科として扱われてきたため、技術者養成には効果がありましたが、設計に重点を置くと言いながら建築家としての教育には、制度的にも履修年限としても十分だったとは言い難かった。これはすでにご存じのことと思いますが、建築教育の歴史を振り返ってみても分かります。

建築家と建築技術者の分離、融合、対立、協調の歴史でもありました。もともとは万能の建築家（マイスター／棟梁）がひとりで設計・工事・教育のすべてを取り仕切っていましたが、近世社会の産業経済の発展と科学技術の進歩は新しい技術者教育を必要として、フランスではエコール・ポリテクニークが設立されます。これに対して、従来の建築様式が芸術的手法を主とする建築家を養成する建築芸術学校エコール・デ・ボザールがつくられ、建築家と技術者の分離、対立がはっきりとしてきます。19世紀末、新しい芸術運動のひとつとしてヴァルター・グロピウスによって工芸学校バウハウスが開かれ、芸術的表現能力と工学的技術力を兼ね備えた建築教育が試みられ、両者の融合が図られるものとして期待されましたが、近代以降の建築学の内容はますます複雑化し、科学的にも深度化、専門化が進み、個人の建築家がすべてをマスターし、これを造形的表現にまとめてゆくことは極めて困難な時代となりました。現代は、建築家が技術者との密接な協力によって総合的に設計をまとめる体制が主となっています。科学技術は本来分析的（アナリシス）思考であり、創造的な設計は極めて総合的（シンセシス）思考に基づきます。さきほど学者と建築家は肌合いが違うと言いましたが、この思考法の違いもそのひとつでしょう。欧米では建築家は弁護士や医者とともに社会的に高い地位が認められていて、学習年限も長く、また独立した建築学部があります。ここまで踏み込んだ制度改革ができれば、日本の建築教育も変わっていくと期待したいものです。

高安氏（左）と大宮氏（右）

＊1
にしやま・うぞう（1911～1994年） 日本の建築計画学の第一人者。戦後、『これからのすまい』を出版し、「食寝分離」を提唱したことで知られる。

＊2
『風景を撃て：大学一九七〇 - 七五 宮内康建築論集』（宮内康著、相模書房、1976 年）

＊3
『UNGA BOOK 2012』インタビュー「中堅技術者から、クリエイティブなデザイナー教育へ」（初見学教授）

Takao Uehara
1924年茨城県水戸市生まれ、高知県出身／1948年京都大学工学部建築学科卒業／1948年運輸省鉄道総局（後の日本国有鉄道）入省／1955年鉄道技術研究所・建築研究室長を経て／1975～1995年東京理科大学理工学部建築学科教授／研究分野：建築計画（建築人間工学）、工学博士／1997年東京理科大学名誉教授

Shigekazu Takayasu
1966年千葉県生まれ／1989年東京理科大学理工学部建築学科卒業／1990～1995年同大学助手／1995年建築研究室高安重一事務所設立／2003年アーキテクチャー・ラボに改組／1996年～2013年東京理科大学理工学部建築学科非常勤講師／2014年～日本大学短期大学部建築・生活デザイン学科助教

Yoshifumi Ohmiya
1967年東京都生まれ／1996年東京理科大学大学院理工学研究科建築学専攻博士後期課程修了／1996～1998年同大学助手／1998～2003年建設省（現・独立行政法人）建築研究所研究員・主任研究員／2003～2011年東京理科大学理工学部建築学科専任講師、助教授、准教授／2007年英国キングストン大学客員教授／2008年英国アルスター大学客員教授／2011年～東京理科大学理工学部建築学科教授／研究分野：建築防災・安全、工学博士

——人間と建築空間の対応関係を明らかにするアプローチが、建築計画において重要な意味をもっている。

人間と建築のインターフェースが建築計画

大宮｜ 先生のご専門は建築計画ですが、理科大で教鞭を執られる前は、旧・国鉄の鉄道技術研究所にいらっしゃったんですよね。

上原｜ そうです。まず建築計画とは何かというと、その定義は曖昧です。設計の前段階で、どのような建物にするか計画することを建築計画と言って、まことに幅広く、雑学の集積とも言えます。ここでは私が専門としている「人間の生活、行動、意識と建築空間の対応関係に基づいて建築を計画すること、及びその学習、研究分野」としておきましょう。とりあげる対象や内容は、住宅、事務所、学校など建物の種類によって異なる問題もありますが、全般に共通するものもあり、幅広い内容や問題を含んでいます。

その計画学の中で私の研究分野は、理科大に来る前に旧・国鉄の研究所に勤めていたので、鉄道建設の中でも最も独自の〈鉄道駅舎建築の計画上の問題点〉を対象としたわけです。最初に与えられた命題が、〈駅便所の適正な規模算定法をつくること〉でした。当時の駅便所は混雑していて評判が悪かった。かといって便器の数を増やしすぎると無駄な投資といって設計者が叱られます。そこで臭い思いで調査を繰り返し、統計学の待ち行列理論や東大の吉武泰水先生が開発された、「あふれ度」を導入した規模算定法（α法）を使ってなんとか算定基準をつくることができました。この経験で、駅は旅客という大量の乗降客（群衆）が利用する施設で、旅客の行動や数量が平面計画や規模計画などすべての計画の基礎となることが身に沁みてわかり、その後の研究は〈旅客群衆流動の性状、行動把握〉が中心命題になりました。この時の研究報告論文に〈乗降客数のラッシュ時における時刻変動〉を集中率というパラメータでパターン化したものを載せたら、旧・建設省建築研究所の戸川喜久二先生[*4]のお目にとまり、面白いから建築学会の『建築資料集成』に載せたいとの話がありました。先生は群衆避難計画をテーマにしておられ、群衆歩行研究の先駆者でした。私どももその後の旅客群衆流動の性状解明や、流動状況を図上やディスプレイに再現してレイアウトや規模を検討する技法（群衆流動シミュレーション）の開発に当たって、ずいぶんと戸川先生にはお世話になりました。こんなことが、先生が退任された後の理科大に私が来るきっかけになっていたのではないかと思っています。

またその頃からコンピュータの利用が盛んになり、社会現象をシステムとして捉え、数理的に解明するシステム工学の応用が一般的となってきました。建築計画学で今後も有効な手法として使われるようになるでしょう。

大宮｜ 戸川先生は、日本の避難安全工学の礎を築かれた方なので、私にとっても大先輩です。戸川先生、上原先生の研究を引き継いで、私も今、駅に関わる研究を行っています。今は駅やその付属建物の中に店舗や保育施設が設けられたりして、多機能化しているので、その安全性を含めてどうあるべきかと。

上原｜ 私が国鉄で研究していた頃の駅の計画は、建物を旅客流動にどう対応させるかが大きなテーマだったので、旅客が立ち止まって滞留をおこすなど困ることでした。流動を妨げる「駅ナカ」なんてことは考えもしなかったし、また許されもしなかった。というのは、日本国有鉄道法という法律があって、鉄道の営業は「モノと人を運ぶこと」と決められていた、それで物販は外郭団体の鉄道弘済会の売店（キオスク）だけに構内営業が許されていたんです。なぜそんな法律ができたかというと、駅はたくさんの人が集まり商売には最高の立地条件なので、そこで物販をされると近隣の商店街はお客をとられてしまう。私鉄には許されるけれど国鉄は民業を圧迫してはならないからです。したがって国鉄は運賃だけで経営することになり、いつも赤字だったんですね。駅舎より線路や車両にお金がかかり、建築はいつも隅に置かれていました。おかげでこちらは好きな研究ができていたのかもしれません（笑）。

ちょっと脇道にそれたので駅ナカの話に戻ります。国鉄が民営化してJRになると、当然事業内容も変わり、駅の役割も自ずから変わらざるをえません。日本国有鉄道法などはなくなったので、大いばりで駅ナカが登場することになります。既存の駅構内に、駅ナカ商業施設を旅客の流動とからめてどう取り組むか、という研究会に呼び出されたことがありますが、私のこれまでの専門と180度かけ離れた内容なので「こんな所にどうして呼び出されたのか」と内心腹がたちました（笑）。しかし、駅に限らずどんな建築も役割や機能が変わってゆくものです。それに対応するのも建築計画だろうと思います。

大宮｜ そうですね。たとえば駅の場合は、改札の内外で建築基準法が適用されるか否かなどの問題がありますから。駅舎内は適用外なので、独自のルールを考えなくてはならないので、私もそういう課題に関係することがあります。

上原｜ 私は流動の処理に関する研究ばかりでしたが、新たに駅ナカ滞留客の問題が出てきたし、大宮さんが言われたようにさまざまな課題があります。とくに火災や地震など突発時の避難誘導計画は鉄道駅の建築計画として大きなウエイトを占めていると思います。これは大宮さんの専門分野で、よろしく頼みます。

私は、これまでの研究活動を通じて、はじめにお話した「人間と建築空間との対応関係（インターフェース）を明らかにする」というアプローチが、駅計画に限らずあらゆる建築計画において重要な意味をもっていると思っています。このようなアプローチで課題を解明する手法あるいは学問を「建築人間工学」といい、建築学会の建築計画委員会の中にも「建築人間工学小委員会」が設けられています。

余談になりますが、人間工学（human engineering）という語はアメリカの軍事研究で生まれたといわれています。兵器や軍用機器類の設計にあたって兵士と兵器や機器類との使用上の対応関係（man-machine interface）を明らかにして、兵士の操作行動にもっとも適した形を追求する手法あるいは研究が、人間工学。建築人間工学は、これを建築にあてはめたものです。

同窓生のつながりを

高安｜ 上原先生の大きな後押しがあり、理工学部建築学科のOB会「野田建築会」[*5]が1998年に発足しました。設立についての想いをお聞かせください。

上原｜ 私自身若い頃は、同窓会なんてただ酒を呑んで懐かしがるだけだと思い、出る気がしなかった。ところが中年になると、学校の同窓会には仕事のことでも家庭や人生問題でも、年齢差を越えて遠慮なくざっくばらんに話し会える不思議な人間関係があることに惹かれました。老年になるとただ無性に懐かしく、逢えるだけでもいいと思うようになった。これが私の同窓会観かもしれない。

私にとって最初の卒業生（第5期生）を出したとき、卒業生の就職先が知りたくて、これまでの全卒業生名簿はないかと思い教室事務に聞いたところ、そのような名簿は卒業生の同窓会がつくるもので、教室側ではつくっていないとのこと。それも一理あり、以後卒業式などの機会あるごとに同窓会づくりを勧めてきました。なかなかその機運がなかったのですが、10期目の頃共鳴する学生が出てきて、工学部の同窓会「築理会」の向こうを張ってこちらは「建理会」だ（笑）と言って発足会まではやったが、旗を振っただけで後が続かなかった。やはり機運を待つだけでは駄目で、まずは中心になる人物と数人の幹事役（なるべく年次の古い人）からなる発足準備事務局を立ち上げ、数年先を目標に周到な準備と盛り上げを計る必要がありました。事務局は学科事務室に置くのが何かにつけて都合がよく、教室も場を提供するぐらいの協力はやぶさかではない。そうなると事務局の実働部隊は結局学校に残った卒業生、つまり当時の衣笠講師（現・教授）はじめ助手の先生たちになる。皆さん忙しい仕事のかたわら頑張ってくださり、1998年5月、ようやく「野田建築会」が陽の目を見ることになりました[*6]。

高安｜ 現在も2カ月に1度のペースで幹事会が開かれていますが、発足から年に2回発行している会報は30号を超えました。研究室や先生の紹介、各研究室のOB会やNAA賞、卒業設計賞などのレポートを行っています。HP上ですべての号を見られるようにしていますので、多くの人に見てもらいたいですね。現在は個人情報保護のため名簿は発行していませんが、名簿データは管理しており、会報の発送を行っています。HPから住所変更なども受け付けていますし、登録して頂ければメールマガジンの送信も行なっているんです。

上原｜ 毎号立派な会誌を送ってもらって、懐かしく拝見しています。

大宮｜ もうじき理工学部創立50年になりますから、これまでの学科の歴史などもまとめたいと思っています。先生のお話を伺えて大変良い機会になりました。ありがとうございました。

（2013年11月　上原孝雄名誉教授の自邸にて）

＊4
とがわ・きくじ（1909～1982年）　東京美術学校（現・東京藝術大学）建築学科卒業。建設省建築研究所を経て、東京理科大学理工学部創設の1967年、建築学科教授に着任。現在の避難計画の考え方の基礎をつくった。

＊5
野田建築会
HP：http://www.rikadaikenchiku.com/

＊6
発足の経緯は、1998年の会誌創刊号に詳しい。
http://www.rikadaikenchiku.com/report/vol001.pdf

2013年度 修士設計講評審査会

審査員

初見学（教授）
川向正人（教授）
岩岡竜夫（教授）
伊藤香織（准教授）
安原幹（准教授）

近藤哲雄（近藤哲雄建築設計事務所）
武井誠（TNA）
柳澤潤（コンテンポラリーズ）
山代悟（ビルディングランドスケープ）
山名善之（東京理科大学准教授）

2013 MArch Design Thesis Review Committee

Jury

Manabu Hatsumi (Professor)
Masato Kawamukai (Professor)
Tatsuo Iwaoka (Professor)
Kaori Ito (Associate Professor)
Motoki Yasuhara (Associate Professor)

Tetsuo Kondo (Tetsuo Kondo Architects)
Makoto Takei (TNA)
Jun Yanagisawa (Contemporaries)
Satoru Yamashiro (Buildinglandscape)
Yoshiyuki Yamana (Associate Professor)

The Master's Design Review Committee met on February 7, 2014. From 17 proposals, the 10 members of the committee selected one 1st Prize proposal and two Award of Excellence proposals. Selected for 1st Place was “How Can We Translate ‘Ku-ki’ Into Architecture?” by Kosuke Hoshi, which dealt with the distillation of opinions that citizens express about architecture in participatory workshops. Referring to this data as “Ku-ki” (mood or atmosphere), the proposal suggested that it could be used to “control” the spatial design. Meanwhile, the spatial design created by the architect is positioned as a “generative model”. The proposal develops a methodology under which the “generative model” and “control model” are merged and data is “translated” to create complex spaces.

The Award of Excellence proposal “Rectify and Cycle” by Kosuke Tazawa proposed construction of public spaces and waste treatment facilities out of waste materials. Starting from the assumption that the type of waste materials will differ in different regions, the proposal suggests that this would enable architecture with regional characteristics. It is a proposal on the themes of regionality and sustainable recycling of materials.
The Award of Excellence proposal “Shaking Architecture” by Naoki Nakamata noted the general assumption that architecture does not move, and proposed spaces that would shake under the influence of external natural forces such as the wind. It was a simple concept, but one that was appealing in the way that it broke through conventional thinking.

講評審査会風景

最優秀の星さん

2014年2月7日、理工学部7号館2階の大学院演習室にて修士設計の発表と講評審査会が行われた。発表者は17名で、各自の持ち時間は7分のプレゼンテーションと8分間の質疑応答の合計15分間。その後、常勤の教授・准教授とゲストクリティーク計10名による2段階の公開審査の結果、3票を獲得した星洸祐さんが最優秀に、それぞれ2票を獲得した田澤孝祐さんと仲俣直紀さんが優秀に選ばれた。

建築のアノニマス性を問う
最優秀　「空気の翻訳」

最優秀に選ばれた星洸祐さん（伊藤研究室）の「空気の翻訳」は、設計者による空間設計を〈生成モデル〉とし、それに対する〈制御モデル〉として住民の意見などを位置づけ、それらの合成によって空間をつくるというアイデア。利用者が感じている〈空気〉を設計者として読み、それを翻訳するということをコンセプトに掲げる。2013年夏、埼玉県蓮田市で駅前の空地を対象に「はすだ2033」という市民ワークショップを実施し、85枚のデッサン（平面形）を収集。これを画像解析、モデル化を行なっている。
この提案は、公共建築の設計プロセスに市民ワークショップを取り入れることが浸透しはじめている社会的潮流の中で、設計者がどのように関わり専門家としての職能を発揮して責任をもつのか、という審査員の議論を呼んだ。
「人に共感されるものを建築家はつくる必要がある。確かにこのプロセスを経ることで設計者の意図を退け、利用者の声を受け入れてつくった建築であるという説明はできる。しかしそのロジックだけでこの建築を一面的に説明する態度には賛同できない」（安原）
「設計者として実際に住民ワークショップをやったり、行政と関わる中で、その意見をどうやって建築の形式に落とし込むかに頭を悩ますことはあるが、そのことに可能性があると思う。その一方で、建築家は仕組みをつくっただけで、かたちを作ったのは市民だから、責任は市民にあるという論理にしてはならず、責任は専門家として建築家がとらないといけない」（柳澤）
「〈空気〉を感じながらつくるというのが彼の責任の取り方ではないか。必ずしも賛同はしかねるが、彼のいうアノニマス的なつくり方は問題提起として評価したい」（伊藤）
「作家性を抜きにしても〈作品〉に対して票を投じたい。建築を〈媒介〉としてみることには違和感を覚える」（武井）
一方、自動生成的につくられたという最終的な形態については「（住民参加で建築をつくる場合）これが対話の材料になるデザインなのか？　もっと単純で強いシンプルなアイデアが必要で、それが、建築家が見せるべきデザインではないか」（山代）という意見もあった。

建築的集合環境は、ゴミ処理施設の再配置で可能になるか
優秀　「整頓と循環」

優秀に選ばれた田澤孝祐さん（初見研究室）の「整頓と循環―廃棄物の地域性による地域圏および地域差の発生」は、建築的集合環境を再設定するというテーマに挑むもの。そこで対象としたのがゴミ処理施設。行政地区単位で行っている現在のスケールをより細分化させ、ゴミの循環を軸として街区や地域圏をつくるという、サステイナブルな物質循環と地域性の創出を目指した提案となっている。
対象とした敷地は、大阪市の木造密集地域。そこにバイオマス燃料化プラント、粘土質の建設発生土から瓦などをつくるための窯、そして木工教室やアンティーク家具の市場など公共的な空間をつくる。施設は軸組を基本としてつくられ、そこに集まってきた廃材を用いて空間をつくり、更新も行っていくというアイデアである。
「廃棄物など見過ごされていたものを集めてみると、都市にとって役に立つ公共施設になるのではないか？　という考え方はよいと思う。一見他律的にみえる作品だけれども、自律的な創造性があると思う」（武井）、「木造密集地域をクリアランスするときの記憶としてつくるものであれば可能性はある」（安原）、「リアリティはないけれど、着眼点はおもしろい」（柳澤）など、テーマ設定に共感するコメントがなされた。
また、「つくり方のシステム提案であって、その先にどういう建

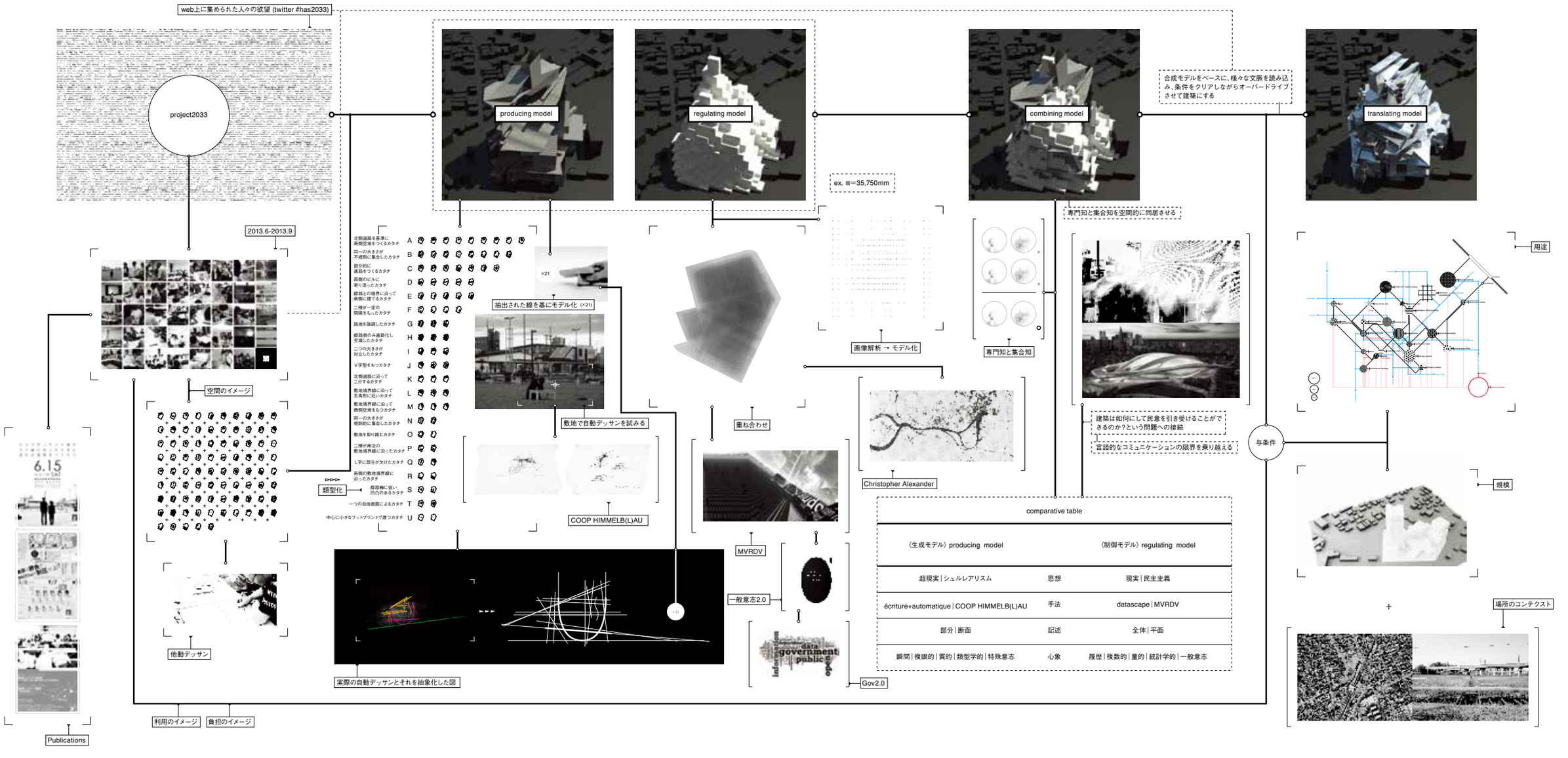
13 頁に続く

修士設計最優秀賞
MArch
Design Thesis
1st Prize

星 洸祐
Kosuke Hoshi

空気の翻訳
How Can We Translate "Kuki" Into Architecture?

“空気”を建築へと〈翻訳〉することを試みた。“空気”とは集合的な無意識のことである。たしかにその存在を感じ取れるが、誰も確信的に把握できないようなものを指す。だが、現代の情報工学的／脳科学的な技術を前提にすれば、“空気”を可視化し現実のプロジェクトへと実装させることはそう困難なことではない。設計者はある実験的なワークショップ(＝project2033)の実行によりそれを収集し、2つのモデルに咀嚼した上で、建築として成立させるために翻訳した。設計者が意図したことは、“空気”との無意識的―非言語的なインタラクションを合意形成のフレームワークとして設計プロセスに位置づけることである。これにより、大衆迎合的な〈直訳〉にもならなければ、官僚主義的な〈誤訳〉にもならずに、民主的なプロセスでありながら批評的な建築に到達する。専門知と集合知は、その優位性においてしばしば対立するが、専門知を断面的で部分的なものとして、集合知を平面的で全体的なものとしてハイブリッドさせることで、それらの平面的な衝突を回避し、空間的に同居させることで建築的に有意味な状態へと統合させてしまう。それだけではない。設計プロセスおいて設計者の意志を意図的に排除することで、結果的に異様なリアリティを獲得することになった。最終的に出力された建築の形態／用途／規模のいずれにおいても、設計者が欲望してゴールイメージを作為的に描いたわけではなく、“空気”が設計者を介して建築になった、と表現する方が正しい。語弊を恐れずに言えば、設計者はこの建築をつくりたいと思ってつくったわけではない。その意味で、この一連の作業を〈設計〉ではなく〈翻訳〉と呼んでいる。(星 洸祐)



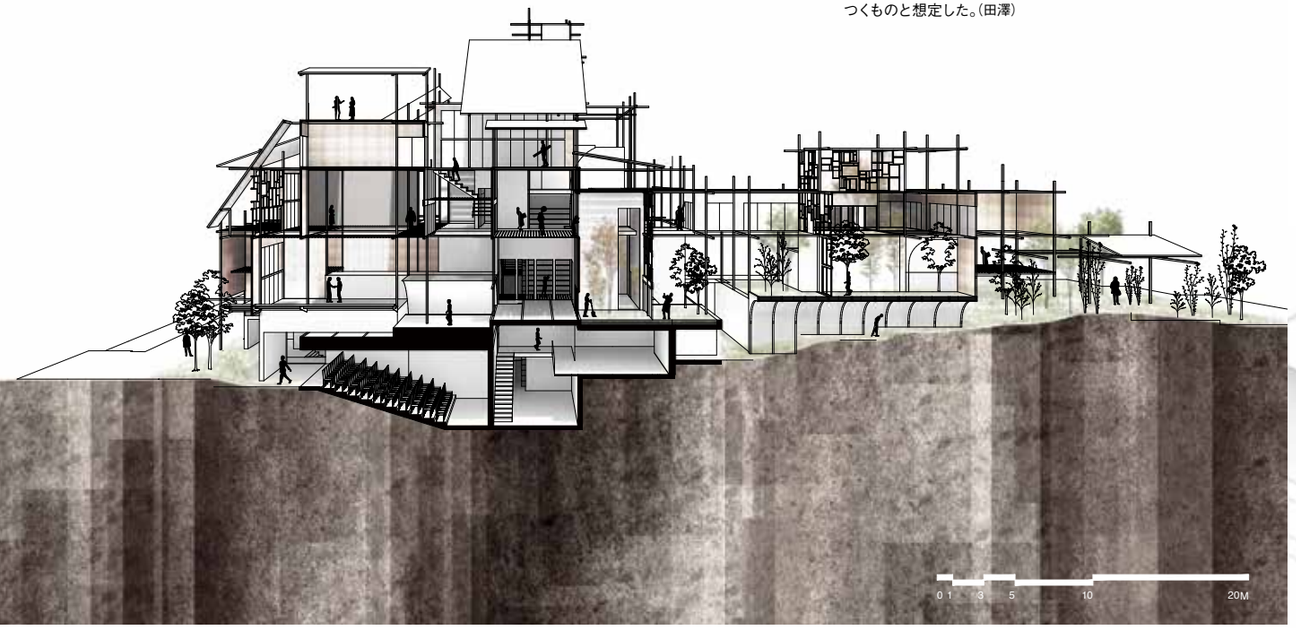
修士設計 優秀賞
MArch
Design Thesis
Award of
Excellence

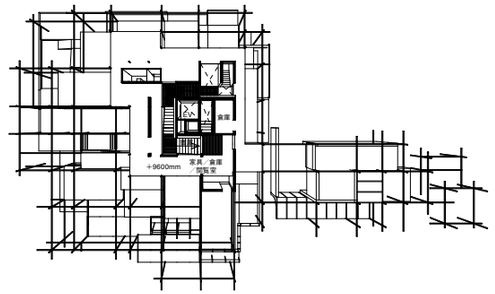
田澤孝祐
Kosuke Tazawa

整頓と循環
―廃棄物の地域性による地域圏および地域差の発生

Rectify and Cycle
― Regional Area as Measured by The Regional Characteristic of Waste Generation and of Regional Differences

廃棄物の地域性を用いて、地域圏の形成および地域差を発生させる計画である。廃棄物の処理の様態を細分化し、街の建築に接続することで街の中に物質の循環をおこし、更新が進むにしたがって地域差が発生することを提案している。建築的集合環境を再設定することで、単体の建築には対応できないスケールの問題へ関与できるようになるだろう。また、気候や地形以外にもある生活習慣なども空間的地域差に結びつくものと想定した。(田澤)

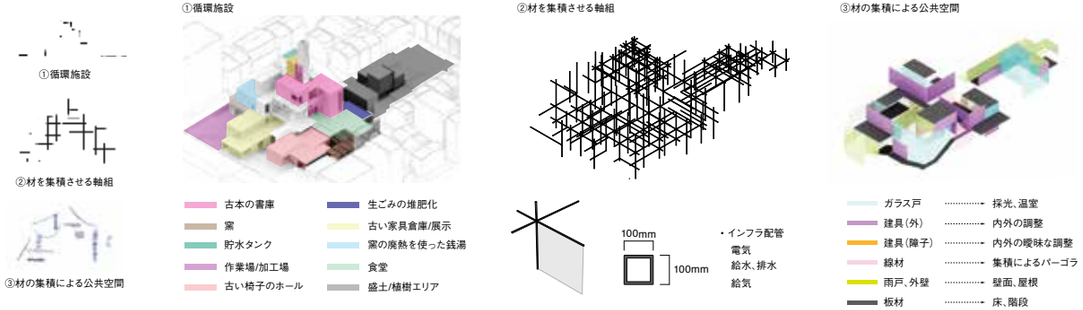




平面　GL±10500mm

優秀に選ばれた田澤さん

■構成について



築をつくりたいのかが聞きたい」(近藤)など、提案しているものに対する設計者としてのスタンスが問われた。

建築は動いてもよい！
優秀　「ゆれる建築」

もうひとつの優秀案は、仲俣直紀さん(岩岡研究室)の「ゆれる建築」。読んで字のごとく、建築が「ゆれる」ことを肯定的にとらえた提案である。光や風など自然の空間はつねに変化していることに対し、建築空間もゆれることで変化してもよいのではないかという考えに基づき、住宅モデルと、積層モデルを設計。住宅モデルでは人の動きや家具の変化で空間が変化するというもの。積層モデルは、千葉県浦安市の野鳥の森公園の観察施設とし、主に風によってゆれる。
「建築はゆれてはいけないものだと決めているけれど、その常識を覆す。子どもの運動神経を鍛える施設にもなりうる」(初見)、「もっとも攻めていて面白い」(岩岡)、「実用性はないかもしれないが、現代のアヴァンギャルド展などがあれば出展できるような、建築の中にあるひとつの可能性を示している。ただし、表現をもっと高める可能性はあった」(川向)など既成概念や常識に縛られないコンセプトが評価を受けた。
「あえてチャレンジした姿勢はよいが、ゆれることでどういう新しい生活や提案があるのか。ゆれるとしたら窓のかたちやプランももっと異常なことが起こるはず。そこまで踏み込めていない」(近藤)という指摘もあった。

総評　自由な発想で、自身をもって提案するために

2013年度の修士設計は、住民参加やコンピュータのアルゴリズムといった設計者個人の見解を越えた意思決定をどう行うのか、また縮退する都市に対してどのように向き合うか、というテーマが多く見られた。それを受け、建築家として活躍する4名のゲストクリティークは以下のように総評を行った。
「テーマや問いの設定には鋭い視点があって共感できる人が多かった。それをどうやって建築にしていくかというところで少し差がでたように思う。その鋭い問いかけを現在の建築に当てはめる

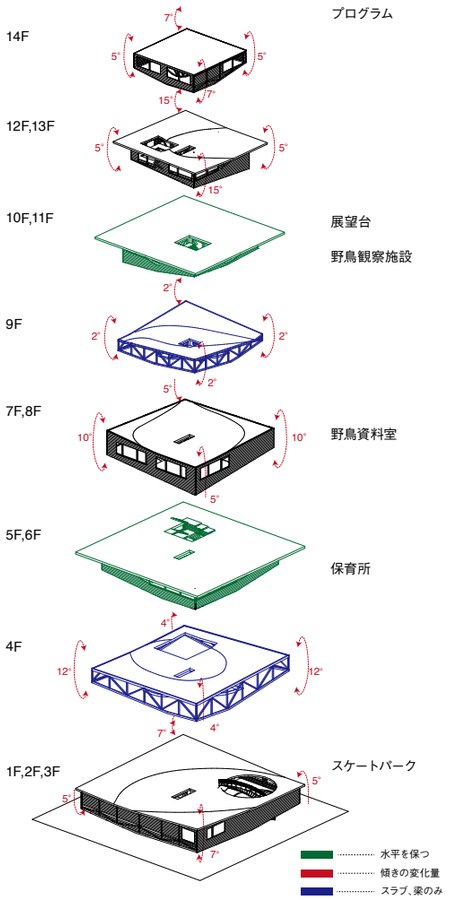
15 頁に続く

修士設計 優秀賞
MArch
Design Thesis
Award of Excellence

仲俣直紀
Naoki Nakamata

ゆれる建築
Shaking Architecture

外からの力に対して耐えるのではなく、受け入れるようにして動く建築である。(仲俣)



優秀に選ばれた仲俣さん

のではなく、素直に最後までつくりきれると新しい可能性が見えてくると思う」(近藤)

「レベルの高い成果物がでているが、苦言を呈するならば、勉強が足りないのではないか。設定した問いかけや条件に対して、地域の歴史や特徴を読み込む練習や、構造的なことをきっちり研究するなど、プロセスを通じてひとつのことに詳しくなることを意識的にやってほしい。それがイマジネーションのソースを広げ、(閉塞的状況を)突破するきっかけになる」(山代)

「イメージの世界が大きく、それに引っ張られている作品が多い。理科大学の伝統なのか、模型が大きく圧倒的だけど、表現としては、それが構築力の弱さに通じる。それよりも平面図や断面図など図面がきちんとかけていることが重要だと思う。また、プレゼンテーションの語り方が、コンピュータに向かってしゃべっていて独り言のようだ。人に向かってしゃべらないとダメ。理論構築と同時に自分の内側にある感覚を表現することをやっていってほしい。そして、建築は設計者が最終的に責任をとらなくてはならないことを意識してほしい」(柳澤)

「提案者の学年は、2年生のときに非常勤を担当していたが、当時の方が発想が自由だったように感じた。提案に対して守りに入り、責任をプログラムに転嫁しているのではないか。そういう弱い案にならないために、もっと建築の解像度を上げるような勉強をしなくてはならない。ディテールというのは単に納まりという意味ではなく、歴史や文脈を丁寧に読み解きながら提案できれば、形だけの問題としてではなく評価してもらえるのではないか」(武井)

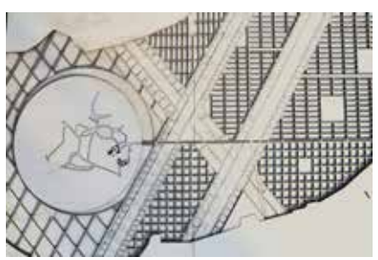
また、2014年度から理工学部の准教授となる山名工学部准教授からは、「修士設計は楽しくやるだけではなく、提出するペーパーにもっと厳しさが必要。修士課程に学ぶ者として、論理的なものをつくってほしい」と、公開会場にいた学生にむけてもエールが送られた。

2013年度で退任となる初見教授は、「(設計者としての)責任をとらずに守りに入っている風潮があり、建築を信じている作品が少なくなる傾向がある。でも、自分の作品にもっと自信を持ち、好きになってほしい。今の社会は建築にとって厳しいかもしれないが、理科大らしさは、もっと自由にバカになることだから……それを大事にしてほしい。最後にそれを言っておきます」と括った。

新井 快 | Kai Arai
高層マンションにおける共有空間の提案

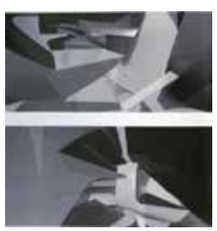
上原慧史 | Satoshi Uehara
建築エレメントの分解 —屋根による広場的環境の創出

宇山達彦 | Tatsuhiko Uyama
神域都市を空想する —潜在的都市形態を利用した建築プロトタイプの設計



宇田川 真 | Makoto Udagawa
表情の機能性について

城 亮介 | Siro Ryosuke
“建築の半自律性”



塚本慎一郎 | Shinichiro Tsukamoto
シナリオのない建築 —コンバージョン建築から考える二段階設計の可能性

菊地優介 | Yusuke Kikuchi
対の集住体

佐々木 嶺 | Ryo Sasaki
人と町を紡ぐ
—郊外都市開発における経路空間設計による公共空間モデルの提案

土屋秀正 | Shusei Tsuchiya
『空な山』—スケールの再解釈による建築の再構築

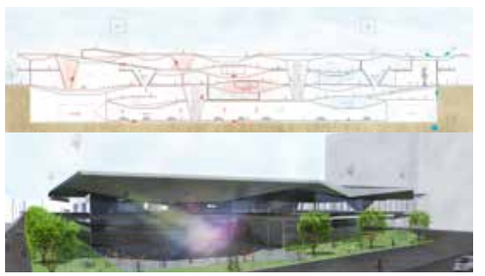
藤井田仁 | Hitoshi Fujiita
建築の極大 —同時多様的まなざし

佐藤 聖 | Sho Sato
溜める建築 —老朽化した造成地における建築の提案

佐藤伸彦 | Nobuhiko Sato
現代田園建築の射程

堀口 裕 | Yutaka Horiguchi
環境の単位 —ニュータウンにおける 2 次的環境の再定義

松本信彦 | Nobuhiko Matsumoto
韓国の風土を感じる —Seoul Culture Center



2013年度 卒業設計講評審査会

2013 BArch Design Thesis Review Committee

審査員

初見 学（教授）
川向正人（教授）
岩岡竜夫（教授）
伊藤香織（准教授）
安原 幹（准教授）

石橋利彦
今村創平
井出 建
大成優子
垣内光司
桑原 聡
高橋 堅
提 祐輝
内藤将俊
西田 司
廣瀬大祐
松田雄二
萬玉直子
水井 敬
宮下信顕
森 清敏
横尾 真

Jury

Manabu Hatsumi (Professor)
Masato Kawamukai (Professor)
Tatsuo Iwaoka (Professor)
Kaori Ito (Associate Professor)
Motoki Yasuhara (Associate Professor)

Toshihiko Ishibashi
Sohei Imamura
Takeshi Ide
Yuko Onari
Koji Kakiuchi
Satoshi Kuwahara
Ken Takahashi
Yuki Sage
Masatoshi Naito
Osamu Nishida
Daisuke Hirose
Yuji Matsuda
Naoko Mangyoku
Kei Mizui
Nobuaki Miyashita
Kiyotoshi Mori
Shin Yokoo

The Graduation Design Review Committee met on February 8, 2014. Presentations were made by 16 students who had been selected in a preliminary review. After two-stage voting by the 22 members of the committee, one 1st Prize presentation and two Award of Excellence presentations were selected.
Selected in 1st Prize was “Renewal of Tradition, or Traces” by Ayano Seimiya, which is set in Soma, Fukushima Prefecture, a city that was heavily damaged by the tsunami of 3/11/2011. Many of the residents are thinking of giving up their land and moving away, but this presentation proposed coming together to live there again. Instead of simply piling up earth to a height that the tsunami did not reach, the idea is to regenerate the place over new ground that retains the outlines of the foundations of houses that were swept away by the tsunami.

The presentation “Shape of Space – Model of Continuous Space” by Masato Endo, selected for an Award of Excellence, combines elements shaped like cutout squares to generate many kinds of space. Unlike a domino system composed of columns and slabs, this produces many kinds of relationships between the spaces.
The other Award of Excellence presentation was “Winning Back Something Lost” by Daiki Doi. It is set in Tsukihama, a small farming and fishing village on the island of Miyatojima in the city of Higashimatsushima, Miyagi Prefecture, which was devastated by the tsunami of the Great East Japan Earthquake. According to a local custom dating back 300 years, children retire to a cavern and emerge to join rituals related to good luck and prosperity. The presentation proposed to revive this practice and introduce it as part of an authentic tourism experience.

提案者の模型を囲む審査会風景。

最優秀に選ばれた清宮さん。

2014年2月8日、理工学部2号館4階の設計製図室にて卒業設計の発表と講評審査会が開かれ、事前審査で選ばれた16名が、各自5分間のプレゼンテーションと5分間の質疑応答を行った。審査は公開で、常勤の教授・准教授とゲストクリティーク計22名が1回目はひとり3票を投じ、議論を交わしたのち、最終的に1票を投じる2段階で行なわれた。その結果、最優秀に清宮あやのさん、優秀に遠藤優斗さんと土井大基さんが選ばれた。

津波被害を受けた場の記憶を残しながら住まう
最優秀　「伝承の場の更新、或いは残影」

津波でまちが流された地域の復興は主に、高台に集団移転か地盤のかさ上げに大別される。移転の場合はそれまで培ってきた場所の記憶やコミュニティが分断されるなどが問題視され、かさ上げでは堤防の高さなどの景観問題や海と生活の関係が絶たれることが一般的に指摘されている。
そうした背景のもと、最初の投票で15票と圧倒的多数を獲得したが清宮案だった。福島県相馬市の漁村を対象敷地に設定し、場の記憶を継承しつつ、海との関係も保ったまま沿岸部に住み続けるという提案で、津波で建物が流された後に残った基礎のかたちを造成地に転写しようというものだ。地盤の高さをただ上げるだけではなく、浸水ラインを意識した高低差の中に漁業にかかわる空間や住居、生活道を配置している。また、浸水ラインを建築で表現することで、津波の記憶を後世に伝えることも意識したものだった。
「高台に移転して別のコミュニティをつくる方法のオルタナティブとして、ある程度のリアリティを感じた」（高橋）、「過去の歴史をひもとく古地図のような案。道や地形が住宅の中に入り込むのが新鮮で、ポエティックに表現している」（内藤）、「建築のつくり方として、思わぬところに手がかりを見つけているのがよい」（安原）などその着眼点に共感するコメントが多く発せられた。
また、「被災地でなくても、住まいの形式がよい意味で新しい。神社をふくめた地域のコミュニティなど、住まいの集合のさせ方という空間の言語があるので、集落的な背景がある地域に転用可能ではないか」（西田）など、同案の可能性を評価する声もあった。
最優秀が決まった後、「こんなに苦しんだ設計はこれまでになかった。自分でテーマを設定して、それに向き合う中で考えることも多く、自分の案がよいかどうかが分からないままだった。今日、先生方のコメントを頂いて、他にも色々なやり方が合ったことにも気づくことができました。最後に、指導してくださった初見先生にプレゼントができたかなと思います」と、感涙まじりの清宮さん。卒業設計に真摯に取り組んだ姿が言葉の端々から伝わった。

単位空間を集積させ多様な関係性をつくる
優秀　「『空間の形』―連続する空間モデル―」

次点の遠藤案も、初回投票から9票と高得点だった。同案は、ロの字型の構造体を垂直方向と水平方向に組み合わせるというシンプルなアイデアであるが、開口率を変化させることで多様な空間の関係性をつくることができるというものである。
「ドミノでも、スペースフレームでもなく、壁と柱でもない、新しいプロトタイプが見える」（岩岡）、「方法論と空間的な特徴を兼ね備え、可能性がある」（井出）、「これまで空間モデルを主題とするささまざまな卒業設計を見てきたが、初めて腑に落ちた」（宮下）など多くの審査員が同案を方法論的視点で評価した。
また、「言っていることとやっていることが最も合致していて、完成度が高い」（垣内）、「モデルから魅力的な空間化がなされている」（大成）など、最終的な空間も高く評価された。
「バリエーションをつくり反復する明快な方法をやり抜いている。そのときに反復をどこで止めるのか」という今村氏の問いには、「シンプルな形式を走らせれば、想像を超えたものができるかもしれない。それに魅力を感じる」と遠藤さん。同案は、システムを反復することを主眼とするものではないようだ。「汎用性よりも空間論をやりたかった。『せんだいメディアテーク』のように公共建築が複合化すると、異なる機能空間同士の関係が大事になる。その関係性のつくり方を多様にできるという意味では汎用性があるかもしれない」とのことだ。

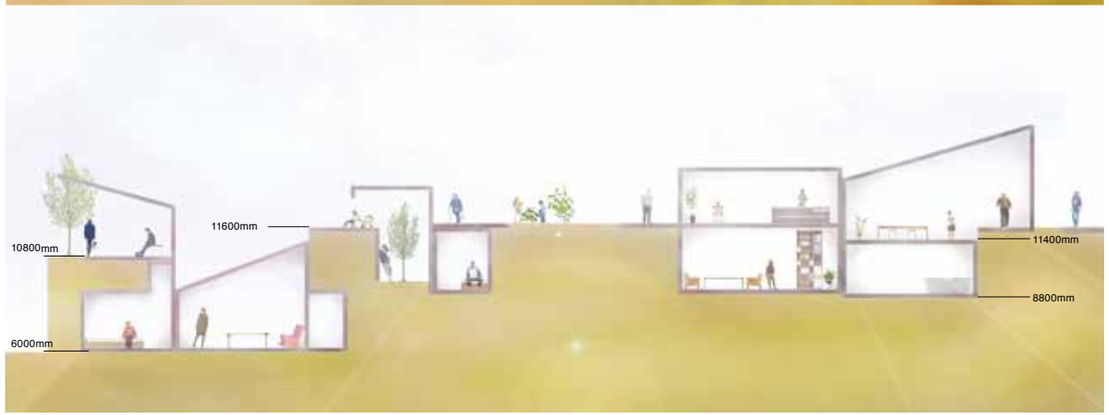
23 頁に続く

卒業設計 最優秀賞
BArch
Design Thesis
1st Prize

清宮あやの
Ayano Seimiya

伝承の場の更新、或いは残影
Renewal of Tradition, or Traces

敷地は福島県相馬市原釜地区。
多くの人々が土地を手放し去ろうとしている中で、再びこの場所に集まって住む事を考えます。
何もなくなった災害の跡地に原釜地区の人々のための新たな住処を計画し、先人たちが残した教訓をこの中に溶け込ませていきます。
教訓とは、大昔の津波による経験から先人たちは津波浸水ライン上に建てた神社の記憶と警告であり、これから先も伝承されるべきものです。
新たな住処での日常の中にこうした先人たちの記憶や警告が残ることにより、この場所での生活を構築していく事が出来るのではないでしょうか。



立面／断面　勾配のついた屋根と、生成された道が、崖と住戸と人々とを溶け込ませていく。

DIAGRAM

1 2 3 4 5 の要素を元に計画していく。

平面構成

敷地に僅かに残った生活の跡。これらを集めていく。

この基礎跡を部屋単位で分解していく。

崖のラインにこの形状を当てはめて空間を構成していく。

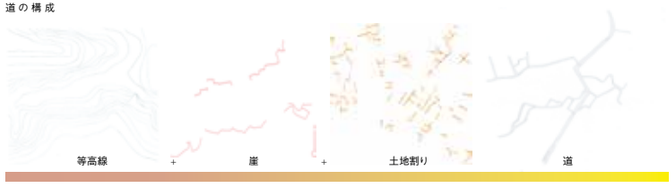
断面構成

地形に沿って配置された各ボリューム。

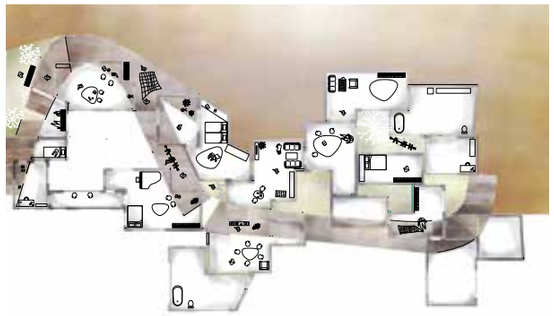
そこに浸水高（3.11の時で4~7m）を重ねる。

浸水ラインを意識して、ボリュームを上下に振っていく。

道の構成



道はこの地域の記憶を象徴するものとして、3つの要素を縫うように構成していく。



2層目平面

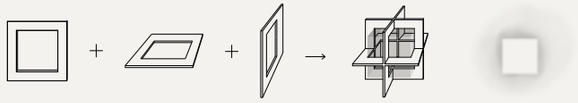
卒業設計 優秀賞
BArch
Design Thesis
Award of Excellence

遠藤優斗
Masato Endo

『空間の形』—連続する空間モデル—
Shape of Space – Model of Continuous Space

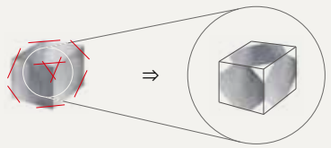
さまざまな『空間の形』によって連続する空間をもつ建築。
私は、建築は空間の集合で、個々の空間が連続してつながりをもつことで建築の総体が生み出されると考えている。そうした建築は複雑で多様な空間を持ちながらも総体としてひとつの力強い空間の質を獲得することができるはずだ。連続した空間は人々の多様な活動を許容すると同時につなぐきっかけとなる。複数の異なる機能や空間が絡み合い、今までにない体験を生み出す。
しかし、現在の都心にはそうした空間をもつ建築はほとんど存在しない。
そこで、連続した空間のつくる建築の可能性を考えた。(遠藤)

■CONCEPT DIAGRAM 1 / 空間の形



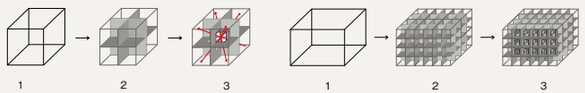
直交する壁とスラブにそれぞれ開口を設け、それらの開口を組合わせるようにする。そうすることで、開口が輪郭となり内側にあるヴォイドの形がうっすらと浮かび上がる。このヴォイドとしての「空間の形」によって、隣接する空間同士のつながり方が決まる。この「空間の形」はスラブと壁の3つの開口の組み合わせによって決定される。

■CONCEPT DIAGRAM 3 / 空間認識範囲の拡張



3つの面の交点である角がないことで部屋の認識は崩れ、一つ部屋に入ったときにその部屋に留まらずにその周りまで認識することができる。それが連続することで建物全体を感じることが出来る。訪れた人々の空間認識の範囲は一つの部屋から建物全体、都市あるいは空へと拡張する。

■CONCEPT DIAGRAM 2 / 全体への展開



複合した機能を包括し、一体的にするために全体を同じ要素でつくる。まずグリットで分け、大きさやプロポーションの異なるスペースをつくる。それらに各機能を配分していきグリットの交点に開口を設けることで、三次元的につながる。

■CONCEPT DIAGRAM 4 / 隣室との繋がり

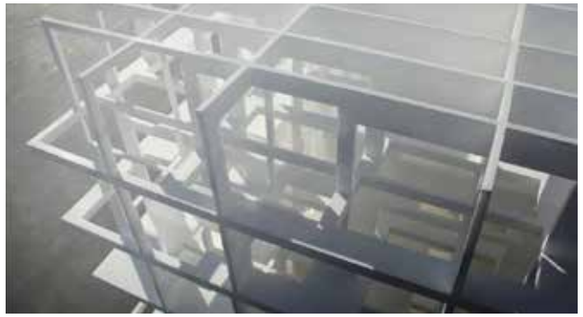
面に対して開口を空けると、
中央の部屋とつながる部屋は最大6部屋

開口を交点に空けると最大26部屋

GRID グリットは敷地にある3つの地下鉄の出入り口の位置、交差点に対しての開き方、前面の高速道路の高さ等のコンテクストを読みながら決定した。

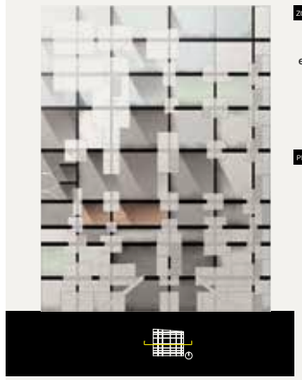
SITE 敷地は東京都の銀座の入り口と呼ばれる場所に位置する。都心は商業施設やオフィスビルが立ち並ぶため、公園のように何もせずに、目的がなくともふらっと立ち寄ったり各々が思い思いの時間を過ごせるような場所がほとんどないのではないか。
また、年配向けの老舗やブランドショップが立ち並ぶが学生や子供が訪れるような場所が少ない。

PROGRAM プログラムは常設・企画展示ギャラリー、ライブラリー、ワークショップスペース、アーティストインレジデンス等の複合施設となっている。

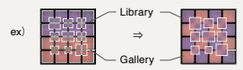


グラデーショナルに明るさが変化している

多孔質な光が落ちる



ZONIG 市松模様のゾーニング



PLANNING 様々な平面形状

主なプログラムとしては、下層から常設・企画展示ギャラリーとライブラリーが交錯しながら上部まで入っている。部屋から部屋へと移動する際に他の部屋の様子や外部空間を垣間見ることが出来る。ギャラリーやライブラリーを巡っていくなかでワークショップスペースやショップ、アーティストインレジデンス等の様々な機能と自然と接していくこととなる。

優秀に選ばれた遠藤さん。

「空間モデルとは違って、単位空間の集積という言い方のほうがよいのではないか。一義的な集積方法ではなく、単位と単位が多様な関係をもつのがよい。個々の空間は思いのままにつくられるが、グリッドを与えることで、全体性も確保している」と井出氏が同案を総括した。

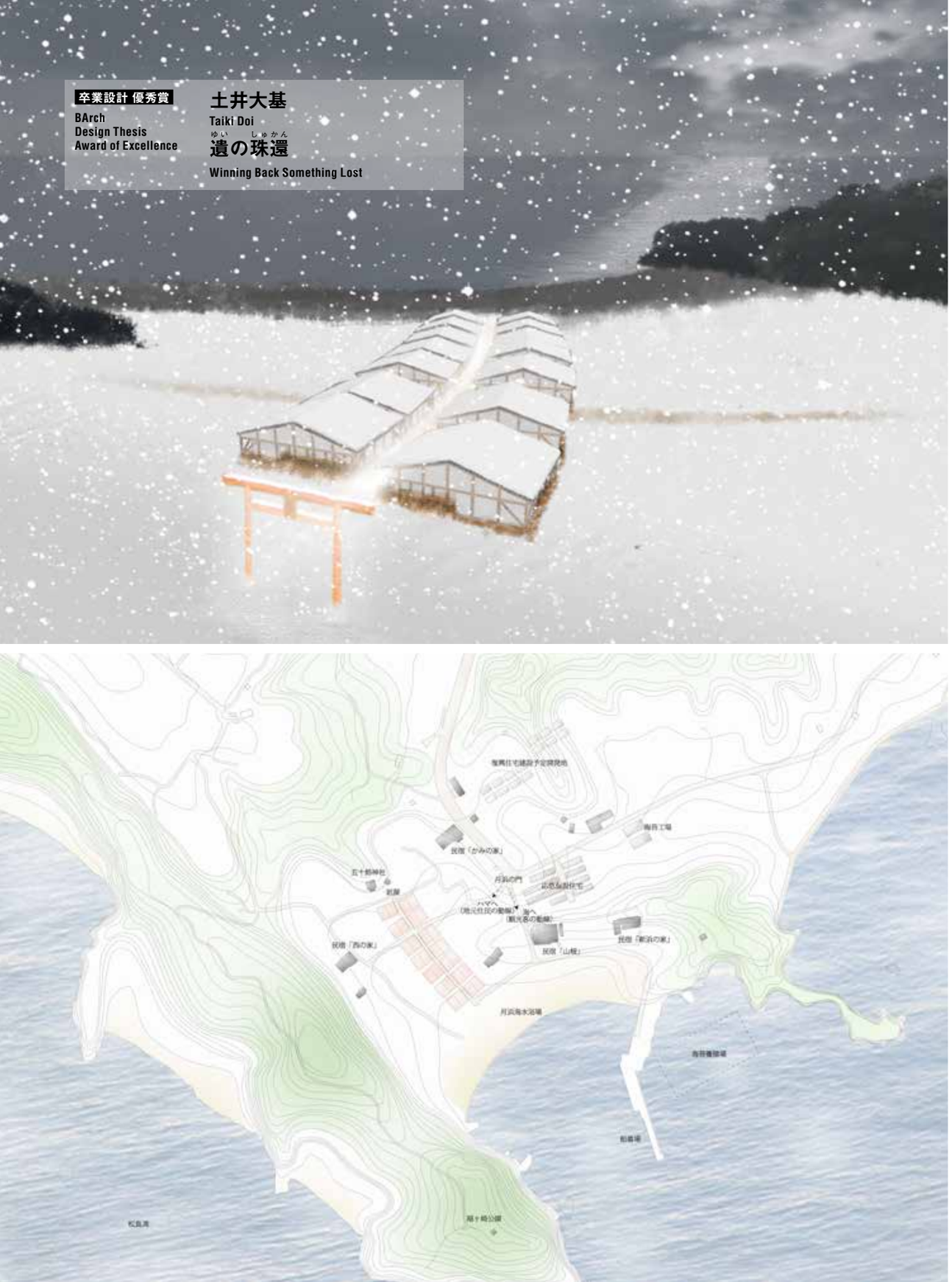
集落を丁寧に読み込み将来像を描く
優秀 「遺の珠還(ゆいしゅかん)」

もうひとつの優秀に選ばれた土井案は、自らの出身地の宮城県を敷地に選んだ。津波被害があった低平地の浸水域には住むことができず、高台に復興住宅がつくられる東松島市宮戸島月浜集落である。遺された土地に、集落に伝わる伝統行事「えんずのわり」(重要無形民俗文化財)を継承するための宿泊施設をつくり、それを集落の生業となるように民宿として運営することを提案した。
神社の参道に沿った施設配置について、「一見単調に見えるが、木造仮設住宅の再利用を意図していると聞くと納得できた」(廣瀬)、「月浜という美しい名前の由来は、海に浮かぶ月と神社の関係で参道の軸線が決まっているとのことで、軸線が大事。そこの祭が集落の下部構造の決定的な意味をもっていることを、精神性も含めて丁寧に読み解けているのではないか」(川向)、「住人の声に真摯に向き合っている。この地域に住む子どもたちのよりどころになり、この建築をきっかけにその周辺を、人々が利用していくような可能性を感じた」(大成)など、多角的な視点からの評価がなされた。
「浸水域には居住できないことが、跡地利用の足かせになっているのが現実。そこに民宿の管理人が常駐するための説得力がほしい」(伊藤)という問いには「ここの浜ではひとりの犠牲者もでなかったので、自信をもって民宿にした」と土井さん。「シンプルでストレート」(水井)な中にも、緻密なリサーチのもとに提案していることが伺えた。

審査員総評と初見教授の「残す言葉」

「自分の経験から社会と結びつくテーマを発見できたかどうか、かつそれがこの先10年考えていくことができるテーマかを基準に

25 頁に続く

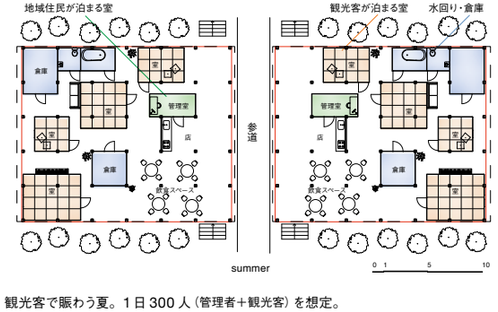


卒業設計 優秀賞
BArch
Design Thesis
Award of Excellence

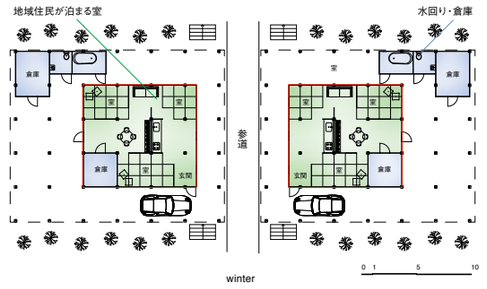
土井大基
Taiki Doi

遺の珠還（ゆいのしゅかん）
Winning Back Something Lost

震災からまもなく3年が経とうとしている今、私たちは被災地とどう向き合うべきだろうか。あの日、津波は住まい、生業、伝統を押し流した。そのような土地に復興計画は何を寄与できただろうか。
敷地とした松島湾に浮かぶ宮戸島に位置する月浜集落を何度も訪れるうちに、人々の想いとは余所に復興が進んでいる現状を目の当たりにした。島という特異な場所では復興住宅の提供だけでは不十分である。遺された土地に、集落の精神である伝統行事「えんずのわり」を継承しつつ、集落を成り立たせるため民宿を再建する。（土井）



観光客で賑わう夏。1日300人（管理者＋観光客）を想定。
3 mの参道は拡張され、軒下空間が生まれる。昼は漁業が盛んな月浜ならではの食材を提供し、観光客の滞留を促す。また夜は宿として観光客を受け入れる。震災前の経営のとおり、管理者1名が常駐。



地域色が増す冬。1日50人（地元住民）を想定。
雁木空間を残してヴォリュームを参道に寄せる。「えんずのわり」の期間中、復興住宅で暮らす家族全員が一時的に住まう。岩屋で暮らす子どもたちを集落全体で見守る。これにより「えんずのわり」は本来の場所で、本来のルートで行われる。

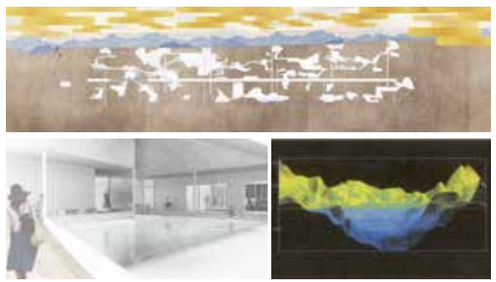
優秀に選ばれた土井さん。

評価した」（萬玉）
「プレゼンテーションは文章を読まずに、スティーブ・ジョブズのような身振り手振りがあってもよいのではないか」（提）
「震災復興では土木が先行しているが、建築で何かができることを建築界も発言していかなければならない。最優秀案はそれを示していたのではないか」（石橋）
「学生が、住宅がコモンよりもパブリックに開かれていくことを自然に受け止めていることに共感する。次世代の住宅をこの世代の人たちが確実に面白いものにしていくと思う」（桑原）
「事前審査のレベルも高かった。講評審査会に残らなかった人も設計をあきらめずに続けてほしい」（森）
「もう少し構造にも意識をもって設計してほしい。構造表現ではなく、空間モデルの中でデザインの骨格を強固にする別のレイヤーとして構造システムやモデルがあるような案を見てみたい」（横尾）
「建築はみんなでつくるもの。この審査会の場もまた、大学院生のみんながスタッフとして支えている。拍手を！」（松田）

最後に、長年にわたって理工学部建築学科の設計教育を率い、2013年度で退任される初見教授より、締めくくりの言葉を頂く。
「33年間で、だんだんと設計のレベルが上がり、退任のときに質の高い提案を見られて幸せでした。赴任したときには『中堅技術者を育てればよく、建築家は育てなくてよい』と言われ、すごく頭にきました。そしてようやく建築家を育てるようになれた。建築をつくる腕は相当なレベルになったと思うけれど、その先にいくときに何をするのか。新しいプログラムを考えたり、そういうことまで視野を広げて考えてほしい。設計は、誰かが企画したものの絵を描くだけになりがちだが、それを超えていくために、新しい企画や発想ができる人になってほしい。そうしたことも含め、これからもレベルを上げていってほしい。残す言葉です」

この日朝から降り続いた雪は、首都圏一帯の電車の運行を止めた。審査が終わった21時過ぎには運河周辺も銀世界。「オールナイトで初見先生の追コンを！」という天の思し召だったのだろうか……「朝までしのげるお酒と食料はあります！」とのこと。初見先生への感謝の気持ちを込め、教員・学生みんなで乾杯！

伊藤真彬 ｜ Masaaki Ito
万年都市京都



井上 遼 ｜ Ryo Inoue
『時間の時間』としての建築 ―Re Realize Time 指向性の消失へ―

上棚敬祐 ｜ Keisuke Uedana
路地尊のある風景

小田健人 ｜ Kento Oda
時空の横断／国立戦争博物館

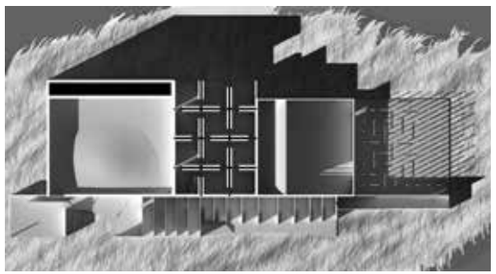
海宝裕樹 ｜ Yuki Kaiho
ニジむ建築 ―水彩絵具で描くように……―

片岡大輔 ｜ Daisuke Kataoka
dessert island resort

草谷悠介 ｜ Yusuke Kusatani
空白からの享受

斎藤直紀 ｜ Naoki Saito
見えない輪郭

田野口紘大 ｜ Koudai Tanokuchi
経験への記述



土屋祐貴 ｜ Yuki Tsuchiya
日本人のための住宅

宮本沙生 ｜ Saki Miyamoto
引き出す都市／引き込む建築

村松佑樹 ｜ Yuki Muramatsu
建築のムラ

山本大地 ｜ Daichi Yamamoto
透ける建築

設計のレベルは高くなりました。
その先にいくために何をするのか。
視野を広げ、自由な発想を
していってほしいです。

初見学 教授

鼎談

建築構造の意味を体験から学ぼう！

北村春幸教授 × 衣笠秀行教授 × 永野正行教授

聞き手：丹羽由佳理（伊藤香織研究室助教）

きたむら・はるゆき　Haruyuki Kitamura
1976年神戸大学工学研究科建築学修士課程修了/1976〜2001年日建設計にて建築構造設計に従事/2001年〜東京理科大学教授/工学博士

きぬがさ・ひでゆき　Hideyuki Kinugasa
1990年東京理科大学理工学研究科建築学博士課程修了/東京理科大学専任講師、助教授を経て2008年〜教授/工学博士

ながの・まさゆき　Masayuki Nagano
1988年 早稲田大学理工学研究科建設工学専攻修士課程修了/1988〜2008年鹿島建設で研究職に従事/2008年〜東京理科大学教授/工学博士

丹羽｜ まずはそれぞれの先生がご専門とされている研究内容や、ご経歴についてお聞かせください。

衣笠｜ 私は学生時代から理科大で、鉄筋コンクリートの研究をずっとやっています。現在の研究テーマは都市の耐震性で、目標は都市を守ること！ です。耐震性というとこれまでは人命を守ることが目標でした。それももちろん大事ですが、阪神淡路大地震で経済損失10兆円という記録的な値が出て以来、都市の経済活動をどう守るかが重視されています。もうひとつ重要なのが、人の生活を守ること。生活被害から人を守る大切さがクローズアップされてきました。

人命同様に、建物も地震で命を失うことがあるという視点が必要です。どういうことかというと、都市の経済活動を支えている建物は、経済的に生きている。血液はお金（キャッシュフロー）で、キャッシュフローが止まるとその建物は死んでしまう。つまり、修復費用が投入されなければ、存在価値がなくなるということです。もしも首都直下型地震が起きたら、100兆円の被害が出るといわれていますが、そこから建物の命をどの程度守ることが可能で、損失を防ぐことができるのか。人命保全だけではなく、経済や生活保全を事前に踏まえた上で、耐震性能がどの程度必要なのかを考えることが必要なんです。そのために、都市や建物の経済的な生死を定義し、建物の設計を再構築する研究をしています。

構造実験の様子。

北村｜ 私は大学に入学したのが大阪万博の年で、大学院修了後、日建設計で構造設計を、とくに超高層［*1］を多く手がけました。当時は超高層の黎明期で、日本建築センターの評定番号［*2］もまだ2桁台。20棟を超える超高層の設計に携わってきましたが、ツインタワーの「聖路加ガーデン」や、国内初のDPG構法［*3］で知られる「旧長銀ビル」などがあります。

「聖路加」は高さが200m近いので、建物の自重を軽くするために、ガラス繊維をいれた薄いカーテンウォールを施工の鹿島建設と一緒に開発しました。地上100mの高さで2本のタワーをブリッジでつないでいますが、それぞれが1/100変形することを想定すると建物の間が±2m寄ったり離れたりするので難しい設計でした。そこで、当時の住友金属工業の鉄道車両をつくる部門にお願いして、鉄道の台車技術を利用してピン支承部とローラー支承部を作成した。図面だけではなく、実際に使う支承部を取り付けたブリッジを作成してメーカーの研究所で本当にうまく動くか確かめる実験もしました。かつ安全のために建物がさらに大きく変形することも想定して、台車のピン接合側が切れてもブリッジが落ちない設計にしています。何重にも安全のための方策を考えているということです。構造は、安心して建物を使うための基本ですから、安全を自分が支えているのだという志で構造設計者を目指していました。構造設計の道に進む学生は、そういう意識をもって欲しいと思っています。

永野｜ 私は大学時代、構造家として活躍されていた田中彌壽雄先生の研究室に所属していました。当時、「球泉洞森林館」［*4］などの構造設計を担当されており、カッコイイ構造に憧れていました。その後鹿島建設に入社し、世界初の制震構造を実現させた小堀鐸二先生の研究室［*5］に約20年間在籍しておりました。入社当時は「幕張プリンスホテル（当時）」［*6］の耐震設計などをやらせて頂きました。その中で，1995年阪神淡路大震災が発生し，それ以降は地震動や地盤の揺れの研究も積極的に行なってきました。建物の振動解析は、地震が発生した時点から、振動がどのように地表に届き、建物に入力し、どのように応答するかを明らかにするものです。つまり、下から上まで縦串のように建物を見渡すセンスが必要となります。

理科大では主に建物や地盤の振動に関わる研究をしており、その中で揺れの検証も行なっています。建設時は当然構造計算を行ないますが、建設後に実際建物がどう動くかを確かめることが必要で、そのためには建物の揺れを計測する強震観測が重要です。3.11のときに地震計でどんな揺れを計測し、どんな被害があったか。それから超高層のマンションで何が起こったかをアンケート調査しています。そうすると、机上の計算だけでは分からなかったことが結構分かってきます。大地震時に実際に何が起きたかを把握しないと、未来の構造設計につながりません。今後、南海トラフや首都直下型地震が高い確率で発生すると言われていますが、それにあらゆる手を尽くして備えるのが構造デザインのひとつの使命だと思っています。

ポスト3.11の構造デザイン

丹羽｜ 東日本大震災以降、構造デザインの分野でどのような変化があるのでしょうか。

衣笠｜ 津波と原子炉被害の問題がクローズアップされていますが、その裏には大きな生活被害がありました。建物は安全性が確保されたのだけど、非構造壁や天井が滅茶苦茶に壊れて、金銭的にも日常生活にも被害を生み、それだけを抽出しても被害額は16兆円といわれています。

永野｜ 高層マンションの被害状況アンケートでは、「高層の揺れが怖い」「家具が移動した」「壁紙に亀裂が入った」「エレベーターが止まって困った」などの回答が多くあります。建物は壊れずに人命を守るのは当たり前の時代です。これからは二次的な被害をいかに防ぐか、被災後の生活も踏まえたトータルで安全対策を考えることが必要です。そのためには大地震時に建物の揺れを観測することが重要なのですが、スマートフォンですら加速度センサーがついている時代に、既存の建築物にはほとんど地震計がついていないのが現状です。何億円もする建物の揺れや被害を監視するセンサーがついていない状況は変えていくべきです。

北村｜ 構造壁やエレベータなどの設備の安全・安心は、以前は構造設計者がカバーしていたのですが、バブル経済がはじけた後はコストがシビアになったり、耐震偽装問題の後は書類づくりが増えたりで、設備や意匠設計の耐震性まで気を配れなくなったという現実があると思います。だから、地震などの非常時に対する配慮が欠けていた部分で事故が起こったと思います。問題になった天井はまさにそうで、3.11の後に国交省が基準をつくり、構造設計者が計算書を提出しないと特定天井［*7］は確認申請を受理しない方針です。でも本当は、天井をデザインする意匠設計者がそれも考えなくてはならないと私は思います。一級建築士の試験でも構造の科目はあるので、どんな力がどのように流れるといった理屈やバランス感覚を養ってほしい。意匠設計に進んだ人は「構造は分からない」といったりしますが、それは間違っている。構造設計者が不自然に大きな部材を提案したら、「もう少し細くても大丈夫なはず」と見抜くくらいの力を養って欲しいですね。

衣笠｜ 安全は、構造設計だけが担っているわけではないんです。建築の耐震性は、強度、変形能力、剛性、重量の4つで決まりますが、その中の重量と剛性はデザインで決定されてしまいます。たとえば10階建てでは採算があわないから20階建てにすると、建物の重量は2倍になります。剛性は、低層建物ならば大きいのですが、細長く高層にすると小さくなります。この結果建物周期が大きくなって最近問題になっている長周期地震動［*8］に対して建物を弱くしてしまいます。芸術性とか採算性から建物の形が決まるのは当然ですが、構造性能との関係を考えながらデザインして欲しいと思います。

北村｜ そうですね。大地震動は、位置エネルギーで換算すると建物を30cm持ち上げる程度のエネルギーが入力し、最大級の地震でも1m持ち上げる程度のエネルギーです。ということは、超高層は100m上に重量を持ち上げているのですから、それが落ちるエネルギーは、地震

＊1
建築基準法では高さ60m以上を「超高層」としている。

＊2
日本建築センターは国土交通大臣から指定された性能評価を行う機関で、超高層建設のためには同センターによる「評定」を必要とする。

＊3
ガラスに穴を開け、点で支持をすることでガラス面の変形を可能とする構法。Dot Point Glazingの略。

＊4
設計：木島安史。1985年日本建築学会作品賞受賞。

＊5
国内初の超高層「霞ヶ関ビル」の耐震設計を行った武藤清氏の研究所を引き継いだ。

＊6
設計：丹下健三都市建築設計

＊7
東日本大震災で体育館、ホールなどの天井落下が大きな被害をもたらしたことから、脱落によって重大な危害を生ずるおそれがある天井を「特定天井」と定義づけ、詳細を定めた建築基準法施行令などが2014年4月より施行された。

＊8
ゆっくりと長く続く地震動。とくに超高層に与える影響が大きく、近年注目されている。

入力エネルギーよりもずっと大きい。自然に対して挑戦するように膨大な位置エネルギーを蓄積しているということなんですね。地震の多い日本で、それを 100 年 200 年維持するというのは、実にすごいことなんです。だから慎重にならないといけないし、構造に対するセンスを磨いて欲しいです。

永野｜ 最近はコンピュータ解析の技術が高くなったので、どんなかたちでも解けますが、おふたりがおっしゃるように、周期とか剛性、二次部材など多くの要素を踏まえて考えなくてはならないということですね。

丹羽｜ コンピュータ上で解けていても、センスが必要なのでしょうか？

北村｜ コンピュータは、ひとつの外力に対しての答えを出すものですから、所詮 1 対 1 の対応しかできない。でも自然の中にある建物には、地震や風など加重のかかり方は複合的で何万通りもあるわけです。

構造設計は、外力をある程度選んで設定しますから、そのセンスが問われる。でもそれをひとりの人間がやると責任が問われるので、アメリカではリスク分散のために外力の設定と解析は別に行っています。そうした分断が行きすぎると、建物の安全性を総合的に見られなくなる危険があります。

日本はまだそこまでの分業にはなっていませんが、コンピュータでないと解けない複雑なことをやってしまうと、人間がトータルのバランスを理解できなくなってしまいます。それで「コンピュータ上で解けているから OK」としてしまうと、設定した以外の力がかかったときにどのように安全を確保するかを何も考えていないのがすごく怖い。だから、コンピュータ任せで解くのは計算屋であって構造設計ではない！　と私は言っています。計算することが構造設計ではなく、全体のバランスをとって安全・安心をつくることが設計なんです。

衣笠｜ 全体を見渡すのは、ものすごく難しいことです。建物に必要とされる性能は多様で、どれを優先するか決めるとき、ある性能を選択すると他の性能が消えていく場合があります。それをトレードオフ関係と言っていますが、本来はその関係が分かっていて、予算などを調整しながら、ある性能を重視するかしないかを見渡す人がいないと、よい建物はできないということですね。

分かりやすい例でいうと、超高層にすると床面積が大きくなり経済効率がよくなる。しかしそれは、地震のときの建物の大きな揺れを覚悟することでもあります。大地震でも壊れずに建物を機能させるためには、設備のグレードアップが必要なことが多いのですが、実際には予算の問題もあってやっていないことも多い。地震の後の生活被害には設備が大きく関係しますから、設備がすごく重要なのだけど、それが地震のときにどう壊れるか、実はその情報が少ないというのが実情です。

北村｜ 超高層の黎明期は、やはり皆が怖いと思っていて、設備設計者も耐震を気にしていました。1978 年の宮城沖地震で仕上げや設備に大きな被害が出て、1981 年から新耐震法 [*9] に移行したときも、多くの設計者が耐震設計で燃えていた時代でした。意匠や設備設計者も非構造部材や設備機器の耐震設計法を学協会で作成していました。けれど、その年代の人が定年になり、せっかくの蓄積が活かされず、技術の伝承が上手くいってないと私は見ています。

高い建築性能が要求される時代の構造教育とは？

丹羽｜ 建築の与条件やコンピュータ解析など、建築構造学も複雑化している状況だと思います。その中で、大学ではどのような教育が必要で、学生は何をどのように学ぶとよいのでしょうか。

衣笠｜ 建築はものすごく幅が広い分野で、多種多様の性能がつまっています。人が住むためのものを超えて、社会基盤を支えるものになっている。社会における重要性が高いから、それが必要とされていると思うんですね。学生には、そういうことにまず興味をもってもらいたいと思います。た だ「興味を持て」と言っても難しいから、まずは自分は何のために建築をやっていて、それで社会にどう貢献できるのかという使命感について、折々に話していきたいです。

また、構造設計をきちんと修得して欲しいのですが、15 回くらいの授業時間だと計算手順だけを教えがちになるんですね。それでは、学生に構造設計の意義や面白さを伝え切れていないかなと反省することがあります。ある式を解くことが建築のどの性能を満たすためなのか、数値的な余裕にどういう安全性の意味があるのかとか、その計算式が建物のどの性能を確保していて、それがどう社会貢献につながるのかを意識してもらえる教育をしたいですよね。単位を取得して終わるのではなく、その後も実際の建物を見ながら、あの計算式がこの性能に役立っているのだと、構造設計が人の生活や経済活動を支えていることを実感できるようになって欲しいです。

北村｜ 私は、やはり経験することが一番ではないかと思います。日建設計では例えば病院を担当したら、「1 棟で病院のプロにならなければならない」と言われています。自分のスキルを上げるために「徹底的にしゃぶりつくせ」と（笑）。それは、経験をおろそかにしてはいけないということです。構造も意匠同様に数多くのスケッチや構造計算書などいっぱい書きます。そのプロセスで、勘が培われていったと思っています。

永野｜ 確かに、体験は理解を深めます。振動研究の一環で、実際に揺れを体験してもらうこともやっていて、3.11 のときの超高層の揺れがどんなものだったか、阪神淡路のときの揺れがどんなだったかを経験すると、言葉ではわからなかったことが、わかってもらえます。3.11 の揺れでは余裕だったのが，阪神淡路のようなパルス的な揺れを体験するとその違いにかなり驚きます。一方で多くの学生はアトラクションのように楽しんでいます。実は、揺れそのものは基本的にそれほど怖いものではなく、振動で家具が倒れたり、ものが飛んできたり、天井が落ちてくることによって、怪我したり命を落としたりするのが怖いということもわかってもらえます。将来的には大地震がきても安心して、むしろ「楽しい」と思える環境をつくることを目指しています。そのためには、外力がどう発生して建築に影響を及ぼすかを理解しないと応用ができません。その総合判断をするための技術力を大学の中で高めていきたいですね。

ところで、理工学部の構造系研究室は、地震や震動から構造設計、それに経済活動のところまで幅広い分野をカバーしていると思います。それに、材料実験の破壊試験など、他の大学ではやっていないことですよね。

衣笠｜ そうですね。木材、鋼材、コンクリートを材料的に破壊する。それから梁にして破壊するのも一通りやっています。木材の梁を壊すとバリバリッとものすごい音をたてて最後は爆裂するので、学生も大喜びします（笑）。鉄骨は、むにょぉっと破壊するだけであまり面白くないとか（笑）。

永野｜ それも経験のひとつですね。そういうことをきっかけに構造に興味をもってもらい、技術と数字に裏打ちされた理論をしっかり学んで欲しいですね。

北村｜ 構造系の場合は、実際の建設現場を見るのもよい体験です。施工の時間に兼松学先生たちが引率して現場見学をやっていますが、構造や施工の分野に進む希望者が増えたと聞いています。

衣笠｜ 見学に行く場合は、せっかくなので勉強してから行った方がいいですね。鉄筋ひとつにしても「これが D-25 か」というように、ある程度の知識をもって見るのと漫然と見るのでは体験の質も違ってきますからね。

北村｜ 構造設計製図の授業では、園部隆夫先生に構造計算書と構造設計図と両方の作成を教えてもらっています。建物の重量を計算するところからやりはじめ、床スラブや小梁の応力解析をして断面を決めて、それを図面に描く。4 年でそれを終えてから修士 1 年で構造事務所にインターンシップにいくと、「授業で何をやっていたかが理解できた」という学生がいました。理科大の授業はハードとも言われていますが、長い目で見ると、けっして無駄なことをやっているのではないことが分かってもらえたと思います。

構造系研究室の特徴をもうひとつ挙げると、地震、風など動的外乱を得意としていることではないでしょうか。建築基準法では静的な力を扱っていますが、それだけでは実際の研究も設計もやっていけない時代です。動的な最先端の研究ができるのは強みといえるのではないでしょうか。

衣笠｜ そうですね。現代は、建物に求められる性能が上がっているので、静的な外力や強度だけだと性能確保できなくなっていますね。

北村｜ 人が揺れをどう感じるかという居住性は、動的な力を分析しないとなりませんからね。天井落下も、振動や周期、変形を理解してないと、回答が出てこない。そうした動的問題に関するセンスを磨くことができる環境があるということですね。

経験や実験が大切という話が出ましたが、最後に実験を安全にやるために、助教や TA が頑張ってくれていることもぜひ学生に伝えたいです。実験助手の人数が多くないと安全が守れないので、修士の学生には全員 TA をやってもらっています。この 3 研究室と兼松研・大宮研の 5 研究室で、大学の規定の TA の数を修士の学生の人数で割って、ワークシェアしています。TA をやることは、学生のキャリアにもなりますし、後輩の面倒をみる経験にもなりますから。

永野｜ 自分が理解できていないと他人に教えられませんから、TA にとってももう一度勉強する機会になって、間違いなく良い経験になっていると思います。

北村｜ 日本の建築教育は、意匠・構造・設備がひとつの学科の中にあるのが特徴です。世界の主流は、意匠は芸術学部、構造は土木系（シビル・エンジニア）、設備は機械系（メカニカル・エンジニア）と学部・学科が分かれている。日本では、たとえ意匠系に進んだとしても構造や設備についての基本的な知識を学んでいるので、それをおろそかにせず、少なくとも学部時代は、最低限のことを広く学ぶべきです。一級建築士の資格のためだけでなく、関連する分野の知識をもっておくと、将来、幅のある設計ができると思います。建築は協働作業ですから、パートナーの気持ちを理解するためにも、学生時代には同じ釜の飯を食っていること、つまりあまり早く専門に特化せずに幅広く学んでいることが大事だと思いますね。

（2014年4月30日　2号館4階にて）

左から、丹羽助教、衣笠教授、北村教授、永野教授

＊9
建築基準法施行令改正として、それまでの耐震基準が大きく見直され、頻発地震に建物が耐える一次設計、めったに起こらない大地震時には人命を守るための二次設計の概念が導入された。

教員紹介

教授・准教授・助教

初見 学(教授)
Manabu Hatsumi

1948年山口県生まれ/1971年東京大学工学部建築学科卒業/1973年同大学院修士課程修了/清水建設、東京大学助手を経て、1981年〜東京理科大学理工学部建築学科講師/1997年〜同学科教授/研究分野:建築計画(住居論・集合住宅・比較居住文化・環境心理)、工学博士

川向正人(教授)
Masato Kawamukai

1950年香川県生まれ/1974年東京大学工学部建築学科卒業/1977〜79年オーストリア政府給費留学生/1981年東京大学工学系研究科建築学博士課程単位取得満期退学/明治大学建築学科助手、東北工業大学建築学科助教授を経て、1993年〜東京理科大学理工学部建築学科助教授/2002年〜同教授/2005年〜東京理科大学・小布施町まちづくり研究所所長/研究分野:近現代建築史・建築論(住まい、有機体、メタボリズム、批判的地域主義)、まちづくり、工学博士

岩岡竜夫(教授)
Tatsuo Iwaoka

1960年長崎県生まれ/1983年武蔵野美術大学建築学科卒業/1985年同大学大学院修了/1988年パリ建築大学ベルヴィル校留学/1990年3月東京工業大学大学院博士課程修了/1992年〜2003年東海大学工学部建築学科講師、助教授、教授を歴任/2003年株式会社アトリエ・アンド・アイ岩岡竜夫研究室設立/2011年〜東京理科大学理工学部建築学科教授/研究分野:都市計画・建築計画、建築史・意匠、工学博士

伊藤香織(准教授)
Kaori Ito

1971年東京都生まれ/1994年東京大学工学部建築学科卒業/2001年同大学院工学系研究科建築学専攻博士課程修了/1999 〜 2002年日本学術振興会特別研究員/2002 〜 05年東京大学空間情報科学研究センター助手/2005 〜 08年東京理科大学理工学部建築学会専任講師/2008年〜同准教授/研究分野:都市計画・建築計画(都市デザイン、都市解析)、博士(工学)

安原幹(准教授)
Motoki Yasuhara

1972年大阪府生まれ/1996年東京大学工学部建築学科卒業/1998年同大学院工学系研究科建築学専攻修士課程修了/1998年〜 2007年山本理顕設計工場/2008年〜日野雅司、栃澤麻利とSALHAUS一級建築士事務所共同主宰/2011年〜東京理科大学理工学部准教授

丹羽由佳理(助教)
Yukari Niwa

1979年愛知県生まれ/2002年名古屋市立大学卒業/2004年東京大学大学院修士課程修了/2007年同大学博士課程満期修了/2007 〜 2010年UDCK柏の葉アーバンデザインセンターディレクター、早稲田大学助手を経て2012年〜東京理科大学理工学部建築学科助教/研究分野:都市計画・建築計画(都市デザイン)、博士(環境学)

水野貴博(助教)
Takahiro Mizuno

1974年愛知県生まれ/1997年東京大学工学部建築学科卒業/2001 〜 2003年ハンガリー政府給費留学生としてブダペスト工科経済大学留学/2007年同大学工学系研究科建築学専攻博士課程修了/2007 〜 2008年同大学院客員研究員/2008 〜 2012年跡見学園女子大学非常勤講師/2011年〜東京理科大学助理工学部建築学科助教、慶應義塾大学非常勤講師

柄沢祐輔(助教)
Yuusuke Karasawa

1976年東京都生まれ/1999年慶応義塾大学環境情報学部卒業/2001年慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科建築・都市デザインコース修了/2002 〜 2003年文化庁派遣芸術家在外研修制度にてオランダのMVRDV在籍/2004 〜 2005年坂茂建築設計勤務/2006年柄沢祐輔建築設計事務所設立/2012年〜東京理科大学理工学部建築学科助教

1年生担当(非常勤講師)

岩崎整人
Yoshihito Iwasaki

1973年岡山県生まれ/1996年東京大学工学部建築学科卒業/1998年同大学工学系研究科建築学専攻博士課程修了/1998 〜 2006年原広司+アトリエ・ファイ建築研究所/2006年岩崎整人建築設計事務所設立/現在東京理科大学理工学部建築学科非常勤講師

大成優子
Yuko Onari

1974年東京都生まれ/1997年東京工業大学工学部建築学科卒業/1997 〜 2002年妹島和世建築設計事務所/2002年大成優子建築設計事務所設立/2010年〜東京理科大学 理工学部建築学科非常勤講師/2012年〜芝浦工業大学デザイン工学部デザイン工学科特任准教授

小池ひろの
Hirono Koike

1964年生まれ/1987年武蔵野美術造形学部建築学科卒業/1987 〜 93年伊東豊雄建築設計事務所/1994年一級建築士事務所アトリエP設立/1997年手塚義明とケイティアーキテクチャー一級建築士事務所を共同で設立/現在、東京理科大学理工学部建築学会非常勤講師

高安重一
Shigekazu Takayasu

(5頁参照)

中畑昌之
Masayuki Nakahata

1979年静岡県生まれ/2004年東京理科大学理工学部建築学科卒業/2006年同大学院修士課程修了/2007年ロンドン大学バートレット校MArch/東京理科大学理工学部建築学科助教を経て2010年にhtmn共同設立/2013年〜東京理科大学理工学部建築学科非常勤講師

山中悠嗣
Yuji Yamanaka

1980年京都府生まれ/2003年京都府立大学環境デザイン学科住環境学専攻卒業/ 2006年東京工業大学大学院修了/2004年〜GENETO建築設計事務所/2008年〜東京理科大学理工学部建築学会非常勤講師

2年生担当(非常勤講師)

桑原聡
Satoshi Kuwahara

1960年東京都生まれ/1984年東京理科大学理工学部建築学科卒業/1986東京芸術大学美術学部大学院建築科修了/1986 〜 94年リクルートコスモスを経て、コスモスモア設計部/1994年桑原聡建築研究所設立/2007年唯アソシエイツ共同設立(家具デザイン・制作) /2011年〜東京理科大学理工学部建築学科非常勤講師

高橋堅
Ken Takahashi

1969年東京都生まれ/1993年東京理科大学理工学部建築学科卒業/1995年同大学大学院理工学研究科建築学専攻修士課程修了/1996年コロンビア大学建築都市修景学部大学院修了(M.S.A.A.D.)/1997 〜 2000年青木淳建築計画事務所/2000年高橋堅建築設計事務所設立/2002年〜東京理科大学非常勤講師/現在、京都造形芸術大学、東京理科大学第二工学部非常勤講師

水井敬
Kei MIzui

1980年東京大学工学部建築学科卒業/1982年同大学院工学系研究科専攻課程修了/1982 〜 2001年槇総合計画事務所勤務/1998年〜東京理科大学理工学部建築学科非常勤講師/2001年水井敬建築設計事務所開設/現在、足利工業大学非常勤講師、法政大学、同大学院兼任講師

森清敏
Kiyotoshi Mori

1968年静岡県生まれ/1992年東京理科大学理工学部建築学科卒業/1994年同大学院修士課程修了/1994 〜 2003年大成建設設計部/2003年〜 MDS一級建築士事務所共同主宰、2010年にMDSに改組/2006年〜日本大学非常勤講師/2009年〜東京理科大学理工学部建築学科非常勤講師

3年生担当(非常勤講師)

石橋利彦
Toshihiko Ishibashi

1947年愛知県生まれ/1970年東京理科大学工学部建築学科卒業/1972年同大学院工学研究科修了/1972 〜 85年大成建設株式会社/1985年石橋徳川建築設計所設立/1991年〜東京理科大学工学部非常勤講師、東京理科大学評議員/2002年〜同大学理工学部建築学科非常勤講師

井出 建
Takeshi Ide

1945年東京生まれ/1969年東京藝術大学大学卒業、在学時代に松山巖、元倉眞琴と共にコンペイトウを結成/1984年一級建築士事務所・環境計画機構設立/1984年から東京理科大学非常勤講師

郡裕美
Yumi Kori

1983年京都府立大学住居学科卒業/1983 〜 86年一級建築士事務所共同制作/1987 〜 90年アルテック建築研究所/1991年、遠藤敏也と一級建築士事務所スタジオ宙(おおぞら)設立/1994年コロンビア大学建築都市修景学部大学院修了(M.S.A.A.D.)/1996 〜 2004年コロンビア大学准助教授/2011年〜東京理科大学理工学部建築学科非常勤講師

齋藤精一
Seiichi Saito

1975年神奈川県生まれ/1999年東京理科大学工学部建築学科卒業/2001年コロンビア大学建築都市修景学部大学院修了(M.S.A.A.D.)/2000年からNYで活動を開始。建築に限らず、プロダクトデザイン、映像、インタラクティデザインなどさまざまな活動/2006年ライゾマティクス設立/2005年〜東京理科大学理工学部建築学科非常勤講師

提 祐樹
Yuki Sage

1974年埼玉県生まれ/1997年東京理科大学理工学部建築学科卒業/1999年同大学大学院修士課程修了/1999年坂茂建築設計/2000 〜 07年エリア総合計画事務所/2008年一級建築士事務所ユーキテクト設立/2013年〜東京理科大学理工学部建築学科非常勤講師

田口知子
Tomoko Taguchi

1966年広島県生まれ/1990年東京大学建築学科卒業/1990 〜 98年長谷川逸子・建築計画工房/1999年K&Tアーキテクツ設立/2000年田口知子建築設計事務所に改名/2008年〜東京理科大学理工学部建築学科非常勤講師/現在、法政大学デザイン工学部非常勤講師

内藤将俊
Masatoshi Naito

1972年埼玉県生まれ/1996年東京理科大学理工学部建築学科卒業/1998同大学大学院修士課程修了/1999年コロンビア大学建築都市修景学部大学院修了(M.S.A.A.D.)/2000〜 2009年新居千秋都市建築設計/2008年〜東京理科大学理工学部建築学科非常勤講師/2009年内藤将俊建築設計事務所設立

廣瀬大祐
Daisuke Hirose

1974年長崎県生まれ/2000年東京理科大学大学院修了/隈研吾都市建築事務所勤務後、2002年コロンビア大学建築都市修景学部大学院修了(M.S.A.A.D.)/2005年アーキコンプレックス設立/2007年〜東京理科大学理工学部建築学科非常勤講師、2010年〜同大学デジタル・スタジオ スタジオマスター/現在、東京大学特任非常勤講師、コロンビア大学GSAPP Studio X Tokyo ディレクター

宮下信顕
Nobuaki Miyashita

1972年長野県生まれ/1995年東京理科大学理工学部建築学科卒業/1997年同大学院修士課程修了/1997年竹中工務店入社. 現在東京本店設計部第1部門副部長/2011年〜東京理科大学理工学部建築学科非常勤講師

横尾 真
Shin Yokoo

1975年山梨県生まれ/東海大学大学院工学研究科修士課程修了/池田昌弘建築研究所を経て、OUVI設立/2008年よりヨコヲノ森/2011年〜東京理科大学非常勤講師

ヨコミゾマコト(特別講師)
Makoto Yokomizo

1962年神奈川県生まれ/1984年東京藝術大学美術学部建築学科卒業/1986年同大学大学院修了/1988年〜 2000年伊東豊雄建築設計事務所/2001年aat+ヨコミゾマコト建築設計事務所設立/2009年〜東京藝術大学准教授

1
年生

空間デザイン及び演習 —— 課題 Assignment

光の箱

Light Box

この課題では、単純で十分なボリュームのある箱を出発点として、そこに光を満たし、風を呼び込む事で空間をつくってもらう。箱にさまざまな操作を加えることにより、光の扱い方を習得。また内部空間を、一眼レフカメラを使って接写で撮影することを学んでもらう。視点を3つ設定し、魅力的な光の表現を求める。

This assignment starts from a box, a simple but generous volume. The task is to create a space by filling the box with light and bringing in the air. Through various operations on the box, learn how to handle light. Learn how to make close-up photos by photographing the interior with a single-lens reflex camera. Establish three viewpoints and design an attractive expression of light.

担当教員 Supervisors

安原幹 Motoki Yasuhara
岩崎整人 Yoshihito Iwasaki
小池ひろの Hirono Koike
高安重一 Shigekazu Takayasu
丹羽由佳理 Yukari Niwa

伊藤武志
Takeshi Ito

壁の開口や隙間、素材のスタディをしっかりしている（高安）。構成がよく3つの空間に区切られていてもそれぞれが関わり合っていてよい（小池）。隙間の上部から光が入ってきているなど複雑なことをいろいろやっている。シャープに写真が撮れている（岩崎）。

浦 望
Nozomi Ura

四角い開口が精度よく開いていてよい（高安）。アングルは同じだが3カットが違うシーンのように見える。光の入り方でバリエーションができている。壁だが柔らかい布でできているようにみえてやわらかい感じがしてよい（小池）。壁にも明暗ができていてよい。さらに光と影のコントラストもよくでている（岩崎）。

酒井健太郎
Kentaro Sakai

表現の手法をしぼったストイックな作品。造形的につくり込んでいる。スチレンボードの透過率をうまく使っているため完成度が高い（岩崎）。内側だけではなく、外側にも出ているため、箱に奥行き感が出た（安原）。人と壁とスチレンボードのコントラストがよく、施工もきちんとできている（小池）。

佐藤康行
Yasuyuki Sato

階段の隙間から青い光が出ていて綺麗（丹羽）。段ボールの奥の天井のところの光がなかった方が階段の下からの光がシャープに出てよかった（安原）。階段を装置として多様な光が存在するとよかった（岩崎）。丁寧につくられていて空間の構成力があって、階段にリズムがあり、人が楽しそうにしているのも伝わる（小池）。

福田泰之
Yasuyuki Fukuda

実際の空間として使っても楽しく感じられる。空間をつくる能力が高く、開口の開け方や閉じた面のバランスもよい（丹羽）。壁にライン状に映る影がより強く出るとよかった。フィリップ・ジョンソンの「The Glass House, Sculpture Gallery」で床にうつるストライプの影を彷彿させる（高安）。

森安泰介
Taisuke Moriyasu

この空間をつくりたい！　というやりたいことがはっきりしていてよい（安原）。奥行き感があるのがよい。浮遊しているものなので余分なピースが見えない方がよいが、糸で縫ったというのが新鮮（小池）。人が滞在する場所というより、インスタレーションを楽しむ場所として面白い（高安）。

1年生

空間デザイン及び演習 —— 課題 Assignment

ピクニック

Picnic

ピクニックは社交の場である。集まる、座る、飲食する、歓談するといった行為を成立させるためには多面的なデザインを必要とする。またそれは社交空間であると同時に都市の中の公共空間でもある。自分たちの存在がその場の風景をどのように変え、道行く人びとからどのように見えるのかも含めてデザインしなくてはならない。この課題では、屋外で人と過ごす空間と時間をデザインし、実際につくって体験してもらう。

A picnic is a place for social interaction. It requires a multifaceted design to enable activities such as gathering, sitting, eating, drinking, and conversing. But while being a space for social interaction, it is also a public space in the midst of the city. The design must be conscious of how the presence of participants changes the landscape, of how it looks to passers-by. The assignment is to design a place to spend time with others outdoors, and to actually build and experience it.

担当教員 Supervisors

伊藤香織 Kaori Ito
安原幹 Motoki Yasuhara
大成優子 Yuko Onari
小池ひろの Hirono Koike
山中悠嗣 Yuji Yamanaka
中畑昌之 Masayuki Nakahata

2 班

荒井沙弥伽／扇谷厚志／小川一真／粥川知宏／キュウ・カカ／竹内さや香／田村大典／中上裕仁／前田龍聖／村地拓也
Sayaka Arai/ Atsushi Oogitani/ Kazuma Ogawa/ Tomohiro Kayukawa/ Kyu Kaka/ Sayaka Takeuchi/ Daisuke Tamura/ Hiroto Nakaue/ Ryusei Maeda/ Takuya Murachi

3 班

伊賀竣哉／加藤恭輔／キム・ナヨン／久保圭祐／酒井健太郎／新海樹生／富田 晋／中野拓朗／本橋実沙／弓野康弘
Shunya Iga/ Kyousuke Kato/ Kim Nayoun/ Keisuke Kubo/ Kentaro Sakai/ Nao Shinkai/ Shin Tomita/ Takuro Nakano/ Misa Motohashi/ Yasuhiro Yumino

4 班

石松慎太郎／入江慎／岡野一樹／カク地 航／木曽ひかり／小浦幸平／中村悠紀／パン・シュンイップ／深井沙英子／渡辺眞伍
Shintaro Ishimatsu/ Shin Irie/ Kazuki Okano/ Wataru Kakuchi/ Hikari Kiso/ Kouhei Koura / Yuki Nakamura/ Phang Chunyip/ Saeko Fukai/ Shingo Watanabe

総評：ラグなどツールが空間をつくる。場所選びも大事（山中）。外部空間でモノの数や大きさを場所にあわせて決めていく感覚を大事にしていくとよい（小池）。ピクニックはスケール感の勉強になり、場をつくる体験になる（中畑）。用意したモノをどのように並べるか、現地で考えるのも大事（大成）。外の空間で1/1でやる意義を理解してもらえたと思う。学生にはサービス精神を持ってほしい。設計はサービス精神も大切になる！（安原）。場所の選定がバリエーションに富んでいた。場所によってデザインも変わってくることが意識されたのではないか。時間•体験を意識して、空間デザインに取り組んでほしい（伊藤）。

1年生

空間デザイン及び演習 —— 課題 Assignment

あなたの部屋を空間化せよ

Transform your room into space!

1年生の「空間デザイン」の最後は、いよいよ実物（原寸大）への挑戦となる。自分の部屋を敷地と見立て、空間としてデザインすることを課題とする。〈空間化〉とは〈模様替え〉や〈改装〉とは違う。何をどうすれば今までの〈ただの部屋〉が〈空間〉と呼べるものになるのか、ということに1年間のトレーニングの成果をぶつけてもらいたい。

The final assignment for 1st-year “Spatial Design” is a life-size challenge. Think of your own room as a project site, and design it as a space. Transformation into a space is not the same as redecorating or remodeling. What needs to be done to transform what was “just a room” into a “space”? And how? The assignment is to apply the insights learned over the past year of training.

担当教員 Supervisors

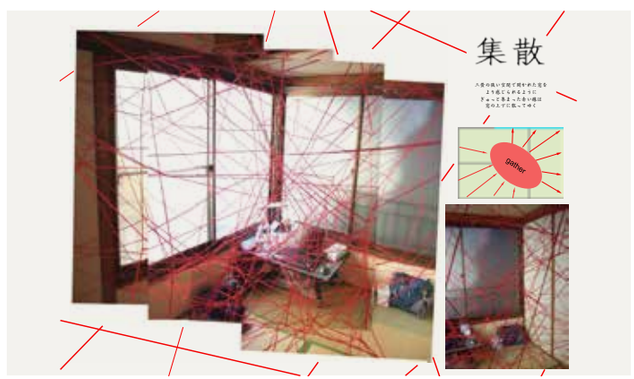
伊藤香織 Kaori Ito
安原幹 Motoki Yasuhara
大成優子 Yuko Onari
小池ひろの Hirono Koike
山中悠嗣 Yuji Yamanaka
中畑昌之 Masayuki Nakahata

伊賀竣哉 ｜ Real Light Box

Syunya Iga

岡田彩見 ｜ 集散

Ayami Okada



照井飛翔 ｜ 丘陵地帯

Tsubasa Terui

講評：伊賀案は、前期課題「光の箱」の実寸版。裏面を着色したボードを開口部の前面に配し、色が混ざり合う空間を現出させた。正攻法だが美しい。岡田案はもとの和室には家具も含めて全く手を加えずに、赤い糸を張り巡らせて狂気を感じさせる密度感を獲得した。この窓を外から見てみたい。照井案はウレタン製の「丘」を部屋一杯につくった。一見すると力業だが、まずつくってみて、生活しながら必要な場所に開口を空けたというデザインの仕方が、非常に現代的である。（安原）

2
年生

設計製図 I ── 課題1 Assignment 1

「別荘＝もうひとつのイエ」を設計する

Design a Villa = Second House

あなたは別荘の設計を依頼された。なぜあなたのクライアントは別荘を持ちたいと考えたのか？　どんな生活や体験を期待して依頼してきたのか？　日常のくらしから距離を置いた非日常性を求めて？　はたまた家族以外の誰かと集うために？　計画地は神奈川県の温泉街の湯河原町に実在する敷地である。これらの条件と提案者の自由なクリエイションを掛け合わせた「別荘＝もうひとつのイエ」を構成すること。（出題：桑原 聡）

You have been asked to design a holiday home on an actual site in Yugawara, a hot-spring resort in Kanagawa Prefecture. Why does your client want to have a second home? What kind of life and experiences does the client have in mind? Is it something out of the ordinary, at a certain distance from everyday life? Perhaps the client wants to get together with someone other than family members. While imagining these things, apply your creativity as designer to the conditions and propose a “Holiday home = Another house”.

担当教員 Supervisors

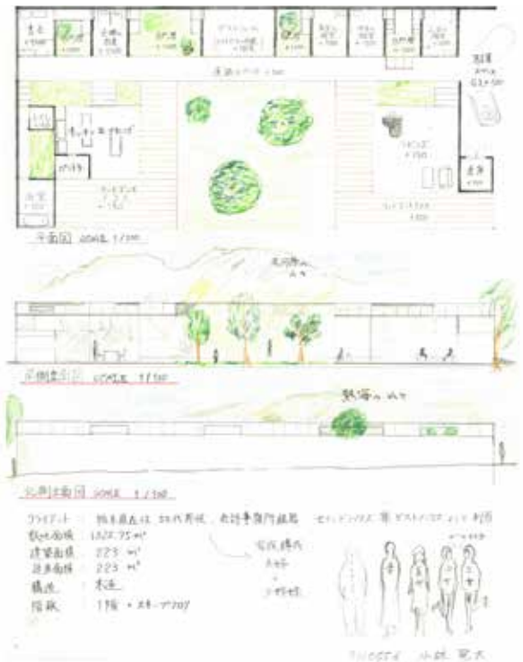
初見学 Manabu Hatsumi
桑原聡 Satoshi Kuwahara
高橋堅 Ken Takahashi
水井敬 Kei Mizui
森清敏 Kiyotoshi Mori
柄沢祐輔 Yuusuke Karasawa

所在地：神奈川県足柄下郡湯河原町　　主要用途：別荘　　敷地面積：1325.75m²

総評　各自でコンセプトを設定し、その軸にしたがってスタディを進め、意図していなかった空間を大切に。その二つの軸を行き来することでよりよいデザインができる。敷地に実際に行った時の目線や、考えた空間からの目線などさまざまな目線から設計すること。建築のみではなく敷地内のアプローチや道路との関係など全体のデザインも考えられると良かった。全体として、図面の表現がまだイマイチ。発想だけでなく最後までやりきることが大切。（桑原）

小林晃大 ｜ 環境に寄りそう生活

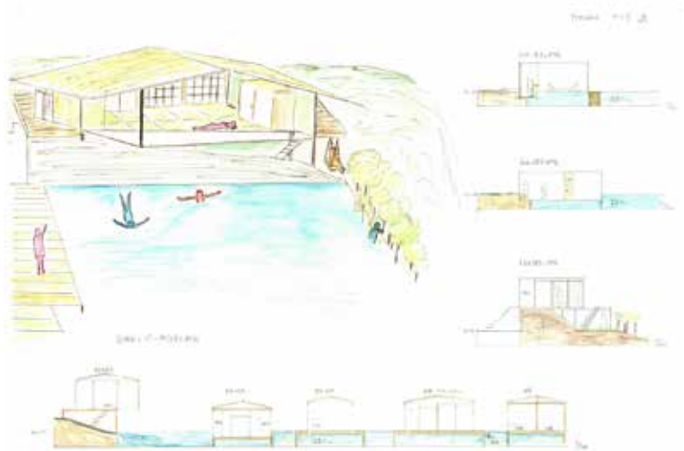
Kouta Kobayashi



講評：現地調査に行き、敷地に対してどのような広がりやポイントをつくれるかを見出している。大きな屋根で覆われた下に空間をイメージできている。（水井）

中村遥 ｜ プールのある別荘

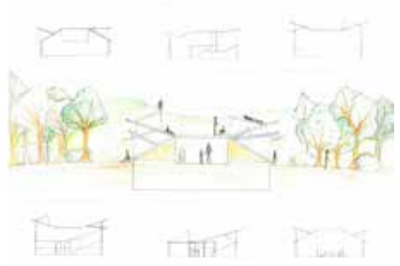
Haruka Nakamura



講評：敷地全体うまく活かすことができている。温泉を用いたシナリオを描き、プール、温泉、枯山水を配置して、南北の水をデザインしている。建物と水との関係を楽しそうにデザインしている。（初見）

原綾乃 ｜ 繋げる家

Ayano Hara



講評：一枚の紙に切り目を入れ、反らせて空間をつくっていくスタディの進め方が面白い。地面に住宅を埋没させ、地面を切って反らせてできた空間の中に眺望の制御をしつつも南北のひろがりをもたらしている。（桑原）

2
年生

設計製図 I —— 課題2 Assignment 2

20年後の私の家

My House After 20 Years

大学2年生の多くは20年後、「不惑」の40歳を迎える。課題を「20年後の私の家」としたのは、将来のライフスタイルを考えるきっかけとなればという思いもあるが、40歳前後で家を建てる人は実際に多く、敷地も私が設計した住宅と同じ場所としてリアリティの高いものにしたかったからである。形態的なコンセプトだけでなく、周辺環境、居住性を考慮し、スケール感を身につけることなど、建築の基本を学ぶことを目的としている。（出題：森清敏）

Build the house you want to live in at age 40. The site is an actually existing lot in Ogikubo, Tokyo. Assume that 20 years from now the 245 m^2 lot will be subdivided into a smaller lot, 118 m^2, and imagine your ideal lifestyle at that time. Designs should also take advantage of the characteristics of the site, such as the fact that it is a corner lot surrounded by greenery. (Assigned by: Kiyotoshi Mori)

担当教員 Supervisors

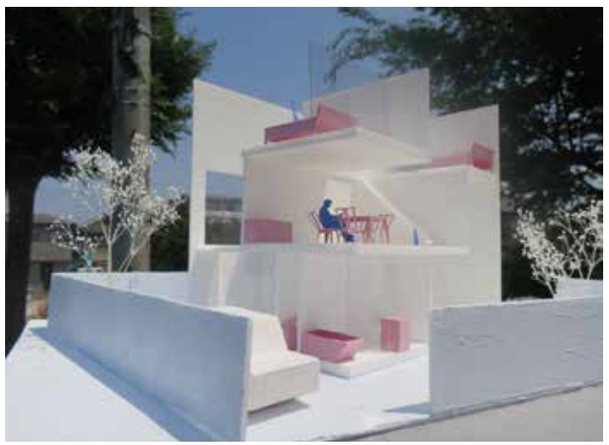
初見学 Manabu Hatsumi
桑原聡 Satoshi Kuwahara
高橋堅 Ken Takahashi
水井敬 Kei Mizui
森清敏 Kiyotoshi Mori
柄沢祐輔 Yuusuke Karasawa

所在地:東京都杉並区荻窪　　主要用途:戸建住宅　　敷地面積:118m^2

総評 テーマをきちんと設定し、それに集中して取り組んだ作品が優秀案に選ばれている。2年生は設計の技術そのもの以外に図面の描き方をできるだけ早く習得してほしいということも教育目標となっている。建築の専門雑誌など図面、写真が載っているものをたくさん見て、どういう風に空間を表現するのか、どうすれば分かりやすく伝わるのかというのを読み込んで欲しい。（初見）

向島 希 ｜ 二重らせんの二世帯住宅

Nozomi Mukojima



講評：外観は単なるボックスだが、二重らせんの空間を内部で空間の区割りだけで作ることによって、外観はすごくシンプルだが、外観からは想像の出来ない内部の空間の繋がりというのができていて、しかも二重らせんをかみ合わせるというそれだけのロジックで豊かな空間が出来ている。開口部が非常に複雑に取られていて、二重らせんの動線がぶつかる所に開口が設けられていたりする。非常に巧みに開口がとられていてプロポーションがよい。
模型のプレゼンがよくできている。白い抽象的な空間の中に、人が青、家具がピンクで統一するというユニークなプレゼンをしている。（柄沢）

中村 遥 ｜ 屏風 HOUSE

Haruka Nakamura

講評：屏風というコンセプトが一貫して建物を構成している。非常に制約のあるルールにもとづいたプランではあるが、機能的には破綻はしていない。屋根のかかった部分が内部と外部を横断している状態となって曖昧に内部と外部を扱っているところがうま くいっている。道に対して45°振っていることで窓が街に対して正対せず、街に対してよい開き加減になっている。（森）

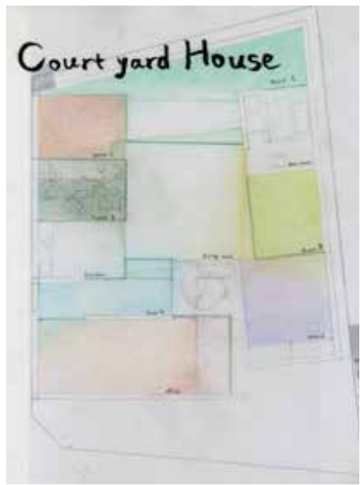
中村駿介 ｜ Connect House ～つなげる家～

Shunsuke Nakamura

講評：強い形をもったテーマだったからそれで押し切ることができたらよかったのではないか。それに対して我慢できずに細かい操作をしてしまったのがテーマを弱めているのではないか。
テーマを決めた以上はどこまでそれで押し切れるのかが大事じゃないか。それによって生み出された内部空間と外部空間のせめぎ合いが魅力的だった。（水井）

原 彩乃 ｜ コートヤードハウス

Ayano Hara



講評：母と自分のふたりが住むという想定で、平屋建てのSOHOを計画。プライバシーを保ちながら、住まいと仕事場をどのように分節するかということがテーマとなった。結果としては複数の庭を持つ二世帯のコートハウスになったが、単純な操作からどれだけ豊かな空間が生まれるかを見極めるよう指導した。天井高さなどを工夫することで、平面的な形としての要素は減らした方がよりストレートに伝わるものとなったのではないか。（高橋）

2年生

設計製図 Ⅱ —— 課題3 Assignment 3

家具のパビリオン
Furniture Pavilion

「家具のパビリオン」を求める課題。2人の講師がそれぞれ異なる敷地、設定条件を示した。
① 代官山の家具のパビリオン（出題者:水井敬）
家具を「使う」「見る」「買う」対象として、それぞれの関わり方が体験できる空間を、東京・代官山という都市的な立地で考える。
② 古都に建つパビリオン（出題者:高橋堅）
古都鎌倉は、深い緑に囲まれるなどの「環境のよさ」と観光地の「集客力」があることに着目し、鶴岡八幡宮の近くにある名建築「神奈川県立美術館」（坂倉準三設計）の向かいを敷地とする。環境と集客のふたつの要素に、どのように建築を開いたり閉じたりするかを問う。

An assignment calling for a Furniture Pavilion. Two instructors set different sites and conditions.
1) Furniture Pavilion in Daikanyama (Assigned by: Kei Mizui)
Think about a space in an urban setting – Daikanyama in Tokyo – that allows furniture to be approached as the object of three different activities: Use, View, and Buy.
2) Pavilion in the Old Capital (Assigned by: Ken Takahashi)
The old capital of Kamakura was chosen for its environment, rich in greenery, and its ability as a tourist destination to attract customers. The site is opposite the Museum of Modern Art, Kamakura (designed by Junzo Sakakura), near the Tsurugaoka Hachiman-gu shrine. The assignment poses the question of how to open and close the architecture in view of these two elements – environment and customers.

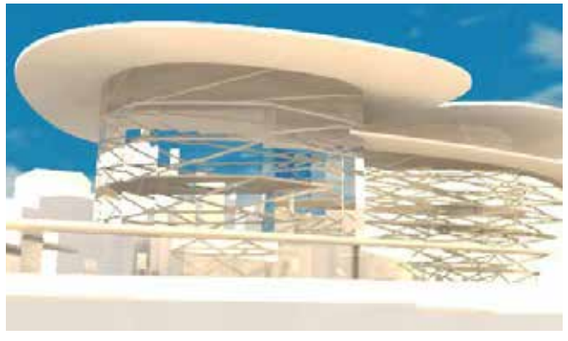
担当教員 Supervisors

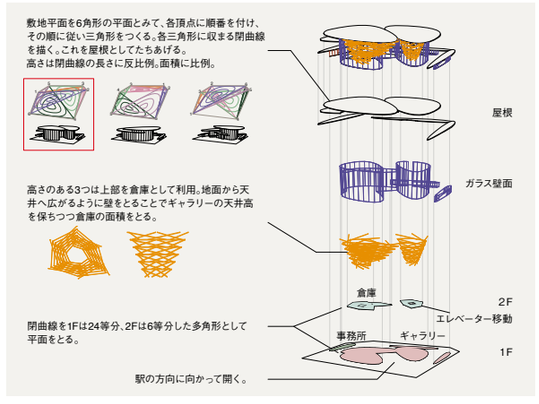
初見学 Manabu Hatsumi
桑原聡 Satoshi Kuwahara
高橋堅 Ken Takahashi
水井敬 Kei Mizui
森清敏 Kiyotoshi Mori
柄沢祐輔 Yuusuke Karasawa

総評① 人々が行き交う代官山駅近くの敷地と、もっとも身近なデザイン・オブジェのひとつである家具の展示空間という課題に対して、どのように説得力のあるテーマを設定し、建築的な提案として具体化するかが問われていた。また、出題は夏休み前だったものの、提出は休み明け1カ月後、という変則的なスケジュールの中での時間の使い方も問われていた。これらの諸条件を理解したうえで、自身も満足できる提案に至った諸君の健闘を称えたい。（水井）

総評② 鎌倉のこの場所を敷地に選ぶのは2度目だが、両義的に引き裂かれた敷地の意味を自分なりに整理することから始めるよう指導した。賑わいのある若宮大路と静謐な美術館からの相応しい距離を見極めること。そこから人やモノの動線を想定しながら、実際にプランを解いていくことを課した。うまくすれば「制限」は、「表現」に昇華できることを感じ取ってもらえたのではないだろうか。（高橋）

木村友美 ｜ 傘ノ下
Tomomi Kimura



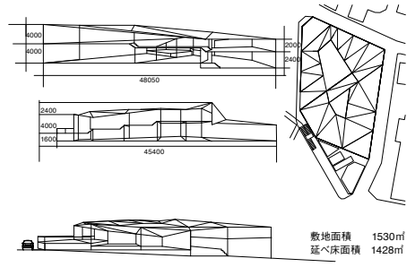


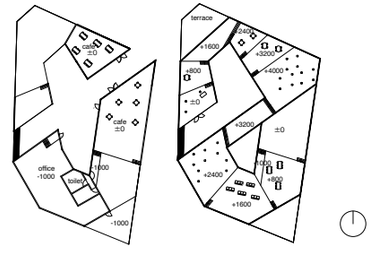
講評：デジタル・スタジオで習得したCADツールによる習作。大小の傘状構造を組み合わせて、家具展示のためのガラスパビリオン群と気紛れな歩行者の流れに応じ得る外部空間をつくり出している。一見フリーハンドの造形のようだが、傘の平面形は敷地形状の図形的な分割から、高さは傘の面積や周長から、ツールを用いて導かれているとのこと。周辺の街並みや人のスケール感、構造形式などの設定次第で、さらにさまざまな姿に展開し得る可能性を感じさせる。(水井)

原 彩乃 ｜ case pavilion
Hara Ayano

講評：リビングや個室大の部屋を上階に集積させることで、カフェや半外部的な空間を階下に自動的に生成させるパビリオンの提案。平家池や樹木に囲まれた大らかな空間と、リズミカルにつながる小さな空間の対比が小気味よい。柱とスラブの操作だけでつくられた空間は、「場所」への意識が非常に高い。構造計画に実際的なスケール感が出ると、いっそうのリアリティが生まれてくるだろう。（高橋）

向島 希 ｜ 広場×パビリオン
Nozomi Mukojima





講評：課題敷地のセミ・パブリックな場所としての可能性をよく引き出した提案。敷地対角の通り抜け空間と、それと立体的に絡みS字状に蛇行する展示空間の組み合わせが、開放的かつ緊密な場所づくりの骨格となっている。多角形と多面体の構成の中で、床段差と屋根断面に一定の規則性を持たせつつ、敷地形状や内外の視線、シークエンスなどに応答した柔軟な変形が施されている。その丹念さからは、都市空間の孕む複雑さを楽しむ姿が伝わってくる。（水井）

2
年生

設計製図 Ⅱ —— 課題4 Assignment 4

21世紀の都心居住･コミュニティの再生

Urban Residences for the 21st Century – Revitalizing Communities

単身者や高齢者世帯の増加など揺らぐ近代家族像、ライフスタイルや価値観の多様化、大量の住宅ストックの再生や活用、所有から使用への価値観の変換、環境との共生など、課題を抱えている現代都市社会における都市居住のあり方、都市に集まって住むかたちを問う。こうした時代状況を背景に、既成の集合住宅に囚われることなく、自分自身の生活実感や問題意識から発した若者らしい提案を期待する。（出題者：初見学）

This assignment poses questions about the urban residence in the context of the challenges facing contemporary urban society, such as the effect of increasing numbers of single and elderly people on the image of the family, the diversification of lifestyles and values, the utilization and revitalization of the enormous volume of existing residential stock, the transition in values from ownership to use, and coexistence with the environment. It looks forward to fresh proposals based on life experiences as a young person, unencumbered by preconceptions about collective housing. (Assigned by: Manabu Hatsumi)

担当教員 Supervisors

初見学 Manabu Hatsumi
桑原聡 Satoshi Kuwahara
高橋堅 Ken Takahashi
水井敬 Kei Mizui
森清敏 Kiyotoshi Mori
柄沢祐輔 Yuusuke Karasawa

所在地:東京都台東区東上野5-4
主要用途:集合住宅
敷地面積:1,148m²

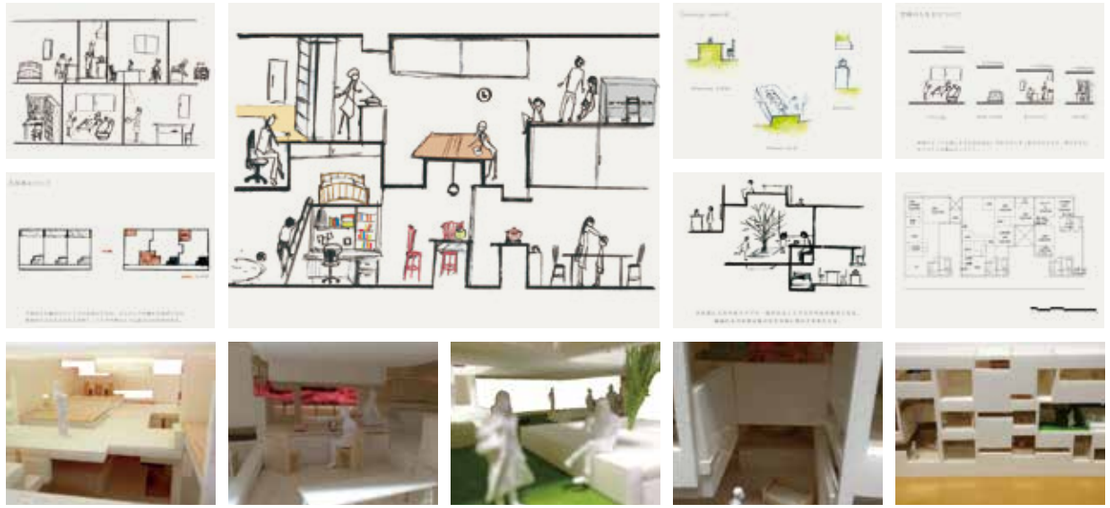
容積率:250%以上
（この内居住系 200%以上を確保）

駐車台数:総戸数×0.2台以上
＊グループ設計

総評 今回の課題は、昨年とほぼ同じだが、自由度を増すために広い敷地とした。しかし、南北に細長く、南北面で接道するが、東西面は隣地であるため、自然採光や通風を考慮すると、住棟配置が難しく、上手く解けたグループが優秀作品に選ばれている。コミュニティの再生という課題には、住戸近傍空間の共有領域化という手法で対応する案に可能性を感じたが、住戸内とのつながりにまで踏み込んだ案が少なかった点が惜しまれる。（初見）

山口薫平／向島 希／原 彩乃 ｜ 噛み合う住処

Kumpei Yamaguchi / Nozomi Mukojima / Ayano Hara



講評：集合住宅を設計する際、必然的に住戸を積層させることになるが、その単位を家具の小さいスケールまで落とし、専用部と共用部を平面および断面方向に絡み合わせることで複雑な地形のような多様な空間が生まれている。配置計画に関しては、敷地の真ん中を貫く既存通路上に建物を配置することで、東西の二方向からの採光と通風を確保し、南北に細長い敷地における明快な提案となっている。（森）

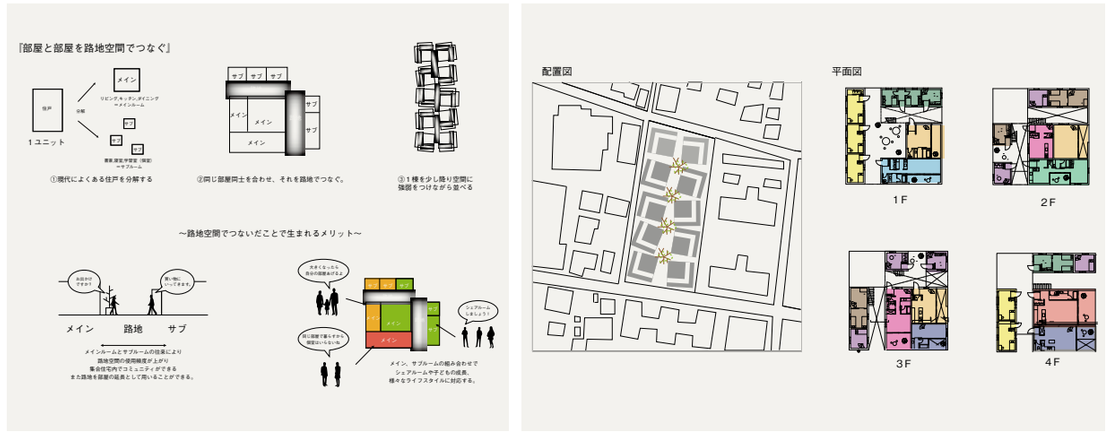
古宮はる奈／滝脇通／永井千代之介 ｜ C Houses

Haruna Komiya / Toru Takiwaki / Chiyonosuke Nagai

講評：大学生、社会人、留学生を含む、社会に積極的に関わろうとする外向的な人々を集め、地域に開けたものでありつつ、住民たちがお互いに時間を共有する場所をつくり出すことが目指されている。敷地周辺に大学や寮が散在するため、敷地内を単身生活者達のための立体的なハブ住区と見なして計画され、住居はシェアハウスと寮の中間形態を採る。道と連続する交流空間から上部の居住空間へと、生活環境上のグラデーションが形成されている。（水井）

丸山良太／内田悠介／清水大地 ｜ 路地がつなぐ家

Ryota Maruyama / Yusuke Uchida / Daichi Shimizu



講評：躯体を共有し高層化することで豊かな外部空間を約束してきた集合住宅が経済効率を追い求める結果、もはや外部空間すら満足に実現出来ない程の高容積を前提とせざるを得ないというのは憂うべき状況である。そこで、一歩踏み出して住宅の内部廊下を共用空間として捧げることにより、豊かな共用空間が創出出来るのではないかとする試みである。上海の旧式里弄を思わせる魅力的な路地型空間が中高層の立体モデルとして再構築された。（桑原）

3
年生

設計製図 Ⅲ —— 課題1 Assignment 1

一枚の紙から

From One Sheet of Paper

日本を代表するファッションデザイナー三宅一生は、日本の着物やインドのサリーなどから着想を得て、衣服を1枚の布から展開するというコンセプトを打ち立てた。1枚の布から発想し、従来の概念にとらわれない創造をした三宅のコンセプトを念頭に置き、まず1枚の紙を用意する。その紙に切断・折り曲げなどの加工を施し、建築的な造形を構想する。次いで、その造形をもとに設計条件に従った建築の提案を求める。（出題：ヨコミゾマコト＋川向正人）

Issey Miyake, one of Japan's leading fashion designers, was inspired by Japanese kimonos and Indian saris to develop the concept of clothes made from a single piece of fabric. With Issey Miyake's concept in mind, prepare a single sheet of paper and treat it as he did treated his single piece of fabric – creatively, without being bound by conventional ideas. Use operations such as cutting and folding to imagine an architectural form. Then, based on that form, design a work of architecture to satisfy a set of design conditions. (Assined by Makoto Yokomizo and Masato Kawamukai)

担当教員 Supervisors

川向正人 Masato Kawamukai
岩岡竜夫 Tatsuo Iwaoka
石橋利彦 Toshihiko Ishibashi
郡 裕美 Yumi Kori
齋藤精一 Seiichi Saito
提 祐輝 Yuki Sage
田口知子 Tomoko Taguchi
内藤将俊 Masatoshi Naito
宮下信頭 Nobuaki Miyashita
廣瀬大祐 Daisuke Hirose
ヨコミゾマコト Makoto Yokomizo
水野貴博 Takahiro Mizuno

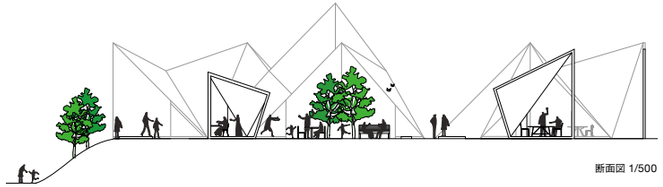
所在地：千葉県流山市東深井349付近

主要用途：複合施設「（仮称）利根運河ミュージアム」展示機能／研究機能／サービス機能／事務機能／その他

敷地面積：約1,000㎡

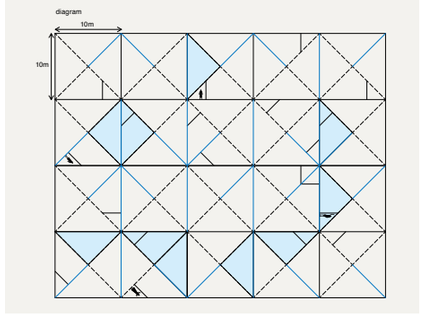
村松かなえ ｜ さんかくミュージアム

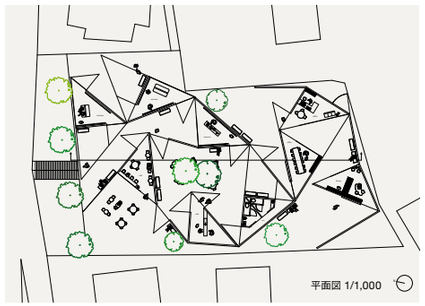
Kanae Muramatsu



断面図 1/500

立面図 1/500



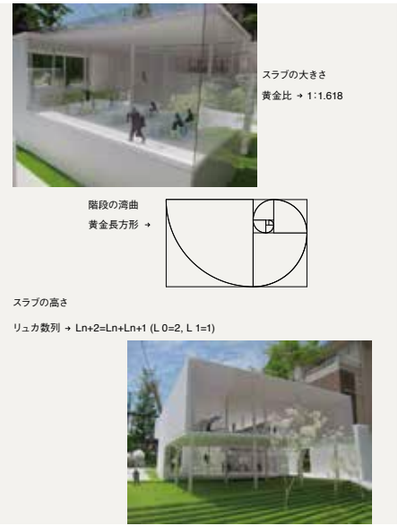


平面図 1/1,000

講評：規則的な三角形を用いて組み立てている。折り曲げ方にいろいろな角度があるのがよい。それを敷地に当てはめることによっていろいろな空間ができていて、また動線的にもおもしろい。階段や柱を紙に付け足すのではなく、全てを紙として捉えており、余計な物がない点で、「一枚の紙」という課題に対して最もよい回答を出せている作品だ。（岩岡、ヨコミゾ）

本田美保 ｜ オープン・ミュージアム

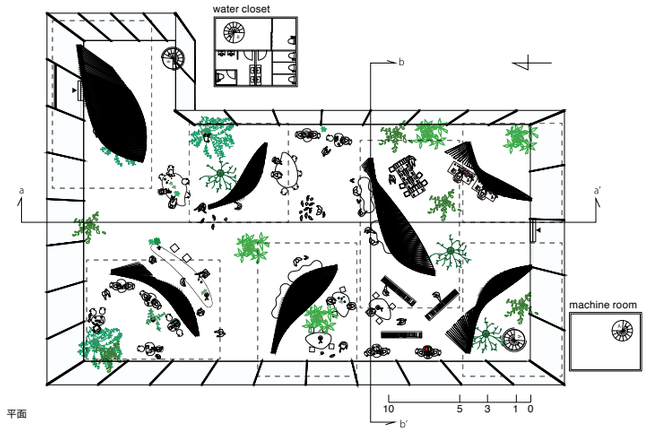
Miho Honda



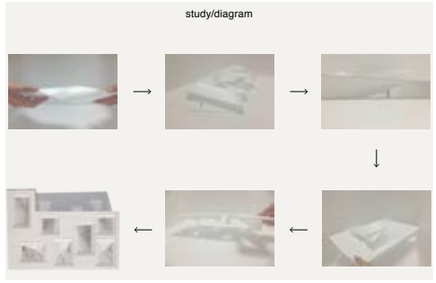
講評：スタディの過程で先に大きなところを決め、小さなところまで詰めていく設計だった。抜けていくような空間を表現している。柱の並びや高さなどを、比や数列によって決定するというアプローチを知っていることに感心した。複数の数列を用いたことで新たな見え方が生まれている。大人っぽく、完成度の高い作品である。（川向）

五条 萌 ｜ PLEATS

Hajime Gojo



平面



講評：切る、折る、ねじるなど様々な実験を重ね、そこに紙ならではの空間を発見するという地道なスタディの結果にできたラディカルな提案である。屋根がねじれて柱となり、間仕切りとなり、光の彫刻になる。建築、構造、インテリアがひとつながりになった、美しい建築空間が現れた。(郡)

3 年生

設計製図 Ⅲ —— 課題2 Assignment 2

都市のツボ —グローバルな観光拠点としての歌舞伎町再興計画—

A Vital Point in the City: Renewal Plan for Kabuki-cho as a Center of Urban Tourism

敷地を日本有数の歓楽街である歌舞伎町の中心部「新宿コマ劇場の跡地」に設定する。ここはまさしく「都市のツボ」と呼ぶにふさわしいポテンシャルの高い場所である。この街に新たな賑わいと活気を与え、グローバルな観光拠点としての吸引力を高めることを目的とする。各自が歌舞伎町固有の魅力を再発見・抽出し、建築のプログラムを構築するところから始めてもらいたい。設定したプログラムに応じた質の高い空間とデザインを求める。（出題：宮下信顕）

The site is the former location of the Shinjuku Koma Gekijo theater, at the center of the Kabuki-cho district in Tokyo – a high-potential location that fully deserves to be called a “vital point in the city”. The aim is to revitalize the neighborhood and heighten its attractiveness as a center of global tourism. Start by rediscovering and distilling the best features of the Kabuki-cho neighborhood and developing an architectural program. Then design a high-quality space to realize the program. (Assined by Nobuaki Miyashita)

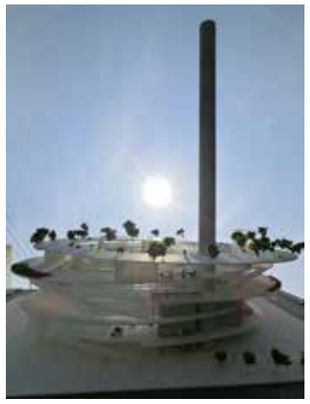
担当教員 Supervisors

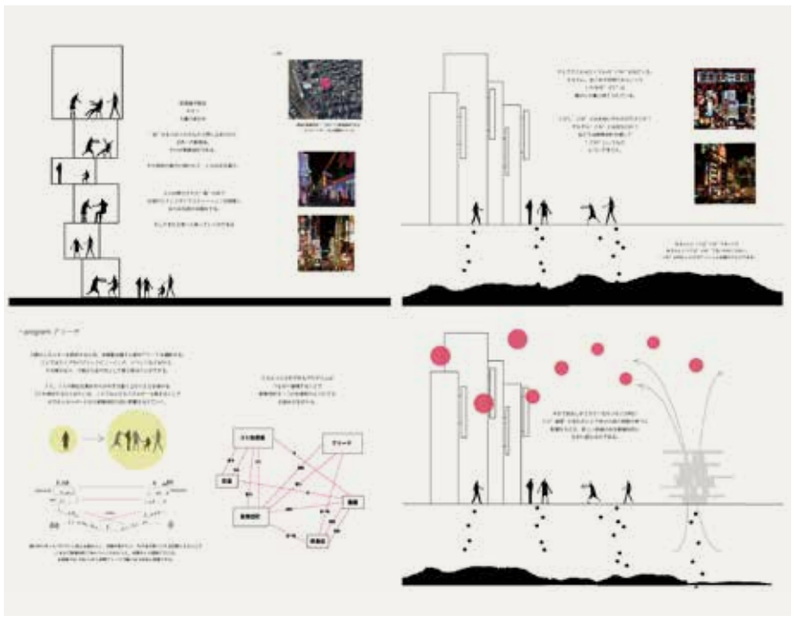
川向正人 Masato Kawamukai
岩岡竜夫 Tatsuo Iwaoka
石橋利彦 Toshihiko Ishibashi
郡 裕美 Yumi Kori
齋藤精一 Seiichi Saito
提 祐輝 Yuki Sage
田口知子 Tomoko Taguchi
内藤将俊 Masatoshi Naito
宮下信顕 Nobuaki Miyashita
廣瀬大祐 Daisuke Hirose
水野貴博 Takahiro Mizuno

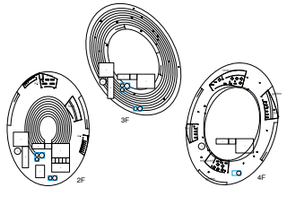
所在地：東京都新宿区歌舞伎町1丁目19−1,2,4
主要用途：各チーム毎に自由に設定。
敷地面積：5,590.65㎡
延床面積：上限20000㎡
高さ制限なし

影山真平／村松かなえ／森島英子 ｜ 循環する街　歌舞伎町を1つの生態系とする

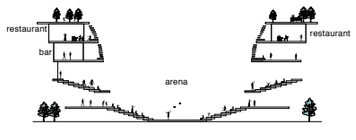
Shimpei Kageyama/ Kanae Muramatsu/ Hanako Morishima







平面図 1/3,000

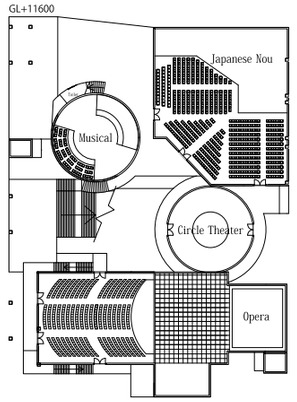


断面図 1/1,500

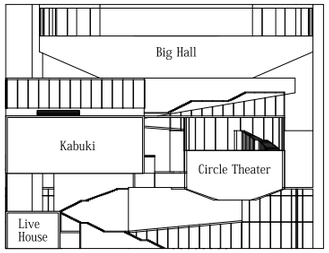
講評：現地を観察した学生達は、そのゴミが多いことに注目し、歌舞伎町を現代人の「欲」の処理場ととらえた。そこで、それら負のエネルギーをプラスに変換する場として、ゴミ処理場＋アリーナというユニークな提案が生まれた。リサイクルを主眼においたゴミ処理場は、ゴミを宝に変え、アリーナで起きる熱狂は、ストレスを正の力に変換する祭のような効果がある。価値の転換をはかることで歌舞伎町に活力を与える、創造的な提案である。（郡）

鈴木宗一郎／日野雄介／西尾 翼 ｜ Theater Complex

Soichiro Suzuki/ Yusuke Hino/ Tsubasa Nishio



平面図 1/1,200

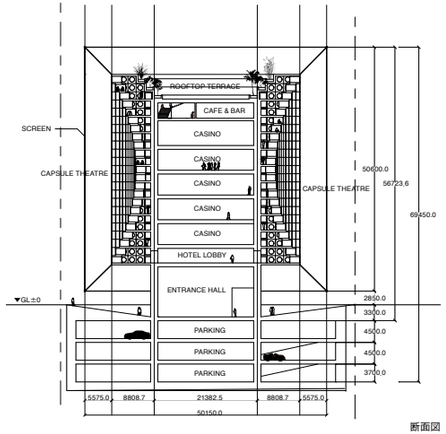


断面図 1/1,200

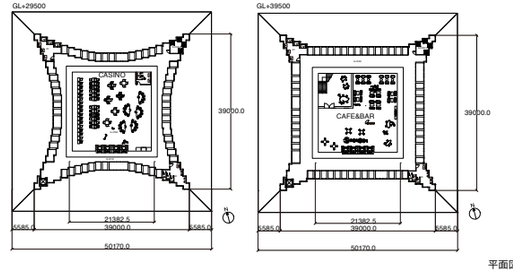
講評：彼らの考えたことは2つ。コマ劇場はなくなってしまったが、ああいうものがやはり必要であるということ、そしてコマ劇場でできなかったことも可能にしようにということだ。また、T字路や隙間のような、視線が通ったり通らなかったりする空間をつくることもコンセプトになっている。このようなコンセプトの施設では、パフォーマンスや音楽など、なんでも可能な大空間を提案しがちだが、ここにはさまざまな形態の劇場があり、フレキシブルな利用が提案されている。演者にも客にとっても、街の中心としてもよいものになるだろう。（廣瀬）

國分元太／五条 萌／杉浦菜花 ｜ asobi

Genta Kokubu/ Hajime Gojo/ Nana Sugiura



断面図



平面図

講評：カジノというプログラムは歌舞伎町と相性がよく、街の活性化に直結するのは明白である。カジノは時間を忘れさせるためにブラックボックス化が必須だが、ここではホールの周囲にカプセルホテルを張り付けるというアイデアが成功している。カプセルホテルは日本固有のもので外国人観光客への受けもよい。その壁面全体にプロジェクションされる映像がガラス越しに染み出していく光景は大変エキサイティングなものになるだろう。（宮下）

3
年生

設計製図 Ⅲ —— 課題3　Assignment 3

自分の通った小学校の現代化プロジェクト

Project to Modernize Your Own Grade School

誰でも通ったことのある慣れ親しんだ施設、小学校を題材として、公共施設のデザイン・計画を学ぶ課題。自身が通った小学校の改築を通じて、これからあるべき小学校を提案を求める。留意点として、下記が挙げられた。

1) 新しい教育に対応した学校施設
2) 生活の視点から見た学校施設
3) 地域社会と学校施設
4) エコロジーを配慮した学校施設

（出題：Cリーグ）

This assignment approached the design and planning of public facilities by choosing a subject that everyone is familiar with – the grade school that they attended themselves. Via a project to modernize the school that they attended, students were asked to propose a grade school as it should be in the future. Special attention was requested for the following points.
1) Support for new types of education
2) The school as seen from daily life
3) The school and the community
4) Consideration for ecology
(Assigned by C-League)

担当教員 Supervisors

川向正人 Masato Kawamukai
岩岡竜夫 Tatsuo Iwaoka
郡 裕美 Yumi Kori
内藤将俊 Masatoshi Naito
水野貴博 Takahiro Mizuno

所在地:各自選択
主要用途:小学校

＊千葉県にある5大学の建築系学科（C-リーグ）で共通の課題を出し、合同講評会などを行っている

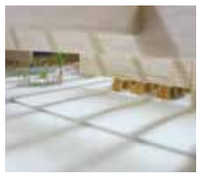
森島英子 ｜ 空気の輪郭

Hanako Morishima

■concept

小学校には子供たちの行動や人数、活動の種類など様々なスケールのものが存在している。

それに対し箱を与えるのではなく、拡張や変形を許容するきっかけをちりばめていく。
それによりその人や物そのものが空気を切り取り、「教室」作り出すような小学校を設計する。



講評：学校建築における教室のあり方を、垂れ壁によって再考した案である。子どもと大人の身長の違いを考慮し、4種類の垂れ壁を用いて、世代ごとに異なる空間のあり方を提案している。垂れ壁の高さによって教室が広くなったり、つながったり感じられることで、子どもたちの行動や賑わいが学校全体に広がっていく。（水野）

栗田 恵 ｜ 杜の学校

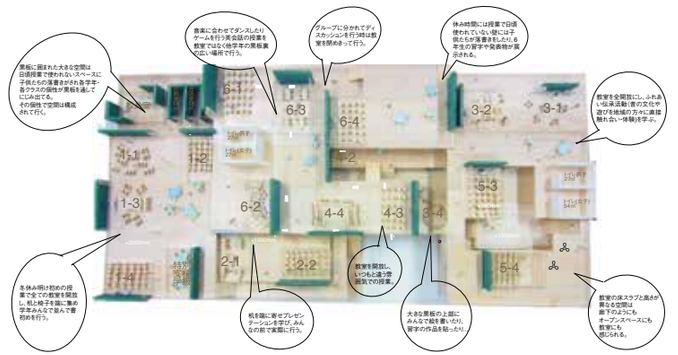
Kei Kurita

講評：公園と小学校のコンプレックスである。両者をうまく混ぜる事により、方向によって公園にも小学校にも見える。大通りからの見えや公園側からの見え、それらの周辺環境を考えて設計している。また、ただ混ぜるのではなく裏と表の関係を考えて、敷地に差をつける事によってそれらに明快に答えている案である。（岩岡）

高瀬結惟 ｜ 白の空間

Yui Takase

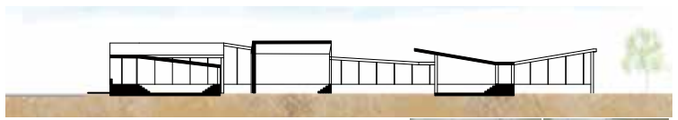
正門側　断面図　scale =1:300



講評：特別教室を1階に設け、学校を地域に開放することにより、学校と地域がより密接に結びついている。ただ、地域解放を前提としながらも、1階と2階との関係性や、子供たちの教室をより中心に据えることを考えても良かったのではないか。また、スキップフロアを利用した教室配置も良い。一枚の壁を利用して教室群を曖昧に分割する手法は非常にユニークである。（川向）

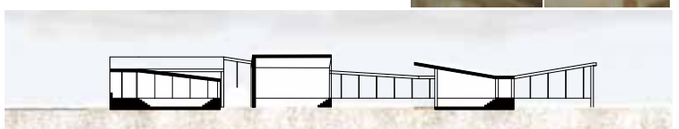
吉尾眞香 ｜ わや

Madoka Yoshio



SUMMER

1000㎜の腰壁によって教室と外部が仕切られる。教室と教室の間に中庭がある。



WINTER

1000㎜まで雪がつもる。教室と教室の間に雪山ができ、雪の壁によって教室が仕切られる。夏と外と中のレベル差が変化する。

講評：札幌の町の格子状街路に対するアンチテーゼとして、道と広場、内と外、図と地が混ざり合う有機的な空間を持つ小学校を提案。また、積雪によって空間が変わって感じられる仕組みを提案するなど、地域性を意識した意欲作。学校の敷地に入ったとたん、別世界に足を踏み入れたかのように感じることで、生徒にも地域の人にとっても学校が新鮮な場に感じられるだろう。（郡）

3
年生

設計製図 Ⅲ —— 課題4　Assignment 4

Multienzyme Architecture Complex@Shibamata

—柴又に魅力的な「流れ」をつくり出す、多機能な建築を提案する—

Multienzyme Architecture Complex Shibamata – Propose Multifunction Architecture to Create Attractive Flows in Shibamata

葛飾区柴又は、映画「男はつらいよ」の舞台である。その作品中には、人情味にあふれる近隣関係の舞台となる町の空間や、様々な流れを内包するフレキシブルな建築のかたちが見え隠れする。しかし、今日の帝釈天参道は、内と外が分離された閉塞的な空間の集合体に変わってしまっている。そこで、柴又の町空間に、新たな「流れ」を生む建築を提案して欲しい。参道および周辺地域を魅力的に再生していくための、触媒となりうる建築プログラムはなにかを各自が考え、地域密着型の多目的な建築を計画してもらいたい。(出題:郡裕美＋内藤将俊)

Shibamata, Katsushika, Tokyo is the scene of the film series Otoko wa Tsurai yo. The films depict buildings and gardens, homes full of warmth that encourage family interactions, and other spaces charged with “flows” of people, atmosphere, and information. But today the approach street leading up to the Taishakuten temple has changed, becoming a set of closed spaces divided into inner and outer. Thus, the assignment is to propose architecture that will produce various kinds of “flow” in Shibamata. Think about an architectural program that will revitalize the approach street and neighborhood in an attractive way, a multienzyme architecture complex that is closely tied to the local community. (Assigned by Yumi Kori and Masatoshi Naito)

担当教員 Supervisors

川向正人 Masato Kawamukai
岩岡竜夫 Tatsuo Iwaoka
郡 裕美 Yumi Kori
内藤将俊 Masatoshi Naito
水野貴博 Takahiro Mizuno

所在地:東京都葛飾区柴又7丁目7-9·10付近

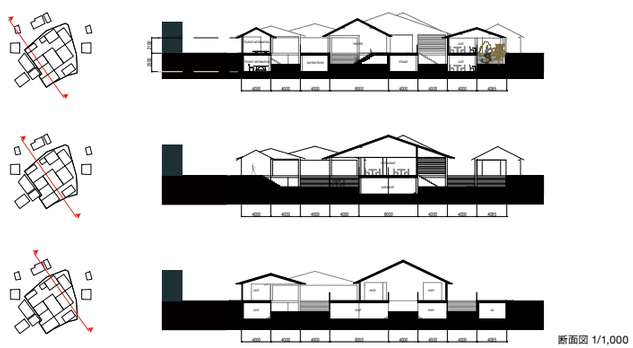
建物用途:多機能で、複合的な建築プログラムを、各自、自由に設定。

敷地面積:約1,500㎡
延床面積:2,500 ～ 5,000㎡程度

國分元太 ｜ Multi-layered depth

Genta Kokubu

平面図 1/1,000



断面図 1/1,000

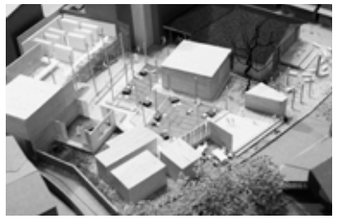
講評:寅さんの映画の世界にある「空間の奥行き」に着目した案。庇、床の段差、格子などの半透明フィルター、それら3つの建築要素によって柔らかい空間のしきりが形成され、領域が生まれ、それらが重なりあった結果、空間の奥行きが生まれていると分析。そのコンセプトを敷地にあてはめ建築化するという意欲的な提案。絡み合った「空間の奥行き」を表す模型もすばらしい。(郡)

堀越一希 ｜ かわらない情景　あたらしい風景

Kazuki Horikoshi

平面　1/400

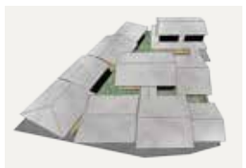
配置　1/10,000

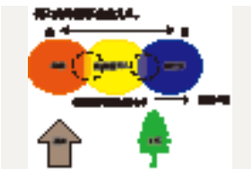


講評:模型が精緻で、敷地にかなり足を運んでいることが分かる。ここで起こっている出来事すべてへの対応を考えているところが非常に良い。既存の建物を一部残して増改築していることからも、この敷地に対する愛を感じる。屋根を合理的に、いろいろな方向に架けることに苦労しているが、足湯を上手く使ってストーリーをつくったり、光の入れ方を工夫したりと、細かいところもよくできている。(岩岡)

栗田 恵 ｜ 縁側商店街

Kei Kurita





平面図

講評:東南アジアの住居のように見えるほど開放的である。冬になったらどうなるのか、多少それが心配になるくらいに風通しがよい。屋根の下で、ステージが中を繋いでいく。今回のテーマは風通しと地域の活性化だったが、その2つを意識してストレートに挑戦しているところがよい。(川向)

設計演習

伊藤香織・中畑昌之
Kaori Ito & Masayuki Nakahata Unit

Hidden Landscape

日ごろ何気なく見ている風景は、時代の変遷とともにさまざまなレイヤーが折り重なって形成されてきたものである。この課題は、そうした都市の重層性を理解し、風景の背後に潜むさまざまな事象を読み解くためのリテラシーを養うことが目的である。複雑に絡み合った都市を読み解くのは、容易なことではないが、まずは手始めに、都市は表層／深層という2層構造をもっているという視点を獲得したい。そのために、都市の重層性が垣間見える“ほころび”のような風景を各自で発見し、それを成り立たせている要因を考察した。

鈴木 俊 ｜ 宮下町アパート
Shun Suzuki

講評:キャットストリート渋谷側入口の住商が混在したエリアに、老朽化し取り壊しが決定した宮下町アパートがある。通り沿いの小さな店舗群が入った賑やかな建物が、実は取り壊しの決まった廃墟のような宮下町アパートに貫入しているという興味深い事例を発見した。建物がその本来の役割を終えても、周囲のプログラムがそれを変容・延命させてしまうことの好例である。(伊藤・中畑)

鈴木翔之亮 ｜ 廃線跡ヲタドル
Shonosuke Suzuki

講評:かつて東京の地上を走っていた貨物線の廃線跡の調査である。線路というリニアな形の性質上、さまざまな場所を横断していくため、周辺環境の影響を受けて多様な使われ方をしていることが考察された。かつての線路上をひたすら歩き、江東区にある廃線跡が芝生に変わった場所など魅力的な風景を数多く収集した点を評価した。(伊藤・中畑)

日野雄介 ｜ 銀座稲荷神社
Yusuke Hino

講評:銀座にいくつかある稲荷神社(銀座八丁神社)の調査である。激変していく東京のなかにあっても、神社という聖域は侵し難いため、残り続ける。そうした場所を変化の中の定点として眺めるという方法が興味深い。建物の1Fと屋上に分散して残る神社や、神社の参道を兼ねた路地空間などユニークな例を比較考察した。(伊藤・中畑)

設計演習

井出 建
Takeshi Ide

都市という現場

「都市という現場」を見にいこう。3カ月間、週に1度顔を会わせる演習という機会を、みんなで集まり考え、話す場所にしよう。私たちが生活しているまちについて、気になることを主題にしてみよう。まちは身近かではあるがどのように扱えるだろうか。
1例として、ピーター・クックの飲食品屋台kioskの採集を紹介した。それをネタにロンドンのオックスフォードストリートの歩行者空間化のコンペ応募案を練る一連の活動である。もうひとつは、最近まちを歩きながら気になった情景である。都市に目立つようになってきた「空家」「廃屋」。三重の愛農学園の減築、京都の明倫小学校、新宿淀橋小学校のリノベーション。石巻市立大川小学校の津波被害と北上町白浜復興住宅、名取斎場の被災下での葬儀、そして新国立競技場コンペ案に対する槇文彦氏の意見など。参加6人により、ブックレットにまとめた。

青山宙和／江間匠太／夏 岑／曽我章悟／早川貴光／三笠陸実
Hirokazu Aoyama / Shota Ema / Shin Ka / Shogo Soga / Takamitsu Hayakawa / Mutsumi Mikasa

講評:4人の少年2人の少女が同じ舟に乗り合わせるように「都市という現場」という主題に乗船してくれました。それぞれが自分の釣り竿に自分が育ててきた餌をつけて大海に投げ入れたのです。海原は凪の太平楽とはいきませんでした。舟は波にもまれ、あちらにリクルート制服をまとい耐えた釣り人がいるかと思えば、こちらにはひとつひとつは小さな釣果でも汗をかいただけの成果に無言の微笑を浮かべた顔がみられました。餌をとられそうになりヒヤッとしたり大物の狙い過ぎと思えることもありましたが、それぞれにふさわしいアタリがあり、全員が大小、黒白、細太、長短、硬軟とりどりの獲物を釣上げて帰途につくことができそうです。(井出)

設計演習

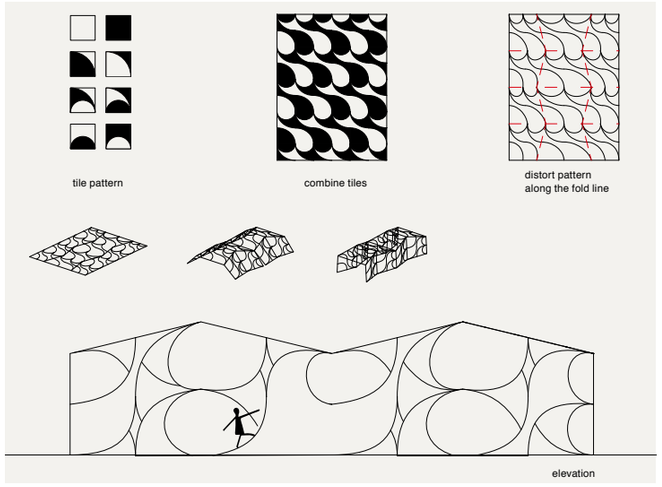
柄沢祐輔
Yuusuke Karasawa Unit

ダイアグラム生成

アルゴリズム的な方法論に基づくパターンの生成と立体化のプロセスによる設計演習である。このようなアプローチは、まだ建築の世界では馴染みが薄いものであるが、そのために却って新鮮な立体化や平面パターンのスタディを参加した学生たちが先例にとらわれることなく縦横に行っている姿が印象的だった。とくに演習の中で皆がすぐに方法論を体得し、アイデアを縦横に展開している姿にはこの分野と方法論の将来における展開の可能性が垣間見えた。

國分元太 ｜ Distorted Pattern Pavilion

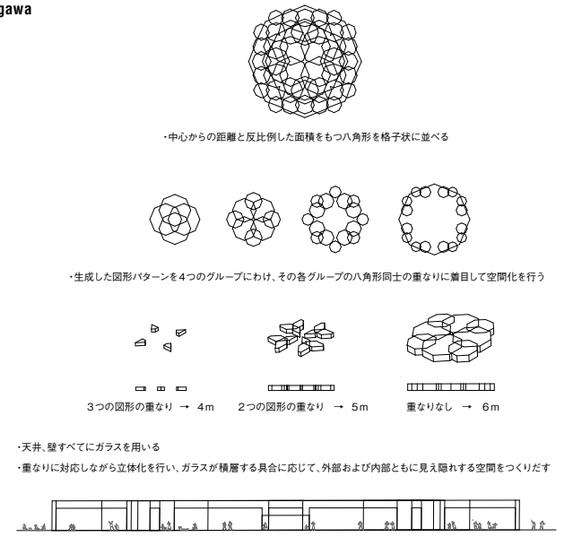
Genta Kokubu

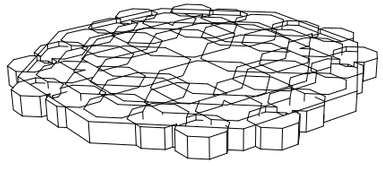


講評:白と黒の二分割された周期性を持つパターンを定義し、それを立体化する作業を通じて、構造と余白が不思議な形で入り乱れた空間を生み出している。平面のパターン自体もユニークであるが、そのパターンの立体化の過程で、彼は単純な箱ではなく、収縮しながら伸び縮みしつつ連続する立方体に、そのパターンを適用させた。結果として最初のパターンに不思議なリズムと抑揚が与えられ、完成した空間には独特な身体感覚が生み出された。(柄沢)

外川喜裕 ｜ Lesson of Multi Layered Geometry Space

Yoshihiro Togawa





講評:3種類の大きさの八角形を重ね合わせることによって、多様なスケールのパターンが重なりながら独自の空間が生み出されているが、その外皮として天井も壁もガラス壁として定義することより、複数のガラス面が多層状に重なりながら濃淡を変えていくユニークな空間が生み出されている。幾何学の重なり具合によって天井高の高さも変化をとげてゆき、きわめてシンプルなルールで多様な空間が生成されている点を評価した。(柄沢)

設計演習

川向正人
Masato Kawamukai Unit

流山市旧市街のまちづくり提案

基本となる考えは、旧流山街道を車優先から歩行者優先に変え、たくさんある路地を歩行者が回遊できる散策路に変えることと、散策路によって歴史的建物・庭園、老舗店舗、新しい食空間などの「拠点」をつなぐことだった。優秀2案はそこにさらに独自のアイデアを加えたもので、旧街道沿いの「江戸川の土手」を風景に取り込んだ武藤案と、日没と同時に寂しくなる地域に人々が集まり交流する「夕市」を提案した森島案だった。

武藤広夏 ｜江戸川沿いの土手街道化プロジェクト

Hiroka Muto

森島英子 ｜流山本町夕市プロジェクト

Hanako Morishima

設計演習

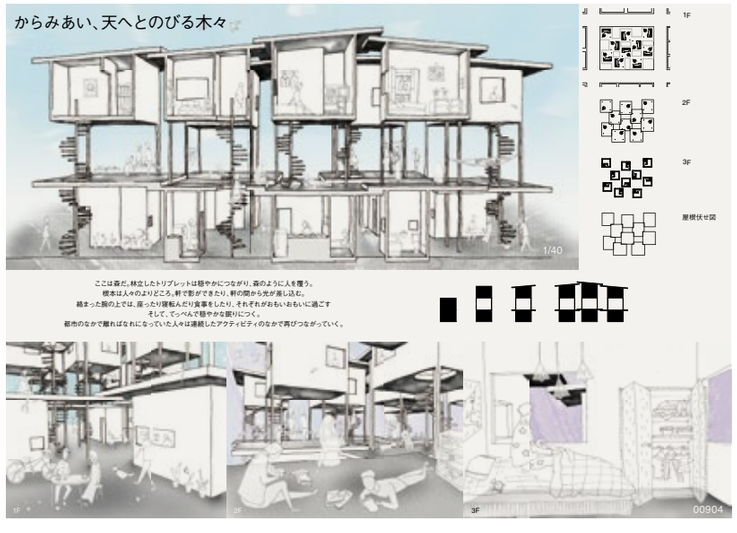
安原 幹
Motoki Yasuhara Unit

コンペティションに挑戦しよう

開催中のアイデアコンペをそのまま課題として出題した。通常の設計課題のまとめ方とは違って、1枚のパネルによるプレゼンテーションから逆算して短期間で建築のアイデアを研ぎ澄ます訓練である。対象としたコンペは以下。
前半:第7回長谷工 住まいのデザインコンペティション
「街っぽさのある集合住宅」（久野案）
後半:第2回大東建託賃貸住宅コンペ
「新たな『賃貸住宅』を考える」（日野案）

久野未理 ｜見えない街の可能性
Miri Kuno

日野雄介 ｜ からみあい、天へとのびる木々
Yusuke Hino



講評：久野案は、住戸群を宙づりにして生まれるスペースを、巨大な「ミセ」と読み替えた視点が楽しい。この空間のポテンシャルをそのまま提出するのではなく、具体的な使われ方を自分なりに示すことができればもっと魅力が増したはずだ。

日野案は、さまざまな案を試行錯誤したあげく極めてシンプルな形式を選び取り、層ごとに異なる3つの世界をイメージ豊かなドローイングで表現した。

2つの案を見て、集合住宅は現代都市において小さいながらも新たな風景をつくる強力なメディアであることを改めて実感する。ちなみに両案とも入選はならず、残念であった。(安原)

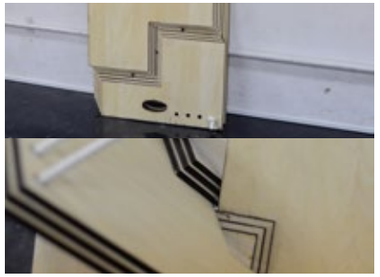
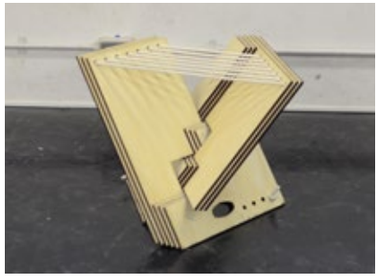
設計演習

横尾 真
Shin Yokoo Unit

Learn About the Structure Design

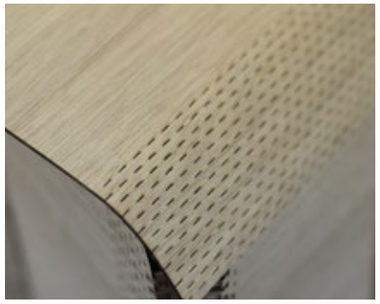
構造デザインについて学ぶ。電卓を使用して、たわみや座屈を計算(シミュレーション)する。そうした構造力学の原理を、デザインする椅子に統合する。つまり、この授業における構造デザインとは、テクトニックな視点をもって、椅子のデザインと機能性を考えることである。

笠原 峻 ｜
Ryo Kasahara

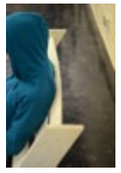
講評：数枚の合板を交互に張り合わせた開閉する椅子である。材料の歩留まりから決められた椅子の大きさに加え、床に接する部分とパネルの交点までの長さから求められる曲げモーメントを算出し、それに耐えられる断面二次モーメントから重ね合わせる板厚を計算している。(横尾)

齊藤誠司 ｜
Seiji Saito



講評：1枚の合板を折り曲げるだけで形作られる椅子である。レーザー加工機で一度に裁断できる最大サイズ（600×900mm）を拠りどころに、椅子の外形が決まり、折り曲げるというアイデアから様々な切込みをスタディしつつ、材の座屈を検討することで合板の最小厚2.5mmを導き出し製作された。(横尾)

松井征生 ｜
Masao Matsui



講評：座面、背もたれといった椅子の機能ごとに、適切な強度を持つように合板の厚みや幅を調節したラウンジチェアである。座面には厚くて幅広な合板、背もたれには薄くて幅狭な合板を選択し、断面二次モーメントの強度から材のたわみを算出することで、弾力をコントロールしている。(横尾)

4
年生

建築設計·都市設計 Ⅰ&Ⅱ

ユニットマスター
Unit Master

安原 幹 （32頁参照）
Motoki Yasuhara

垣内光司
Koji Kakiuchi
1976年京都府生まれ/1999年大阪芸術大学芸術学部建築学科卒業/1999～2001年阿久津友嗣事務所/2002年実家の青果店八百光に設計部設立、2008年一級建築士事務所八百光設計部に改称/2011年～東京理科大学理工学部建築学科非常勤講師/2013～京都造形芸術大学非常勤講師

佐藤光彦
Mitsuhiko Sato
1962年神奈川県生まれ/1986年 日本大学理工学部建築学科卒業/1986年～92年/伊東豊雄建築設計事務所/1993年 佐藤光彦建築設計事務所設立/2004年～2006年 名古屋市立大学大学院芸術工学研究科助教授/現在、日本大学理工学部建築学科教授/2013年から東京理科大学理工学部建築学科非常勤講師

長田直之
Naoyuki Nagata
1968年愛知県生まれ/1990年福井大学工学部建築学科卒業/1990～94年安藤忠雄建築研究所/1994年ICU一級建築士事務所共同設立/2002～03年フィレンツェ大学留学（文化庁新進芸術家海外留学制度研修）/2008年～奈良女子大学住環境学科准教授/現在、東京理科大学理工学部建築学科非常勤講師

伊藤香織 （32頁参照）
Kaori Ito

今村創平
Sohei Imamura
1966年東京生まれ/1989年早稲田大学理工学部建築学科 卒業/1990～92年AAスクール（英国建築家協会建築学校）/長谷川逸子・建築計画工房を経て2002年アトリエ·イマム設立/2013年より千葉工業大学建築都市環境学科准教授/2010年～東京理科大学理工学部建築学科非常勤講師

西田 司／オンデザイン
Osamu Nishida
1976年神奈川県生まれ/1999年横浜国立大学卒業後、スピードスタジオ設立/2004年オンデザインパートナーズ設立/2002以降、年東京都立大大学院助手、首都大学東京研究員、横浜国立大学大学院（Y-GSA）助手、神奈川大学、東京理科大学工学部、東北大学、東京大学非常勤講師など/2013年～東京理科大学理工学部非常勤講師

安原幹ユニット　Motoki Yasuhara Unit

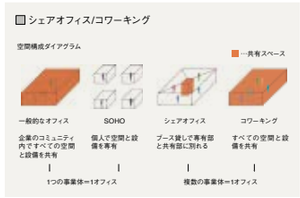
オフィスビル
Office Building

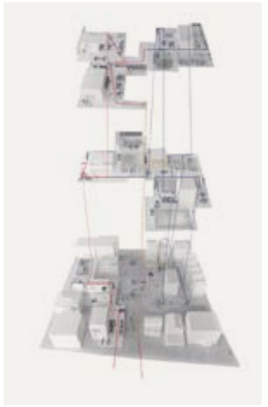
所在地:具体的な敷地を各自設定(原則として既存のオフィスビルの建て替えとする)
主要用途:事務所(事務所以外の用途との複合建築も可)
規模:4,000㎡以上

働く場所、について考えて欲しい。どのような仕事場で働くかは千差万別だが、共通して言えるのは、仕事場で過ごす時間は人生で最も大きい比率を占めるということだ。新しい働き方と、そのための空間をセットで提案して欲しい。 企業の本社ビルでも賃貸オフィスビルでも良いが、どのような人や組織をターゲットにするのかを明らかにして設計すること。

Think about a place to work. There are innumerable workplaces of all different kinds, but what they have in common is that office workers will spend more of their lives at the office than anywhere else. Think not only about the space but about new ways of working, and propose them as a set. The proposal can be for a company headquarters or a tenant office building, but be clear about the type of people and organizations that you are targeting.

大村高広 ｜ 糀谷のシェアオフィス
Takahiro Omura





講評：大村案は、大田区糀谷が敷地。3Dプリンタ等の普及により個人でも商品開発が可能となった状況を背景に、ものづくりの現場と連携可能なシェアオフィスを計画した。周辺街区と混ざり合うように積極的に「ムラ」をもたせたワークスペースは大変魅力があるが、空間モデルの提示に終わっている点が惜しい。今一歩スケールを上げて具体的な働き方のシーンに想像を巡らせていれば、ここにしかない建築に辿り着く可能性があった。

宮本沙生 ｜ 会所のある協働場
Saki Miyamoto

講評：他のユニットメンバーの提案もいずれかに偏っていたように思う。新しいアクティビティの構想と、空間のスタディとを行きつ戻りつしながら建築を鍛え上げる、そういうプロセスを求めたい。（安原）

垣内光司ユニット　Koji Kakiuchi Unit

東京案内
Guide to Tokyo

京都出身・在住の講師からの「私に『東京』を案内してください」という課題。各自が選定した場所の履歴・地勢・交通などを事前に調査し、案内人として、選定場所の魅力や見方をプレゼン。エスキスは、ユニット全員のディスカッション形式で行う。他者との情報共有やコミュニケーションを通じ、そのリアクションを案に反映することで、思いがけない状況やデザインに到達することをねらいとする。

所在地:自由
主要用途・構造・規模:各自の選定場所にて最も有効なもの

The assignment from the instructor, who is from Kyoto, was “Guide me through ‘Tokyo’.” Each students selects a place and researches its history, topography, transportation access and other features, and gives a presentation on the best features of the place and how to approach it. The esquisse is carried out as a discussion between all unit participants. The aim is, via communication and sharing information with others, to incorporate their reactions and arrive at unexpected situations and designs.

長田直之ユニット　Naoyuki Nagata Unit

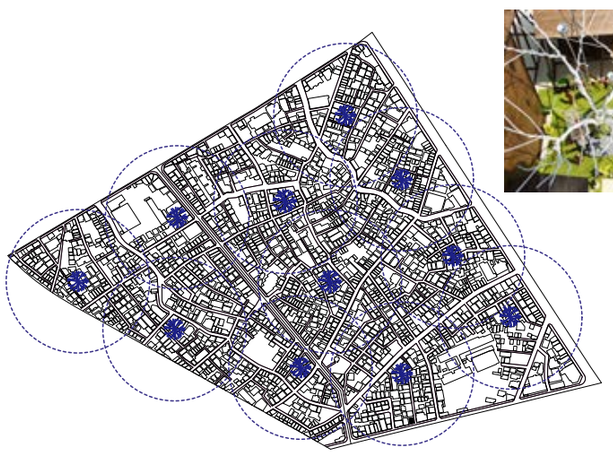
A House is Not a Home
A House is Not a Home

「東日本大震災」から2年、「阪神淡路大震災」から18年が経った。被災地では「復興」が進んで行くのかも知れない。そして「復興」の先には孤独死、地域コミュニティ、エコノミーの崩壊といった新たな問題が生じるかも知れない。しかし、これらの問題は「被災地」という特別な場所だけの問題だろうか。今年の課題は、300人が住むことのできる建築の設計である。既存の「house」の集合ではなく、集まって住むことのできる、新しい「home」の設計である。

所在地:東京都中央区
規模:300人が居住する規模
機能:複合する用途が望ましい
条件:任意

Since the Great East Japan and Great Hanshin earthquakes, the disaster areas have been struggling with new problems that arose before the recovery could take hold, from the solitary deaths of elderly residents to the collapse of regional communities and economies. But these problems are not limited to disaster areas. In this context, the assignment is to design residential architecture for 300 residents. Instead of merely a collection of “houses”, what is wanted is a new “home” where people can come to live together.

上棚敬祐 ｜ 路地尊 STRUCTURE ～手作りのポケットパーク～
Keisuke Uedana



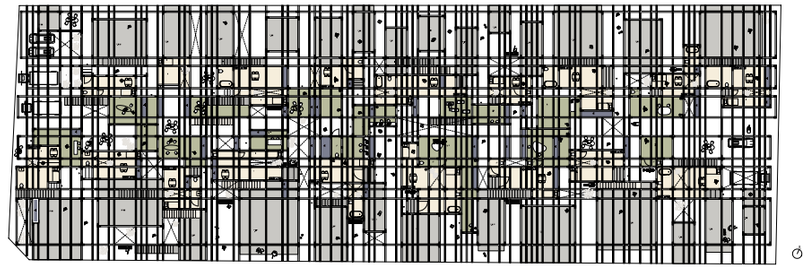
講評：京島の木密地帯に対する防災ポケットパークのデザインである。近隣の軒樋が空中を越境しながら、雨水を収集貯水する既存のポケットパーク「路地尊」に着目し、そこに木密の延焼を防ぐドレンチャーを備えた。多方から伸びる樋を枝に見立て、幹にはドレンチャーをしのばせる。

公園・防災・コミュニティ、そのアイコンとして「白い大樹」がポケットパークに植樹される。既存の風景やシステムを読替え、路地尊のアップデートを図ったリアルな視点に共感する。木密の地図に防災公園が大樹で示されるのも美しい。（垣内）

清宮あやの ｜ 住み、重なる風景
Ayano Seimiya

講評:衣料繊維屋が並ぶ馬喰横山町。この街の成り立ちや現状を的確に捉え、新しい街（あるいは街路）のあり方を提案した計画である。店先に並ぶ衣料品をかけるハンガーをヒントに、小さなスケールからそれぞれの建物、街のインフラへとプロジェクトを広げていったプロセスは共感できるものである。一方で、その魅力的なドローイング以上に空間のスタディが追いついていなかった点が課題である。(長田)

1F

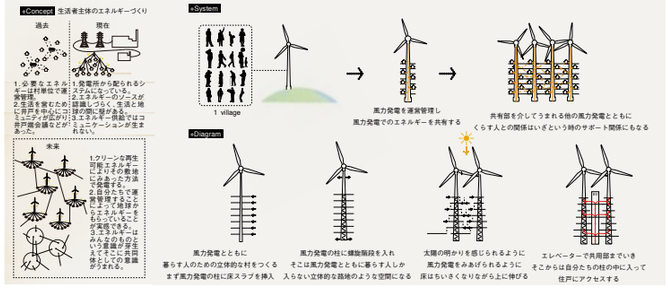


1階平面 1/1,000

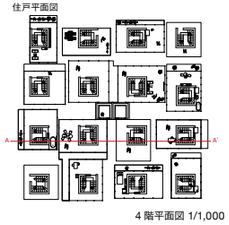
蔡華溢 ｜ 森の中の公衆浴場き —山谷の楽園—
Cai Huayi

講評：場所はドヤ街・山谷。矢吹丈が、のりちゃんをはじめてデートに誘った玉姫公園が舞台である。現在、公園の地面はコンクリートで固められ、ネットフェンスで封鎖し、隣接する神社もブロック塀で覆われている。おまけに以前あった学校のプールは何故かそのまま残っている。この案では、公園を森にすることで荘厳さを取り戻しつつ、街に開らかれた神社、既存のプールが公衆浴場になる。塀で覆い囲うのではなく、森・神社・浴場が、山谷らしい「寄せ集めた」屋根によってヒラヒラと緩やかに繋ぎ開かれていく。分断するものを壁、繋ぎ開くものを屋根と表現しているところも面白い。（垣内)

田野口紘大 ｜ 屋根に住む
Kodai Tanokuchi



住戸平面図



4 階平面図 1/1,000

講評:今回のユニット課題では、初期段階で客観的なデータを収集・分析することを強いた。この計画は、現状のエネルギーの問題を風力発電（風車）を入り口にして、敷地の選定、適切な集団の規模を導き出した点は力強いプロセスであった。井戸を共有しつつ形成された集落と、この立体的な集合住宅が重なるとき新しい集住のイメージが現れる。願わくば、エネルギーの問題の先にある生活を描いて欲しかった。(長田)

佐藤光彦ユニット　Mitsuhiko Sato Unit

駅と建築

Rail Stations and Architecture

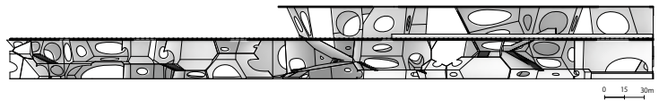
所在地:東武野田線　柏〜春日部間の駅をひとつ選ぶ
計画対象:道路、建物
用途・規模・構造:各自設定

近代以降の日本の市街地の多くは、鉄道の整備とともに開発され発展してきた。駅が出来る場所は、それまでのまちの中心と離れていることも多く、線路によって分断されることもあり、周辺地域の構造に大きな変化がおきた。本課題では、巨大ターミナル駅ではなく、各駅停車の停まるような駅に注目し、縮退していく日本の市街地において、駅や駅前広場を含むエリアが今後どのような役割を担ってゆくべきかを考え、未来の駅とまちをデザインしてほしい。

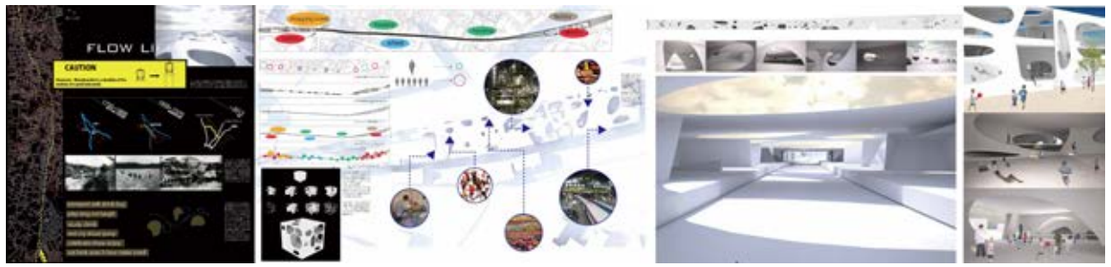
In the modern era, many of Japan's towns and urban districts have grown and developed together with regional rail networks.
New stations are often built at locations far removed from existing town centers. Towns are divided by rail lines, and surrounding regions undergo major structural changes. This assignment is not about gigantic terminal stations but about the small stations where local trains stop. In the context of Japan's shrinking townscapes, think about the role to be played by stations and the surrounding areas, including the plaza in front of the station, and design a station for the future.

伊藤真彬 ｜ フローライフ／ Flow Life

Masaaki Ito

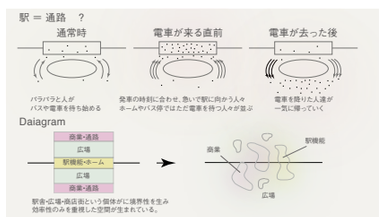


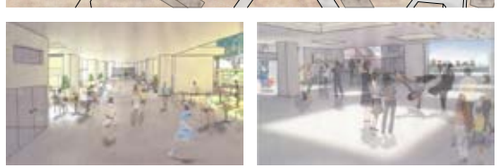
講評:かつて輸送や移動の中心的役割を担っていた河川や運河のように、鉄道の高架を人々の集う場として再構築する意欲的な作品。3Dボロノイを用いたアルゴリズムによってデザインされ、まさに川の流れのように連続する高架と駅は、これまでにない風景を出現させるであろう。まちを分断する高架や駅などの土木構築物を、デザインによって全く異なる存在へと変化させる優れた提案である。(佐藤)



土屋祐貴 ｜ Continuance of the Mall

Yuki Tsuchiya





講評:商業と駅舎が一体となった「駅ビル」は、周囲のスケールに比べて大きな駅舎がさらに巨大なボリュームとなり、まちと断絶した存在となっている場合が多いが、この作品は、店舗と駅舎を一体化させながらも、駅をまちの中に融解させ連続させるような提案である。衰退した商業地域であった愛宕地区において、駅から周辺に向かって新たなまちが生み出されていくようにも見える。(佐藤)

伊藤香織ユニット　Kaori Ito Unit

創造的に生きること

Living Creatively

所在地:自由
主要用途:各自自由に設定

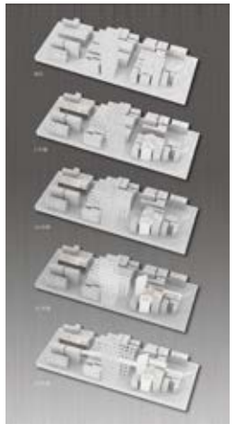
チャールズ・ランドリーやリチャード・フロリダといった論者の提唱で、創造都市論が新しい都市概念として1990年代後半から台頭し、国内外で多くの都市が創造都市を標榜するようになってきている。文化政策や産業政策として論じられることの多い創造都市は、どのような空間として立ち現れるのだろうか。創造都市の概念を学んだ上で、自分なりの解釈で「人々が創造的に生きられる現代の都市・地域」を構想し、それを実現するための空間的な提案を求める。

Influenced by scholars like Charles Landry and Richard Florida, the creative cities movement arose in the late 1990s as a new concept in urbanism, leading many cities in Japan and elsewhere to style themselves "creative cities". The creative city is often approached in terms of cultural and industrial policies, but what are its spatial characteristics? After mastering the basic concept of the creative city, give it your own interpretation and imagine "cities and regions where people can live creatively". Then develop a spatial proposal to realize it.

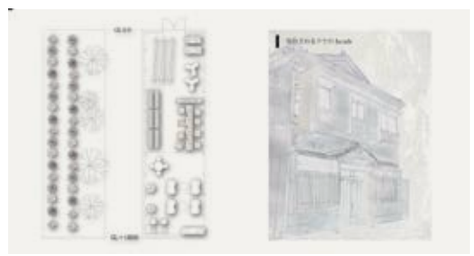
草谷悠介 ｜ 更新する岩礁

Yusuke Kusatani

ゾーニング



コンテクストを読みながら段階的にドヤを解体



既存のドヤのコンバージョンから生まれるクリエイティブコア

講評:東京の"ドヤ街"山谷に流れ着く人々を巡る創造性の課題に取り組んだ。一方で、ありもので環境を作り上げる人々のたくましさを生かすための工房と半セルフビルドのドヤを、もう一方で、このまちで孤独に生涯を終えるであろう個を照らし出すためのギャラリーと礼拝堂を設計した。街区を跨ぐ敷地で、設計全体が統合されていない違和感はあるが、山谷に流れ着く人々の生の動と静の両面を空間に落とし込もうとした姿勢を評価する。(伊藤)

星野善晴 ｜ 工藝品による 3 つの空間的試作

Yoshiharu Hoshino

村山大島紬

江戸からかみ

東京銀器

講評:日常の中に文化を融合させる工芸こそが、創造的な生活を導くものであると考え、東京の伝統工芸を普及させるための空間を課題に据えた。ユニークなのは、オブジェクトとしての伝統工芸品をよく観察し、その構成の特徴を抽出し、空間としてモデル化するアプローチである。各モデルから建築への展開が成功しているとは言えないが、まちなかに突如現れる異質な表情を通して、伝統工芸品の存在感が顕在化している。(伊藤)

今村創平ユニット　Sohei Imamura Unit

New Pavilion／
Café in the Royal Botanic Gardens, Kew

New Pavilion / Café in the Royal Botanical Garden, Kew

所在地:英国王立植物園
主要用途:展示・鑑賞部門(温室など)と休憩施設(カフェ)などを基本として、
ほか各自自由に設定
規模:500㎡程度

ロンドンの南西にある英国王立植物園、通称キュー・ガーデン。この園の広大な敷地には、19世紀ごろに作られたパーム・ハウスをはじめ、いくつもの温室、パヴィリオンが点在しているが。そこに新しいパヴィリオン/カフェを提案する。

The site is Royal Botanic Gardens, Kew, usually referred to as Kew Gardens, in southwest London. Scattered throughout the extensive grounds are greenhouses, including the 19th-century Palm House, and various pavilions. The assignment is to propose a new pavilion / café.

西田司／オンデザインユニット　Osamu Nishida/ Ondesign Unit

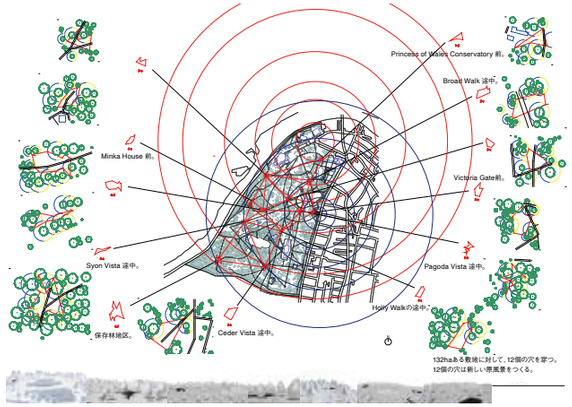
人の集まる環境を考える
Thinking About Environments for People to Gather

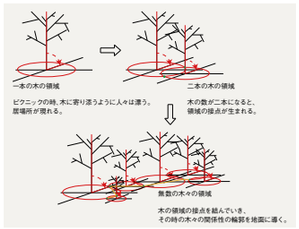
所在地:自由
主要用途:各自自由に設定
構造・規模:自由
＊指導協力:萬玉直子(オンデザイン)

都市という集合形式は、日々の生活では実感を伴いにくい。でも、ただ漫然と大きいというだけで、僕らの身体から乖離したものではないはずだ。ちょっとそのスケールをおとしただけで、丁度いい実感を獲得できる場合がある。都市を観察してみると、社会的な状況に応じて人の集まる環境が生まれている。今回の課題では、都市を社会的課題や共有価値から分析し、人の集まる環境を考え、そこから生まれるビルディングタイプを建築提案する。

Large-scale narratives such as falling populations and shrinking cities are difficult to grasp concretely. But observation shows that new environments are emerging where people gather according to their specific conditions, such as universities opening their doors to the public and shared houses as a response to changes in family structures. This assignment asks you to think about the environments where people gather, starting from an analysis of cities from the viewpoint of social challenges and shared values. Propose a building type that emerges as architecture from that analysis.

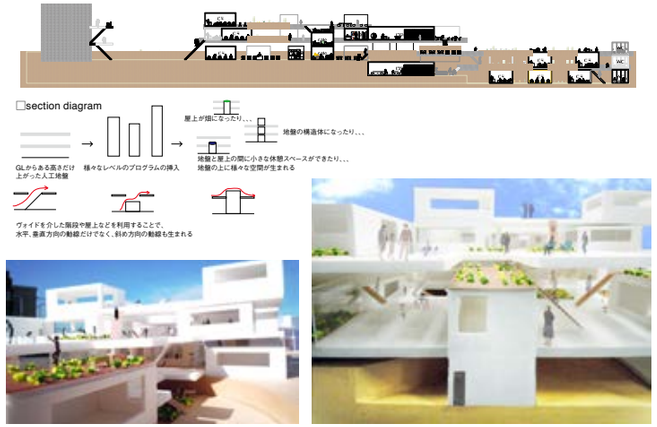
井上遼 ｜ Primitive Landscape ～器としての建築～
Ryo Inoue





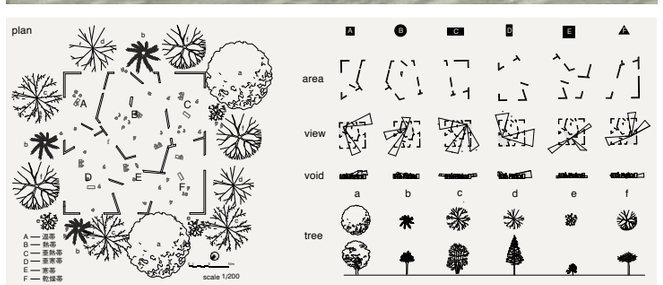
講評:キューガーデンにおいて、風景はきわめて重要なものである。そもそも、英国式庭園は、風景という概念とともに展開した。今ある風景に対して、乱暴に介入することなく、その固有の価値を浮き上がらせるには如何にすればよいのか。そのために、浅い窪みをいくつか適切に配し、そこに降り立つことで、風景の見え方を微妙に操作する。とてもさりげない仕掛けによって、空間や時間の変化を意識化させようという野心。(今村)

大嶋慎也 ｜ 食のマナビ場
Shinya Oshima



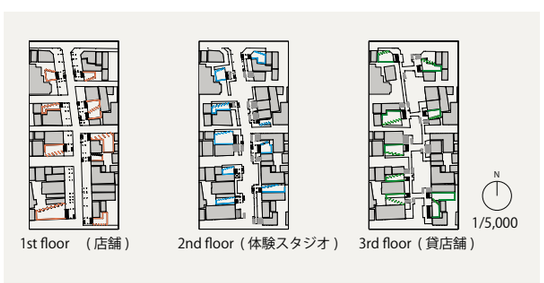
講評:自分の中で順序立てて課題を設定し、最後までぶれずに進めていた。提案は、既存の学校と、食に対して問題を抱える地域住民の食に出会える環境とをうまく統合させていくのが面白さでもあり、難しさだった。街の中での建物のあり方は、どこまでがランドスケープでどこまでを建築とするのかが興味深いポイントだが、ランドスケープとしての畑との建物を融合のさせた点がテーマとして面白かった。(西田)

西村直気 ｜ kew pavilion
Naomki Nishimura



講評:この博物学的な植物園に付随する、分類、視線、回遊、パヴィリオンといった、さまざまな制度を、抽象化した上で、再編集する。そのことによって、21世紀における植物との距離を規定する意欲的な試み。提案されたソリッドなオブジェの群は、あたかも時間失った廃墟のようだが、それぞれ壁の持つ形状がユニークなジェスチュアを見せ、それは植物のもつ生命感や植生の持つ多様性と、不思議とシンクロしている。(今村)

西田幸平 ｜ 溢れ出す価値
Kohei Nishida



講評:専門商店街という同じ業種の人たちが集まる環境をテーマにしたのは、東京の中の新しいエリアの見方だと感じた。アーケードという建築未満・環境以上というものに注目し、アーケードを更新したとも道を更新したともいえるビルディングタイプの読み解きで、既存の街が立体的に付加価値を高めていく提案に昇華していることがよかった。既存の環境を少し読み替えるだけで、公共のあり方や人の集まり方などが変わっていくのが面白い。(西田)

建築設計実習 A&B
Master's 1st year

ユニットマスター
（非常勤講師）

近藤哲雄
Tetsuo Kondo
1975年愛媛県生まれ／1999年名古屋工業大学卒業／1999〜2006／妹島和世建築設計事務所、SANAA／2006年近藤哲雄建築設計事務所設立／現在、東京理科大学、日本女子大学、法政大学非常勤講師

末光弘和
Hirokazu Suemitsu
1976年愛媛県生まれ／1999年東京大学建築学科卒業／2001年同大学院修士課程修了／2001〜06年伊東豊雄建築設計事務所／2007年〜SUEP./2009〜12年横浜国立大学大学院Y-GSA設計助手／2011年〜東京理科大学理工学部建築学科非常勤講師／現在、東京大学、横浜国立大学、日本大学非常勤講師

安原 幹 〈32頁参照〉
Motoki Yasuhara

山代悟
Satoru Yamashiro
1969年島根県生まれ／1993年東京大学工学部建築学科卒業、Responsive Environment共同主宰／1995年同大学院修士課程修了／1995〜2002年槇総合計画事務所／2002年〜ビルディングランドスケープ設立共同主宰／2002〜09年東京大学大学院建築学専攻助手・助教／2005年urban dynamics laboratory共同主宰／2012年〜東京理科大学理工学部建築学科非常勤講師／現在、大連理工大学建築与芸術学院客員教授、東京理科大学、東京電機大学、日本女子大学非常勤講師

近藤哲雄ユニット　Tetsuo Kondo Unit

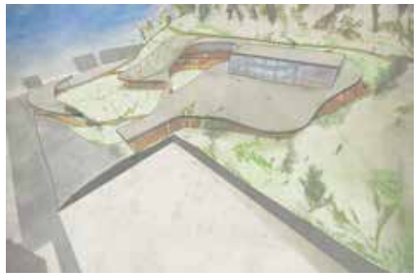
所在地：地方都市中心部

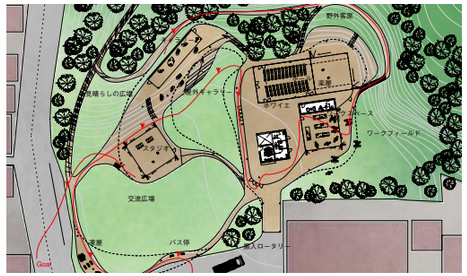
市民ホール
Civic Hall

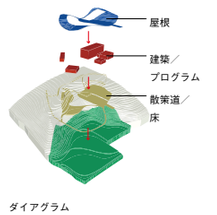
敷地は、かつて温泉地として栄えた地方都市の中心部。さまざまな伝統芸能が生まれ独自の文化が培ってきたが、近年は衰退しつつある。地域の伝統文化を守り次世代に継承するため、市民や観光客の交流を促し、祝宴的な雰囲気を町全体に発信するような市民ホールを計画する。プログラムは、ホールや練習スタジオの他にホワイエやギャラリースペースなど交流を促すものを含む。魅力的な空間や各プログラムの関係、町並みや敷地周辺とのつながりを考えた提案を求める。

The site is in the core of a provincial city that flourished as a hot-springs resort. A number of traditional arts were born there and became part of the distinctive regional culture. But in recent years they are declining and in danger of being lost. The assignment is to plan a civic hall that will preserve the regional culture and pass it down to the next generation, encourage interactions between residents and tourists, and create a festive atmosphere for the entire city. In addition to a hall and practice studios, the program should include foyers, galleries, and other spaces for people to interact. Propose a civic hall that offers an attractive hall space and takes the relation between all program elements into consideration, along with the connection to the streetscape and the area around the site.

近藤洋一 ｜ 地形に切り分ける道、流れ出す建築、山の色
Youichi Kondo



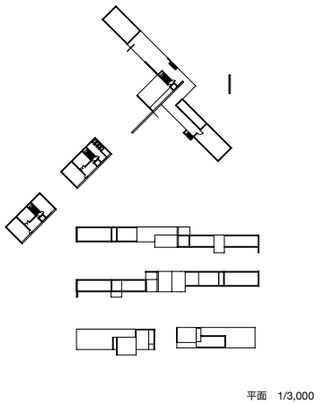




ダイアグラム

講評：敷地全体を大胆に使い、建築とランドスケープを一体に考えるということを疑いなく徹底してやっているところがよい。部分部分では稚拙なところもあるが、斜面、大屋根、植生、広場など様々なエレメントをダイナミックに扱い、地方都市の環境や伝統芸能の舞台といったプログラムにうまく連続していくようなおおらかな作品であるところを評価した。（近藤）

中山由稀 ｜ 舞台のあいだ
Yuki Nakayama



平面　1/3,000

講評：力強さを持ちつつ自然と馴染むような建築をつくりたいという考えに共感できる。敷地に対するボリューム感が繊細で、プロポーションや立ち姿が美しい。センスのある人だと思う。ただ、もう少し人間や生活を感じさせるような提案になっているとなおよかった。凛とした佇まいとともに、生きる喜びがあふれるような建築を目指して欲しい。（近藤）

末光弘和ユニット　Hirokazu Suemitsu Unit

BIOMIMETIC ARCHITECTURE　自然に学ぶ新しい環境建築のデザイン

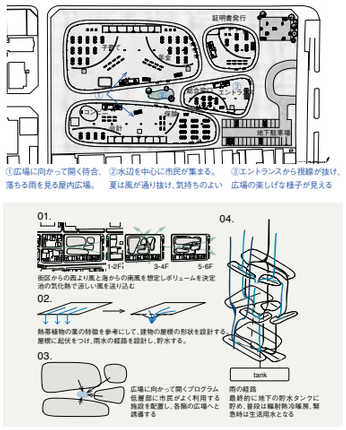
Biomimetic Architecture – Designing New Environmental Architecture by Learning from Nature

バイオミミクリーは、アメリカの西海岸から発祥した、生体工学の研究分野のひとつで、プロダクトデザインの分野を中心に注目されている研究である。このバイオミミクリーの考え方に基づく、新しい環境建築のデザインを考える。自然界の中にある有形のものは、全てに理由が存在する。それは逆を言うと、自然の力に従いそれを利用して生きていくために最も合理的な形ともいえる。自然界の形の原理から導かれる新しい環境建築の姿を考えて欲しい。

Biomimicry, which arose on the West Coast of the United States, is a research field in bionics that has attracted a good deal of attention in the field of product design. The assignment is to design new environmental architecture on the basis of biomimetic thinking. Every form in nature has a reason for existing. Conversely, forms that respect the power of nature and put it to use are the most reasonable ones to use in our lives. Think about a new kind of architecture derived from natural principles.

木島奈津美 ｜ よるところ

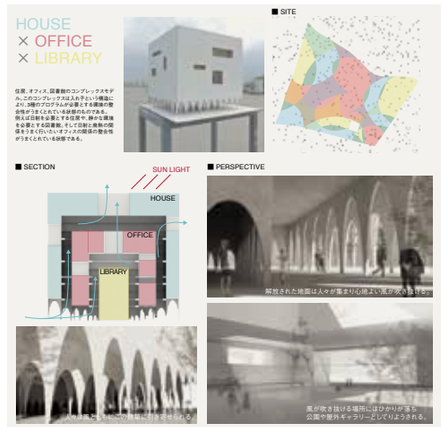
Natsumi Kijima



講評:渇水の地域で水を溜めたいという目的で設計されている。中央に向かって水が溜まっていくプロセスをしっかりデザインしている。フラットなところに一度水が落ちて、そこから中央に流れるという順序になるよう、屋根の形状を決めているところがとても良い。また水が溜まるところを風上に置くことで、冷気を送るように設計されている。ありそうでない、大変面白い建築である。役所として必要なスケールを保ちつつ、雨水のための設計を試みている。(末光)

林拓真 ｜ Phyllotaxis Apartment ―葉序の集合住宅―

Takuma Hayashi



講評:これは自然界にある共生の原理を利用して設計されている。共生というより、寄生に近いかも知れない。樹木に寄生しているキノコのように、樹木にもキノコにもメリットがあり、いわゆる相互補完的なものを都市の再編成と建築の提案まで持ち込めている。建築の提案は多少稚拙であるが、設計の着眼点(スタート地点)は高く評価できる。(末光)

安原幹ユニット　Motoki Yasuhara Unit

快適な建築

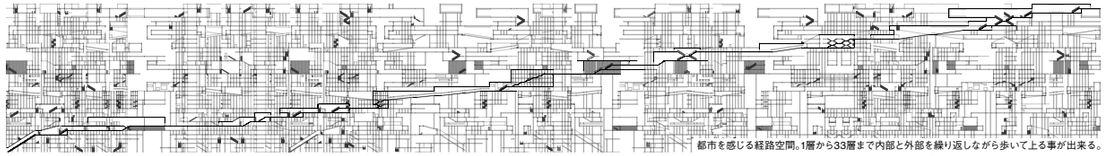
Comfortable Architecture

建築における環境・エネルギーの問題に対し、より空間的・身体的なアプローチを求める。これまでのように標準的な目標性能を先に設定し、いかに少ないエネルギーでそれを達成するかを課題にしていたのでは、エネルギー消費を劇的に下げることはできないと思われる。だから、目指す性能自体を変えてしまう。そのためには、建築家的視点で、新しい「快適さ」 を示す必要がある。建築を「快適さ」から考えて欲しい。

Environmental and energy problems in architecture demand a more spatial and bodily approach. It is unlikely that dramatic reductions in energy consumption can be achieved by proceeding in the conventional manner of setting standard performance targets and then trying to achieve them with less energy. Instead, change the performance targets. Do so by thinking from an architectural viewpoint about spaces that offer a new kind of "comfort".

林拓真 ｜ 都市礼拝

Takuma Hayashi

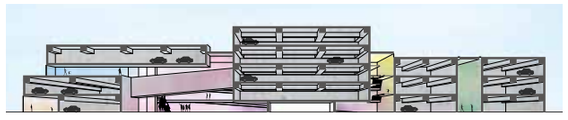


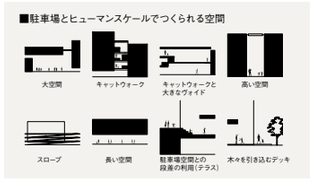
都市を感じる経路空間。1層から33層まで内部と外部を繰り返しながら歩いて上る事が出来る。

講評:故人と向き合う、という行為を都心に埋め込んだときに、どのような建築空間と風景が生まれるか。問題設定自体は目新しくはないが、ありそうな建築からとことん離れて設計した持続力を評価する。ここを訪れるひとりひとりのアクティビティを、体験レベルでもう一歩具体的に描き出せば、さらに凄みのある建築となるだろう。その意味では、課題における個人個人にとっての「快適さ」への問いかけは巧妙にずらされているのだが、公園のようでいて、建築のようである見慣れない何かを結果としてつくりだしたから、それはそれで成果だと思う。(安原)

木島奈津美 ｜ REVISION

Natsumi Kijima





講評:徹底して「快適」につくられているショッピングモール建築への疑いから出発し、「買い物」という行為自体の未来のあり方を含む構想に挑んだ。提示された建築の空間形式は、実は美術館に近いのだけど、そこで展開されるアクティビティのモードは今までにないものだ。設定の秀逸さが新しいアクティビティのモードと、空間の新しい意味を発生させていることは高く評価できる。本当はここから先が面白いのであって、もう一歩踏み込んで建築的格闘を経れば、もっと飛距離のある提案になるだろう。(安原)

山代悟ユニット　Satoru Yamashiro Unit

まちぐらし:まちを一つの宿のように楽しむための仕掛けをつくる

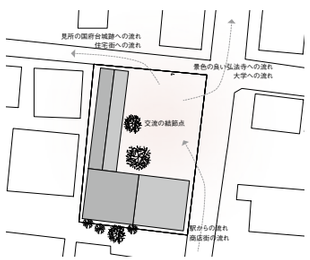
City Living – Creating Systems for Enjoying the City Like a Temporary Home

地域が来訪者に提供すべき体験を、「まちぐらし」と名付ける。地方都市の再生において「観光」はひとつのキーワードで、「まちぐらし」は新しい観光のありようとして大きな可能性を持っている。この課題では、各自が選んだ「まち」（なんらかの理由で現在活力を失っているエリア）が「まちぐらし」を提供する場となるために必要なハードとソフトの提案を作成する。

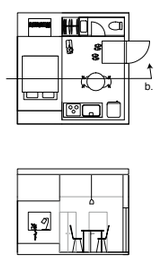
"City living" is a name for the experience that a region should provide to visitors. In the renewal of provincial cities, one of the key words is "tourism", and "city living" offers great possibilities as a new mode of tourism. Select a town or city that for some reason has experienced a loss of vitality, and propose the hardware and software that would be necessary to provide "city living".

高橋真有 ｜ まち暮し ―本と暮らす―

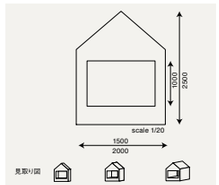
Mayu Takahashi



図書館の配置　1/1,200



宿泊施設　1/300



家具のダイアグラム

講評:市川の通りの歴史から説き起こし、古本という小さなスケールから始まって、家具、東屋、小建築、通りまでのスケールを丁寧に計画した。古本という多くの人が関われるきっかけから拡がり、実際に通りの魅力をつくりあげるプロジェクトにつながるリアリティがあった。一つのエリアを一つの宿のようなものとして捉え、空間体験と時間体験をともにデザインするという「まちぐらし」のコンセプトを良く表している。(山代)

渡邊諒 ｜ 堤外地ぐらし ―岐阜長良鵜飼屋地区―

Ryo Watanabe

講評:鵜飼で有名な長良川の洪水で氾濫する地域に、洪水からの避難にも使える「まちぐらし」のための機能をまちに埋め込む提案。既存の観光客の集客力のある鵜飼とそのための既存の観光施設群の裏通りに広がる現在は観光客は少ないエリアに可能性を見いだし、小規模な施設によってまちの魅力をプレゼンテーションしている。洪水対策から導かれる立体的な構成はまちの既存の通りの役割を拡張する可能性をもっている。(山代)

新任教員紹介

山名善之（准教授）

初見学先生の後任として着任し、卒業研究生8名と大学院生1名、私を含め計10名の小所帯で新研究室をスタートさせました。昨年まで在籍していた工学部の修士2年生4名が葛飾校舎から通ってきて研究室ゼミを行っています。
2号館4階の研究室開設準備からの3カ月ほどは、研究室の環境整備を行う毎日でした。4月に新入生を迎えるにあたり3月末から、山名研前補手、院生と、魅力的でもあった旧初見研の鉄骨足場でできた中2階をバラし、壁のペンキを塗り直しました。4月初旬には山名研（理工）1期生になる新4年生と一緒に本棚や机などの図面を描き、ホームセンターに通っては材料を購入搬送して組立作業を行いました。ゴールデン・ウィークが過ぎたところで、やっと研究室に電燈が灯り通常の研究室活動ができるようになりました。

自己紹介を少々。
1990年に理科大を卒業、香山アトリエ／環境造形研究所に4年ほど勤め、その間に、「彩の国さいたま芸術劇場」などのいくつかの公共施設の設計・監理を担当しました。27歳のときに渡仏、フランス政府給費留学生としてパリ・ベルヴィル建築大学にて美術教育による建築再教育を受け、EU認証のフランス政府公認建築家dplgを取得しました。前後してパリ大学Iにおいて研究活動を開始し、フランスの温室を源とするガラス鉄骨建造物の工業化過程、技術史研究で博士（美術史）を取得しました。学業・研究の傍ら建築家アンリ・シリアニ・アトリエなどに勤務、国立ナント建築大学で契約講師（MC）を行いながら、結果としてパリ滞在が8年になりました。

研究テーマを少々。
パリ滞在中にDOCOMOMO[*1]やICOMOS[*1]の活動に参加して以来、帰国後もこれらの国際的ネットワークのなかで、近現代建築の価値評価指針と保存活用計画の策定などが主なテーマになっています。これらに関連し「国立西洋美術館」を含む世界遺産推薦書類「ル・コルビュジエの建築作品―近代建築運動への顕著な貢献―」にも帰国前から取り組んできました。
また、フランス国立アーカイブズでの研修から建築資料のアーカイブ化も継続研究課題となっています。一昨年度から文化庁官房政策課内におかれた国立近現代建築資料館設立に伴い、統括主任建築資料調査官として非常勤兼務していることもあり、この資料館とも連携しながら研究室活動を行なっています。
上記のふたつのテーマは別個のものではなく連関しながら、建築のサステイナビリティと建築の歴史的価値の創出につなげることを目指しています。高度成長期に我が国の建築学科が挙って研究対象とした新築時の建築ではなく、竣工後30年、50年以上経過した「半過去」の近現代建築を対象とした史的価値を重視した計画学を目指しているのも山名研の特徴と言えるかもしれません。

近年、日本においても近現代建築に文化的、歴史的価値を見出すようになってきており、この分野における学術的整備が求められています。今後、山名研では上記のDOCOMOMO、ICOMOSなどの国際組織と連携しながら、アジア、太平洋地域を基盤にしながら国際的な視野のなかで、調査、研究室活動を行なっていきたいと思っています。

*1　モダン・ムーブメントにかかわる建物と環境形成の記録調査および保存のための国際組織（Documentation and Conservation of buildings, sites and neighborhoods of the Modern Movement）
*2　国際記念物遺跡会議（International Council on Monuments and Sites）

山名善之研究室ができました！

2014 年沖縄にて夏合宿

建築と人とをつなぐアットホームな研究室
初見学研究室
［建築計画］

Hatsumi Lab.
Architectural Planning

Manabu Hatsumi,
Professor

①ゼミ旅行バリでの集合写真
②ゼミ旅行バリでの夕食の様子
③ B4 論文提出時の集合写真

国内外における集合住宅や集落での人間関係の形成･平面計画･空間構成、公共施設における建築計画、住宅計画など、構築環境を使い手の視点から捉える研究を行なっています。実際にフィールドに身を置いての現地調査を重視した研究スタイルをとっています。設計にも力を入れており、学外でのコンペなどで多数の入賞成績があります。研究室内の活動としては、東南アジアでの学外ゼミや、他大学との合同ゼミ、合同野球大会などを行なっています。
今年で33年の研究蓄積があり、卒業生は幅広い分野で活躍しています。

2013年度の研究テーマ
［修士論文］
- にぎやかさを持つ公共図書館の音環境及び影響に関する研究
- 屋外仮設イベント空間における空間構成と滞留行動に関する研究
- 長野県大鹿村にみるヒッピーの暮らしと住まい
- 高齢者の隠居屋における住まい方とその自立性

［修士設計］
- 高層マンションにおける共有空間の提案
- 神域都市を空想する
- 整頓と循環

＊初見教授は2013年度で退任されました。

体験と創作を重んじる歴史･意匠
川向正人研究室
［建築史･建築論］

Kawamukai Lab.
History and Theory of Architecture

Masato Kawamukai,
Professor

①中学校 WS で木組みのベンチを制作
②小学校 WS で小布施の中の居場所の立体絵図を作成
③子供たち、親、学生が協力して子供たちの居場所づくり

近代の創造神話・機械美学を解体し「場所」「身体」の視点から建築を再構築するために、調査研究から各種のワークショップ(WS)まで幅広く活動しています。社会との多様な接点を求めて大学の外に飛び出し、長野県小布施町に「東京理科大学・小布施町まちづくり研究所」を創設して、行政や住民と協働するまちづくりに挑戦しています。大学の研究室では、建築史と建築論をむしろ理念的に、純粋に研究しながら、まちづくり研究所では、風土や生活環境やコミュニティといった生きた現実と取り組み、それを守り育てていくための研究を続けています。今年度は、町内の小学３年生全員を対象に「居場所づくり」、中学１年生全員を対象に伝統的木工技術を発展させた「ベンチづくり」というWSを実施しました。

2013年度の研究テーマ
- チェスキー・クルムロフの建築的動態に関する研究
- シドニー・オペラハウスの構造と装飾
- テクトニックの観点からのフランク・ロイド・ライト研究
- ウィリアム・モリスの反修復思想
- 古文書・絵図による小布施の水路研究
- 小布施の空き家の実態調査と再利用提案

建築デザインの理論と実践
岩岡竜夫研究室
［建築計画･意匠･設計］

Iwaoka Lab.
Architectural Planning and Design

Tatsuo Iwaoka,
Professor

①スリランカの農村の幼稚園で、竹と麻ひもによる遊具を製作。
②恒例のゼミ合宿での集合写真、今回は屋外ベンチなどを製作。

すべての建物は「寸法」によってその形や空間が決定されています。建物や空間の寸法(サイズ)は、人びとの思考や行動に対してさまざまな影響を与えています。私の研究室では、特に建物のスケール(大きさ)やモジュール(単位空間)に関する調査をベースとして、建築物、外部空間、街並、集落、都市空間などにみられるデザインの解読を試みています。そうした調査研究と並行して、住宅を中心とした実際の設計活動を展開し、新しい建築空間の創造に挑戦しています。

2013年度の研究テーマ
- 住宅建築に関する研究および設計
- 建築の構法および素材に関する実践的研究
- 近代建築作品および伝統的集落に関する調査研究

三度の飯より、設計が好き!
安原幹研究室
［建築設計］

Yasuhara Lab.
Architectural Design

Motoki Yasuhara,
Associate Professor

①陸前高田市、高田東中学校学校づくりワークショップ
②陸前高田市コミュニティ図書館における移動式展示書架の提案（78～79 頁関連記事）
③ゼミ風景

縮小社会の到来を背景として、日本における建築設計のフィールドは一見すると狭まりつつあります。しかしそうした時代だからこそ、設計のスキルを粛々と磨き上げ、それが真に求められているフィールドに分け入って有効に発揮することが、求められているのだと思います。本研究室では実社会との接点をもった活動を通して、都市空間や地域社会における建築設計の役割について思考を続けています。年間を通じて行うゼミは、単に個々人の論文や設計をまとめることを目的とするものではなく、設計をめぐる今日的なテーマをメンバーで共有し、議論するための場です。自由闊達な議論の中から、新しい建築空間のイメージや設計手法を開発していくことを目指しています。

2013年度の研究テーマ
［卒業論文］
- 震災復興の過程で生まれた「小さな公共空間」に関する研究
- 建築における環境のムラに関する研究～ブラジル近現代建築を対象として
- 現代建築における「屋根」の研究

都市への好奇心と創造性を培う
伊藤香織研究室
［都市デザイン］

Ito Lab.
Urban Plannning

Kaori Ito,
Associate Professor

①ミネソタ大学建築学部との合同デザインスタジオ(2013/5/30-6/8)
②国土交通大臣賞（最優秀）を受賞（第15回まちの活性化・都市デザイン競技）
③宮城県気仙沼市鮪立集落での復興まちづくりWS

2013年度の研究テーマ
- 筑後地方の町家再生と新規出店
- 廃校の利活用
- 河川沿いの船窓景観
- 大学周辺での学生の立ち寄り行動
- 屋外広告物の分布と可視域

21世紀は都市の時代と言われています。人びとの幸せな生活とサステイナブルな社会の実現のためには、都市がうまく機能していくようデザインされなければなりません。本研究室は、分析を通して都市の性質を捉え、デザインを通して都市のあり方を提案します。対象は、都市圏のような広域スケールから広場のベンチのような身近なスケールまで、インフラ整備や都市建築のようなハード面から都市ブランディング戦略のようなソフト面まで、広範にわたります。そのためにも、まず自分たちが積極的にまちに出て都市の喜びを発見し、都市の可能性を引き出していきたいと考えています。

照明よ、大志を抱け
吉澤望研究室
［建築光環境・照明環境］

Yoshizawa Lab.
Building Enviromental Engineering

Nozomu Yoshizawa,
Associate Professor

①フランスのル・トロネ修道院に研究旅行
② 2012 年のゼミ合宿
③修士の発表会後の集合写真

2013年度の研究テーマ
- LED を利用した美術館照明手法の研究
- 自然光の変動知覚を考慮した照明環境
- 現象としての光照明知覚の仕組みの解明
- 次世代オフィス照明に向けた検討
- フォトンマッピングを利用した照明・建築設計手法の開発

＊2013年9月より、フランス、リヨン市のENTPE（Ecole Nationale des Travaux Publics de l'Etat)にて在外研究中。関連記事74 ～ 75頁

本研究室では、建築環境分野の中でも特に光に特化した研究をしています。光は建築空間の視覚的効果を考える上で欠かせない要素であり、また省エネルギー性といった観点から光の有効利用を検討することも重視されるようになってきています。さらに最近ではLEDや有機ELなど新しい照明器具の登場により、これまでになかった照明効果を生み出すような照明手法も可能となってきています。そうした中で本研究室では、さまざまなアプローチから光・照明に関する研究に取り組むとともに、国内外の光の建築の実地調査、研究室ゼミ合宿、他大学との交流など季節ごとのさまざまなイベントを通して、楽しく活発に研究活動を進めています。

建築環境から未来を見つめる
井上隆研究室
［建築環境・設備］

Inoue Lab.
Building Enviromental Engineering and Facilities

Takashi Inoue,
Professor

卒業式後の研究室謝恩会にて

2013年度の研究テーマ
- 先進的ガラスとブラインド制御による熱と光のコントロール
- 超高層オフィスビルにおける窓際環境とエネルギー消費
- 昼光利用による照明の省エネルギー
- 先進的オフィスビルの空調システム
- 住宅のエネルギー消費と住まい方ならびに環境負荷低減
- 住宅における給湯用エネルギー消費の実態とモデル化
- 建築における資源循環・LCA（ライフサイクルアセスメント）
- 建築における木質バイオマスの有効利活用と環境負荷低減

地球環境・都市環境の枠の中で、エネルギー・資源をいかに効率的に活用し快適な空間・環境を創るかという研究を進めています。対象は、住宅の1室から超高層ビルなど建築全体、さらに都市や地球環境のスケールまでに及び、実験・数値シミュレーション・調査の各手法を駆使して、研究を進めています。具体的には、省エネルギーと快適性の両立を図る先進的窓システムに関するテーマ、住宅のエネルギー消費の実態に関するテーマ、建築・住宅の環境負荷削減に関するテーマなどがあります。2013年度は、修士2年11名、修士1年5名、学部4年12名の計28名が所属していました。研究する時も、遊ぶ時も、バイタリティにあふれ、沢山の刺激のもとで活動しています。

建築材料学的視点で建築を見よう!
兼松学研究室
［建築構造・材料］

Kanematsu Lab.
Building Material Engineering

Manabu Kenematsu,
Associate Professor

①実験棟で BBQ ♪
②研究室集合写真
③軍艦島調査

2013年度の研究テーマ
- 建築物の耐久設計手法の構築、最適維持保全計画の策定手法の構築
- 建築物の環境影響評価
- 中性子利用技術の建築分野への適用

日本の高度成長の原動となった建物は、現在その多くが維持更新の時期を迎えつつあり、いかにそれらをメンテナンスし耐久性を高め、かつ環境に配慮しながら維持再生していくかが大きな課題となっています。兼松研究室では建築物の耐久性を精緻に予測するシミュレーション技術や、その維持管理戦略に加え、21世紀の大きなテーマである建築物の環境側面に関する問題について、建築材料学的視点から研究しています。とくに、2013年度は、中性子を用いた火災下におけるコンクリート爆裂現象の解明実験や、軍艦島や国立競技場といった近現代RC造建築物の耐久性調査などの研究などを実施しました。ナノスケールの最先端の材料科学研究から実構造物調査まで、マルチスケールの研究にチャレンジすることで幅広い視点を養います。

構造設計者を育成するためには…

北村春幸研究室
［建築構造・材料］

Kitamura Lab.
Structural Design

Haruyuki Kitamura,
Professor

2013 年度ゼミ合宿（山中湖）

北村研究室では，動的外乱に対する構造設計に役立つ研究を主体としています。研究対象は、低層建物から超高層建物までとさまざまで、より安全な免震・制振構造の発展をめざし、日々、研究活動に勤しんでいます。研究室には約30名の学生が在籍し、研究テーマごとにグループとなり、先輩から後輩へと過去の蓄積が伝えられています。外部との研究会も多く、連携大学院である電力中央研究所の金澤客員教授をはじめとする研究者や、第一線で活躍する実務者との交流も盛んです。そのためか、修了生の多くは設計者の道を選択しており、構造設計者が育つ環境が、この研究室のどこかにあるようです。

2013年度の研究テーマ
- 免震・制振構造に関する研究
- 長周期地震動対策に関する研究
- 構造ヘルスモニタリングに関する研究
- 地震動作成手法に関する研究

都市を守る耐震設計法の開発

衣笠秀行研究室
［建築構造］

Kinugasa Lab.
Structural Engineering

Hideyuki Kinugasa,
Professor

春の研究室発表会の後で、理工学部７号館前にて

首都圏直下型地震による莫大な経済損失の発生とそれにより引き起こされる深刻な環境破壊が懸念されています。建築物の耐震性能を、耐震工学だけでなく経済学の面から適切に評価し、必要な性能を確実に確保できる設計法の開発が求められています。本研究室では、「大地震」「都市機能維持」「建築物の修復性評価」「経済性」「性能間のトレードオフ関係」をキーワードに、

1）大都市東京はどの程度の地震まで耐えられるのか?

2）地震に強い都市はどうすれば実現できるか?

という2つの課題を掲げ、耐震工学および経済学の両面から、都市経済を支える建築物の設計法について研究を行っています。

2013年度の研究テーマ
- 地震後の都市機能維持を設計目標とした建築設計法の開発
- 耐震工学および経済学の両面からの建築物の性能評価法の開発
- 超高層RC造架構の性能評価法に関する研究
- 免震構造の最適性能設計法に関する研究
- 地震時経済損失の観点からの建物および企業の耐震性分析

地震に屈しない、明日へ

永野正行研究室
［構造力学］

Nagano Lab.
Structural Mechanics

Masayuki Nagano,
Professor

①研究室ゼミ旅行（登別温泉）
②日本建築学会賞講演の様子（北海道大学）
③木造建物の振動台実験（つくば）

永野研究室では、震源断層での地震波発生から、大きく揺れる建物の中の人の体感までを総合的に調査し、地震に屈しない未来を目指し日々研究に励んでいます。超高層集合住宅の地震被害に関する研究では、3.11地震時の室内被害に関するアンケート調査を行い、居住者の揺れの体感や家具の転倒状況と建物の揺れの関係を明らかにしました。木質建物の耐震性に関する研究では、実大木造軸組架構の振動台実験に基づき、次世代を担う制振装置の開発に取り組んでいます。そのほか、理論計算による想定地震時における各地の揺れの推定や、地震時の液状化地盤における杭基礎の耐震性に関する研究を行っています。2013年には日本建築学会賞（論文）を受賞し、これらの研究成果は対外的にも高く評価されています。

2013年度の研究テーマ
- 超高層集合住宅の室内被害と居住者の体感に関する研究
- 制振装置を付加した木造軸組架構の耐震性向上に関する研究
- 理論計算に基づく地震波と長周期地震動の発生メカニズムに関する研究
- ヘルスモニタリングに基づく杭基礎の損傷評価に関する研究

未来の安全を設計する

大宮喜文研究室
［建築防災・安全］

Ohmiya Lab.
Building Safety Engineering

Yoshifumi Ohmiya,
Professor

①大勢の人が観覧に訪れるオープンキャンパスでの模擬実験
②毎年多数行われている日本建築学会や火災学会での発表
③研究室夏合宿での集合写真

建築物の火災に対する安全性は、主に建築基準法と消防法の2つの法規を遵守することにより確保されています。これらの法規は、これまでは仕様書的規定を主体とする基準が定められており、近年の建築技術の高度化などによる建築形態の変化に対応するため、肥大化、複雑化する傾向にありました。その結果、設計の自由度を阻害したり、建設コストを増大させたりするなどの問題が指摘されています。画一的な仕様規定から自由度の高い性能規定へ移行し、合理的な火災安全設計を行えるようにするため、火災安全工学に関する基礎的研究をはじめとし、防火関係基準の性能規定化の一助となるような研究を大宮研究室では精力的に行っています。

2013年度の研究テーマ
- スプリンクラー等を用いた木造建築物の延焼拡大防止に関する研究
- 区画内の初期火災性状に関する実験的研究
- 新しい避難安全検証法の構築に関する研究
- 視覚による異変感知時間に関する研究
- 建築物の区画間の延焼拡大性状に関する研究

学生デザインコンペティション入賞者一覧（2013.4～2014.3）

コンペ入賞者氏名	コンペ名	受賞結果	入賞作品タイトル	審査員	掲載情報
塚本慎一郎	甍賞　学生アイディアコンペティション	佳作	瓦堤―人と海と島を堤む瓦の堤防―	森暢郎、栗生明、山田勝雄、野口安廣、佐々木賢一、福原幸蔵	-
土屋秀正、佐々木嶺、塚本慎一郎、宇田川真、菊地優介、林拓真	第1回ヒューリック 学生アイデアコンペ	優秀賞	SPORTS COMPLEX 2020	隈研吾、伊香賀俊治、亀井忠夫、根本祐二、畠中克弘、西浦三郎	日経アーキテクチュア2013年11月10日号、日経アーキテクチュア「新しい建築の鼓動2014」
佐藤聖	JACS 全日本学生建築コンソーシアムコンペ2013	佳作	相反する住処	吉田 研介、Manuel Tardits、赤松 佳珠子	-
星洸祐	JACS 全日本学生建築コンソーシアムコンペ2013	佳作	「塀がもたらすもの」街区の豊かさを射程に入れた住宅の振舞いの検討	吉田 研介、Manuel Tardits、赤松 佳珠子	-
佐々木嶺、土屋秀正、塚本慎一郎、宇田川真、菊地優介	日本建築学会設計競技	関東支部入選	自然に呼応する器	粕谷淳司、川原晋、佐藤慎也、永廣正邦、柳澤潤	建築雑誌2013年11月号
上原慧史	2013年度 日本建築学会設計競技	東北支部入選	AFTER LANDSCAPE	速水清孝、錦織真也、小杉学、須田眞史、恒松良純	建築雑誌2013年11月号
林拓真	第15回「日塗装ポスターデザイン画コンテスト」	佳作	-	一般社団法人 日本塗装工業会	-
林拓真、土屋秀正、佐々木嶺	第20回空間デザインコンペティション	最優秀賞	Nature in the Furniture	安田幸一、山下保博、平田晃久、大下純夫、馬場璋造	新建築2013年11月号
佐藤伸彦、土屋秀正、林拓真	第1回ショッピングセンターリポジショニング・コンペティション	特別賞	160mのおもてなし	中城康彦、三橋博巳、古谷誠章、末廣香織、平瀬有人、矢木達也、コメルツ・リアルAG、サヴィルズ・ジャパン株式会社	-
原彩乃	住宅課題賞2013	1等	別荘=もうひとつのイエ	金田充弘、川辺直哉、坂下加代子、宮晶子	『建通新聞』/『建設通信新聞』 10月22日（火）掲載
塩山茂臣、近藤洋一	「新・木造の家」設計コンペ	最優秀賞	巻きあがる通り庭	鈴木祥之、五十嵐勉、井出光俊、伊東龍一、梶原秀康、野口安廣、前川康、増田和彦、三島伸雄	-
TUS Digital Studio （伊藤真彬、上原雄貴、菊地純平、志波友樹、西村直気、関根卓哉、草谷悠介、田野口紘大、西田幸平、岡武和規、木村友美、成田冴子、大桃耕太郎、小幡知哉、山岸一樹）	TOKYO DESIGNERS WEEK 2013　学生作品展	ASIA AWARD 学校賞セミグランプリ、シモンズ賞、そごう・西武賞、森ビル社賞	Soft Kill Pavilion-X	池坊美佳、潮田洋一郎、加藤公敬、川上麻衣子、川上元美、隈研吾、小林武史、小山薫堂、佐藤可士和、田淵諭、鶴田浩、根津公一、日比野克彦、茂木健一郎、諸永裕一、今村有策 各国大使館、会員企業、プロ展出展クリエイター、学校作品展出展教員	-
土屋秀正、林拓真	エイブル presents「THE PRESEN」 空間デザインコンペティション	3位セミファイナル通過	僕たちの僕たちによる女の子のためのベランダ	谷尻誠、梁瀬泰孝、茂木健一郎、清川あさみ、川崎健二	TOKYO DESIGNERS WEEK.tv
土屋秀正、林拓真	TOKYO DESIGNERS WEEK　推薦クリエイターコンテナ	出展	空間は家具に宿る	-	TOKYO DESIGNERS WEEK.tv
仲俣直紀、佐藤聖	第27回建築環境デザインコンペティション	佳作	干潟の呼吸	古谷誠章、伊香賀俊治、田中孝典、西沢立衛、原田仁、日置滋、安田幸一、馬場璋造	新建築2014年2月号
林拓真、土屋秀正、佐々木嶺	第1回あなぶきスタイルコンペ2013	優秀賞	女の子の楽園	谷尻誠、白井良邦、片山正通、穴吹忠嗣	-
近藤洋一、範雪奇	第1回あなぶきスタイルコンペ2013	佳作	隣の庭先両隣	谷尻誠、白井良邦、片山正通、穴吹忠嗣	-
星洸祐、堀口裕	第1回あなぶきスタイルコンペ2013	佳作	「大きな共益費と小さな家賃」	谷尻誠、白井良邦、片山正通、穴吹忠嗣	-
仲俣直紀、田澤孝祐	第2回タマホームデザインコンペティション2013	佳作	移植の家	塚本由晴、千葉学、小野田泰明、西沢立衛、玉木康裕	CasaBRUTUS2014年2月号
仲俣直紀、近藤洋一	第40回日新工業建築設計競技	佳作	滲む家	六鹿正治、北山恒、山梨知彦、乾久美子、長谷川豪、相臺公豊	新建築2014年1月号
佐藤伸彦、花摘知祐	長谷工住まいのデザインコンペティション	優秀賞	猫が空をながめるみたいに	隈研吾、乾久美子、藤本壮介、池上一夫	新建築2014年2月号
星洸祐、川上萩子、小田健人、草谷悠介	第2回大東建託 賃貸住宅コンペ	入選	「LA FETE DES VOISINS “隣人祭り” のある賃貸住宅」	小泉雅生、五十嵐淳、鍋島千恵、小林克満	新建築2014年3月号
伊藤香織、中畑昌之、荒井隆太郎、上原慧史、堀口裕、大矢遼太、川上萩子、髙橋真有、竹中翔、吉田恵子、小田健人、草谷悠介	第16回「まちの活性化・都市デザイン競技」	まちづくり月間全国的行事 実行委員会会長賞	「城址公園都市」	西村幸夫、石川幹子、岸井隆幸、高見公雄、藤本昌也、廣瀬隆正、東村新一	-
仲俣直紀	トウキョウ建築コレクション2014	Astrid Klein賞	揺れる建築	Astrid Klein、篠原聡子、羽鳥達也、日埜直彦、吉村靖孝	トウキョウ建築コレクション（2014） 全国修士設計・論文・プロジェクト展
森島英子	2014年 第6回 Cリーグ（3年生合同課題講評会）	最優秀賞	空気の輪郭	木谷靖孫、重村力、内藤将俊、宮崎浩、元倉真琴	Cリーグ作品集
星洸祐	JIA関東甲信越支部 大学院修士設計展 2014	奨励賞	「空気の翻訳」	伊東豊雄	-
草谷悠介	東京理科大学合同卒制展	2位	空白からの享受	来場した市民	-
遠藤優斗	東京理科大学合同卒制展	3位	「空間の形」―連続する空間を持つ建築―	来場した市民	-

UNGA BOOK 2013
東京理科大学理工学部
建築学科設計作品集 2013

Design Work of Department of Architecture
Faculty of Science and Technology
Tokyo University of Science

発行日
2014年7月31日

発行
東京理科大学理工学部建築学科
〒278-8501 千葉県野田市山崎2641
tel: 04-7122-9417　fax: 04-7125-7533
URL: http://www.rs.noda.tus.ac.jp/architec/

編集委員
岩岡竜夫　伊藤香織　安原幹　丹羽由佳理　水野貴博　柄沢祐輔

編集協力（学生）
木島奈津美　花摘知祐　鈴木弦　渡邊諒　塩山茂臣
林拓真　島村香南江　小幡知哉　矢萩智　近藤洋一
北川千尋　高橋真有　白鳥悠人　吉田恵子　関谷武亮

企画編集
有岡三恵（Studio SETO）
柴田直美

デザイン
加藤賢策（LABORATORIES）
内田あみか（LABORATORIES）

デザイン協力
大原慎也（ARROW MARK）

英訳
Thomas Donahue

写真（**カバー、カバー裏、P.1**）
鈴木研一（鈴木研一写真事務所）